
白い病院の中で

ライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い病院の中で

【Nコード】

N8815Q

【作者名】

ライト

【あらすじ】

第二十九章更新！巴のもう一つの願いとは？——幼なじみである翔と巴。しかし、巴は幼い頃から今に至るまで入院生活を続けていた。その原因は自分だと責任を感じる翔。そして高校2年の夏、巴は翔にあるお願いをしてきた。その願いを叶えるため、2人はかけがえのない思い出作りを始める。病の苦しみ、気持ちの理解、責任の大切さ。王道の感動恋愛小説！

プロローグ

あの日のことは、今でも鮮明に覚えていた。

忘れることができない。いや、忘れることは許されない過酷な思い出。

今思えば、悔しさと哀れさに襲われた苦い記憶。

毎日、心が蝕まれる思いがした、消えることがない罪悪感の塊。

俺が犯した罪は重い。

それに伴う罪滅ぼしは、果たすことはできたのだろうか……。

あれは幼稚園の年長組のときの夏だった。

この日は特別に暑く、気温30度を超える猛暑だった。

夏休みに入った小学生は休みを有効に楽しく使っていた。

旅行や買い物、海や山に出かける者が多かった。

親が仕事などで行けない者は、友達と自転車に乗って駆けまわっていた。

家が隣で、入園したときから仲が良かった瀬川翔と春風巴は、そ

の日一緒に近くの公園で遊ぶことにした。

遊びに誘ったのは翔だった。

昔から毎日のように大好きな公園で遊んでいるが、その回数は日が経つに連れて少なくなっているのだ。

翔は、今回はどうしても遊びたく、すぐに二人の親に交渉した。

遊ぶことは普通のことと、親はすぐに承諾するものだろう。

しかし、二人の親は、頑として許すことはなかった。

翔は泣いた。

わからなかった。どうして遊ぶことができないのか。

理解できず、玄関の前で一人体育座りをしてうずくまり、涙を流していた。

その後ろ姿を見ていた巴は、優しく声をかけ、翔の手を取り、親に黙って外に飛び出した。

二人は走って公園に向かった。

親に見つかからないように、巴は懸命に走った。

翔も、もうすぐ公園で遊べると思い、この気持ちを抑えきれず、巴よりも前に出て走っていた。

二人が向かった緑山公園には、ブランコや砂場、滑り台や鉄棒など、他の公園と比べて楽しい遊具がたくさんある。だから、この公園はお気に入りなのだ。

着いたときには、公園には誰もいなかった。

時刻はすでに5時を回っていたので、子供たちは帰ってしまったのかもしれない。

翔は貸切りだと思い、好きなだけ遊べるので胸が躍るような思いがした。

「さっそく遊ぼうっ！」

巴と遊べると思えるだけで胸が弾んだ。

翔が勢いよく中に入っていく。

巴は走ったせいか息が乱れ、右手でぎゅっと胸を押さえつけていた。顔は尋常じゃない汗でいっぱいだった。

このときに、翔は巴の状態が異常なことに気づくべきだった……。

二人はまず、大好きなブランコに乗った。その隣に巴が座る。

翔は一番ブランコが大好きだった。翔は空に届くような勢いでブランコを漕いだ。

前に進む度に、風が顔や体に襲いかかる。それが好きだった。そして、高いところまでいけるのが好きだった。

楽しそうに笑っている翔に代わり、巴はさっきから漕いだりせず、うつむいた顔で、脚を地面に着けて、ゆっくり動かして座っているばかりだった。

そこで翔は、巴はブランコがおもしろくないのだろうと思い、砂場で遊ぶことにした。

砂場に着いたとき、急いで来たので道具を持って来ていないことに気づいた。

そこで、砂の山を作ることにした。これなら道具は必要ない。

翔はさっそく自分の周りにある砂を掻き集め、山を作っていた。

最近雨は降っていなかったので、砂は乾燥してしまい、小さな砂埃がたっていた。

それを巴は吸い込んでしまい、何度も咳き込んでいた。

何度も崩れやり直した砂の山はようやく完成し、次はトンネルを掘ることにした。

二人して反対側からゆっくりと穴を広げていく。崩れ落ちないように、慎重に進めていった。

そして、無事崩れることなくトンネルは通過し、二人は手を握った。

完成することができ、翔は嬉しそうな顔して巴を見る。

巴も小さく笑みを浮かべるのだが、すぐに表情を崩し、悲しげな眼をしていた。

それから、さまざまな遊具で遊んだ。

しかし、翔はじっとして遊ぶのを飽きてしまった。

せっかく広い遊び場があるのでおもいつき走り回りたい。

そこである提案をした。

「ねえ、鬼ごっこしよう」

それを巴は否定することなく了解する。

じゃんけんをして、逃げる側と追いかける側に別れる。

結果、巴が勝ち、翔が負けたので、鬼である翔は十秒数えた。

数え終わった翔は巴を追いかけた。

巴は息を切らし、胸を抑えながらも翔から逃げる。

いつもなら、はしゃぎ声を上げ、楽しそうに逃げるのだが、この日は、声一つ上げず、ただ必死に逃げるだけだった。

そして、巴はすぐに捕まってしまった。

「次は巴ちゃんが鬼だよ」

翔は巴から逃げた。巴はその場で十秒数え、翔を追いかけ始めた。

翔は楽しそうに逃げ回る。巴はその後ろを必死に追いかけた。息を切らしながら、一生懸命に追いかける。

巴は左手を胸に抑えながら激しく息をしていた。そのときの表情は、とても苦しそうだった。

そして、十分くらいして、翔はとうとう巴に背中を触れられた。

「捕まっちゃった。次は僕が鬼だね」

翔が後ろを振り返る。

そこには、自分の胸を苦しそうに押さえ、汗を大量に流して倒れている巴の姿があった。

「巴ちゃん？」

翔は首をかしげて巴のそばに座った。

まだ幼稚園児の翔には、これがどういうことなのかわからなかった。

翔は巴の肩を揺らす。巴は目を固く瞑り、荒い呼吸をしていた。

そのとき、後ろから声が聞こえた。

「巴！」

二人の親が走って公園に入ってきた。

巴の状態を見た二人は、すぐに救急車を呼んだ。そして巴はお母さんに抱き起こされ、何度も名前を呼ばれた。

巴はそつと目を開くと、翔を見て微笑んで言った。

「また……遊ぼうね」

翔はその言葉を聞いてうなずいた。

なぜかは説明できないが、このとき、もう一緒に遊べないのではないのかという過程が頭をよぎった。

巴は翔を見届け、ゆっくりと目を閉じた。

それから十分くらいして、救急車は到着し、巴とその母親は近くの病院に運ばれた。

翔はその光景を、ただ黙ってじっと見ていた。

その後、翔はお母さんにこっぴどく怒られた。叩かれもした。

そこで、初めて知った。

巴が重い病にかかっていることを……。

幼稚園に入園し、半年してから状態が悪くなり、何度も病院で検

査をしていた。

今の状態ではとても外で遊べるほどの体力もなく、病気を悪化させるだけだと言われている。

巴本人も、そのことを知っていた。

それにも関わらず、優しい巴は泣きじゃくる翔を見て遊んでくれた。

翔は一人部屋の隅にいた。電気も着けず。窓から差し込む月の光だけが中を照らしていた。

今わかったのかもしれない。自分がした、大きな過ちを……。

そして、自分がすべき役目を……。

第一章 病院

あれから12年が経った。

翔は高校2年生になった。

翔が入ったこの河守高校は、自宅から近いという理由で入り、特に伝統もなにもない、ごく普通の高校だ。

強いてもう一つ理由を上げるとすれば、病院に近い場所に位置している。

もうすぐ夏休みに入るということで、教室内ではその話で持ちきりだった。

二年生の翔たちは、来年は受験生である。

来年は遊んでなんかおられず勉強の毎日だ。

そこで、最後と言っても過言ではない夏休みを有意義に過ごそうとしていた。

そんな中、一人窓際の席に座り、空を眺めていた翔は、夏休みの予定や楽しい行事などを考えもしなかった。

すでに予定は決まっている。

それは毎年行われているある役目を、今年も繰り返すだけだ。

放課後になり、生徒はみな部活に行くか、家に帰ったり、遊びへと赴く。

「翔、これからみんなでカラオケ行くんだけど、お前も行くだろ？」

翔のクラスメイトが輪になって誘ってきた。周りには5人の生徒が同じように翔の答えを待っている。

「悪い。ちょっと寄るところがあるんだ」

翔は笑いながらみんなに両手を合わせて頭を下げた。

「なんだよ、今日もかよ。いつもノリが悪いぞ。たまには行こうぜ」

「だめなんだよ。大事な用なんだ。明日、みんなの点数教えてくれ」

そういつて翔は鞆を持つとさっさと教室から出て行った。

翔は校内の駐輪所で自転車に跨ると、足に力を込め急いでペダルを漕いでいった。

目的地に向かう前に、いつもの花屋で花を買い、スーパーで手ごろな果物を買った。

疲れても、その勢いは止めようとはせず、額から汗が流れても気にしなかった。

そして、街一番の大きさと医療設備を誇る真っ白な病院に着いた。

この病院は河守総合病院と言い、大抵の入院患者はここにいる。

翔はいつもの駐輪場で自転車から降りると、乱れた息を軽く整え、タオルで汗を拭うと入り口に向かって歩いて行った。

中に入った瞬間、涼しい冷気に体が包まれ、さっきまでかいていた汗がみるみるうちに引いていった。

「あら、翔くん。今日も来たのね」

受け付けの看護婦が翔の姿に気づいた。

何度もここに足を運ぶので、ほとんどの看護婦や医者には顔を覚えられていた。

翔は看護婦に挨拶する。

「こんにちは。今面会は大丈夫ですか？」

「大丈夫に決まってるでしょ。早く行ってあげなさい。彼女が待ってるわよ」

看護婦は優しい笑みを浮かべ翔を急かしてくる。

翔は看護婦の軽い冗談に笑いながら、会釈をしていつものように入院部屋に向かった。

何度も繰り返ししてきた通路、一番上の5階に上り、お目当ての502号室を探す。

扉の前で息を整え、制服の乱れを直し、ドアのノブを捻り中に入った。

「よう、巴。元気にしてるか？」

翔は大きな声を出して満面の笑顔を見せた。

「翔くん。ここは病院だからもう少し静かにして。怒られるのは私なんだからね」

巴は笑いながら優しく翔を注意した。

病室内は一台のベッドに、隣に小さな台の上に花瓶の中に入っている花とノートパソコン。大きな窓と一脚の椅子があるだけだ。

巴はベッドの上に座っている状態でいた。膝の上には読みかけの本が置いてある。

「悪い悪い。ほら、今日もお花持って来たぞ。あと果物も。今剥いてやるよ」

「いつもありがとう」

巴は翔にそっと微笑んだ。

「いいんだよ。巴が早く退院すれば」

翔は近くにあった椅子をベッドの脇に置き、そこに座ると持参していた果物ナイフでりんごの皮を剥き始めた。

その間、巴はパソコンを膝の上に置き起動し始めた。

「また小説？」

翔は起用に皮を繋ぎながら訊いた。

「うん。入院中はこれしかやることないしね。けっこうおもしろいんだよ」

巴は入院してから、親が退屈だろうと思い、パソコンを誕生日にプレゼントしたのだ。それから巴はワープロで小説を書くようになった。

たまに翔も手伝うのだが、内容はまだ知らなかった。

「それ、いつ読ませてくれるの？」

「え？ 読むの？」

巴が驚いた表情になった。

「当たり前だろ。小説は読むためにあるんだ。俺に読ませてくれな
いの？」

「い、いや。そういうわけじゃ……ないんだけど……」

「じゃ、なんだよ？」

「それは……。まあ、いつか読ませてあげるよ」

「約束だぞ」

巴は戸惑いながらも、約束してくれた。

そして、しばらく静寂な時が続き、聞こえるのは翔がりんごを剥く音と、巴のキーボードが叩かれる音。

剥き終わった翔は、りんごを食べやすい大きさに切りそろえ、お皿に乗せて渡した。

「できたぞ」

「うん、ありがとう」

巴はパソコンを一時中断し、りんごをおいしそうに食べ始めた。

そして、翔はそっと視線を降ろし悲しげな眼をした。

「巴……。ごめんな。俺のせいで入院しちゃって……」

巴はりんごを食べながら笑顔で答える。

「もう気にしなくていいんだよ。どうせ入院すると思ってたし。でも、毎日来てくれるよね。わざわざ私のために」

「それは俺の責任だし。……それに……」

「それに？」

「いや、なんでもない」

翔はうつむいて何も言わなくなった。

巴は話題を変えようと口を開く。

「ねえ、もうすぐ夏休みだね。翔はどこか旅行とか行くの？」

翔は？　　ということは、やはり巴はどこにも行かないようだ。

遠出できるような体力もなければ、いつ発作が起きるかもわからず、ここから抜け出すことはできない。

翔は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「いや、どこも行かないぞ。予定なんてないな」

「それなら友達と遊びに行けば？　海行ったり、旅行なんていいね」

しかし、翔は首を振る。

「みんな宿題とか、親の実家に帰ったりして、そんな時間ないんだ。それに、俺の友達みんな部活してるから、遊ぶ暇なんてないみたいだし」

「そうなんだ」

巴は納得した表情になりふんとうなずく。

それを見て翔は深く追求して来なかったので心の中で安堵した。

「だから、夏休みの間は、ここに毎日来るからな。どうせ家に居ても暇だし」

翔はニカッと笑顔を見せる。

「それなら部活とかしたら？ 昔からスポーツ得意だったじゃん。小学生のころはサッカーしてたし。また始めたら？」

翔は小学一年生からサッカーのクラブチームに所属していた。六年生のときはキャプテンを務めるほどだった。

ポジションはフォワードで、大会で何点ものシュートを決めた。大会で優勝したこともあり、最優秀選手にも選ばれた。

その天性の運動能力を買われ、いろいろな中学から推薦が来た。しかし、翔はそれをすべて断った。サッカーは小学生までと決めていたからだ。

そのおかげで、親は猛反対したが、翔の決意は固く、最後はおしきることができた。

翔は巴の質問に首を振る。

「今からサッカーしても体力ないしな。他の部活に入っても、もう遅いし」

翔は立ち上がると、窓を開け外を眺めた。

外には小さな公園が見えた。病院の前には、気分転換やちよつと

した運動ができるように敷地内に広場を作っている。

遊具などはないが、ベンチやアスファルトの散歩道がある。

今では車椅子に乗った老人が周りに生えてある木を眺めたり、小さな子供が走り回っていた。

「そう……」

巴が呟き、お互い無言になる。少しして、巴が話しかけてきた。

「それならさ、私のお願い、訊いてくれない？」

「ん？　なんだよ。お願いって」

翔は外を眺めるのを辞め、巴の方に振り返った。

「うん。それはね――」

そのとき、ちょうどドアが開かれ、外から巴の母親が入ってきた。

「あれ、翔くん。今日も来てくれたのね。いつもありがとう」

巴の母親は手に持っていた紙袋を置いて、かいていた汗をハンカチで拭きながら声をかけてきた。

「いいえ、いいですよ。これぐらいしかできませんし。……あと、その、僕のせいで巴を入院させてしまい、すみませんでした」

翔は姿勢よく頭を下げた。それを見た巴の母親は、あきれた顔し

て翔の顔を上げさせた。

「もうそれは聞き飽きたわ。私と会うたびにその言葉を繰り返して、耳にたこができそうだわ。もう気にしなくていいのよ。翔くんの責任じゃないんだし。それに、何度もお見舞いに来てくれるだけで十分。もう謝らないでね」

「そうよ。翔は悪くないんだから」

二人からそう言われても、翔は心の中は罪悪感でいっぱいだった。取り返しのつかないことをしたのだから。しょうじき、恨まれても仕方ないとも思っていた。

「ありがとうございます……」

翔はそう言って、持ってきた花を花瓶に入れようと手に持ち、病室から出て行った。

巴の母親が紙袋を持ってくるのは、今から着替えるからである。

翔は廊下に出て水道に向かった。

そのときにあることに気づいた。

「あ、そういえば、巴のお願い聞いてなかったな。あとで聞いてみるか」

翔は鼻歌まじりに花を花瓶に入れる。

しかし、結局部屋に戻っても、巴はそのことには後で良いと言いつつ話さなかった。

この願いが、生涯忘れられない夏休みになるとは知らずに……。

第二章 少年

巴は病院の前にある広場に出た。

天気が良いので車椅子に乗り、外の空気をおもいつきり吸った。

清々しい空は、青く眩しかった。気持ちよく、眠たくなりそうな陽気は心が穏やかに染まっていく。

巴は車椅子を動かし奥に入っていく。

すると、ベンチに腰掛け、文庫本を開いて読んでいる一人の少年を見かけた。

そよ風が吹き、その少年の目元まである前髪をさっと揺らしている。

その少年は、翔と同じ制服を着ていた。となると、一緒の河守高校ということになる。

彼は読んでいた本を閉じると、ふっと軽く息を吐きこちらを見てきた。

「こんにちは」

少年は優しいげな笑みを向け話し掛けた。

巴も笑顔を見せ、そっとお辞儀をした。

「こんにちは。あなた、河守高校の生徒ですよね？ 私の幼なじみも、同じ高校に通っているんですよ」

そう言うと、彼は穏やかに微笑んで言った。

「僕はまだその高校に通ってはいませんよ。今日退院したので、明日から通うのです」

「あ、そうなんですか。退院おめでとうございます」

巴は車椅子に座りながら、上半身だけを少し動かして頭を下げた。

「ありがとうございます。……春風巴さん」

その言葉で、巴は疑問を抱いた顔で上げた。

「どうして、私の名前を？」

彼はまた小さく笑いながら説明した。

「あなたの担当医が教えてくれたんです。あなたと同じ病気を抱え込んでいるので、自分一人が苦しんでいるんじゃないって。そのときに、あなたの名前を聞いたのです。よく廊下とかですれ違ったりしたんですよ」

「そ、そうなんですか。すみません、ご存じなくて……」

「いいえ、かまいませんよ。そういえば、僕はまだ名乗っていませんね。僕は秋元創あきもと はじめと言います。どうぞよろしく」

創はベンチから立ち上がり、巴に向かって手を差し伸べた。

巴はその手を握って握手を交わした。

「頑張ってください。きっと、病気は治りますよ。それまで、希望を捨てないことです」

「はい。わかりました。ありがとうございます」

そのとき、創の母親らしき人が、こっちに向かって手を振っているのが見えた。

「それでは、僕はそろそろ行きます。たしか、巴さんの病室は502号室でしたね。たまにお見舞いに来てもよろしいですか？」

「はい。もちろん、いいですよ。ぜひ来てください」

創はにっこりと笑うと、手を振って母親の元に向かった。

巴はその光景を見届け、病室の中に入っていった。

次の日、朝から翔の教室内はある噂話で持ち切りだった。

その噂話をしているほとんどが女子生徒なのだが。

「今日来る転校生男子だって」

「かっこいい人かな？」

「私は可愛い人がいいな」

女子たちは群がって黄色い声を上げている。

その反面、男子の方では少しがっかりとした感じに落ち込んでいた。

「ああ、来るのは男子なのか。女子が良かったな」

「ま、そういうなよ。男子同士、仲良くしてやろうぜ」

「そうだな」

皆転校生がどんな人なのか気になり、その話題は尽きることはなかった。

翔は夏休みを、巴とどんな風に過ごすか、そればかりを考えていた。

行動範囲は病院の敷地内。この狭く限られた空間の中で何をしようか。

すると、教室のドアが開かれ、いつもは待ってもいないのだが、今回だけ待ちわびた担任教師が入ってきた。

「ほら、席に着け」

その合図で皆早々に席に着く。

先生は軽く咳払いしてホームルームを始めた。

「まずは知っていると思うが、転校生を紹介する。入って」

先生に呼ばれ、廊下で待っていた転校生が中に入る。

その生徒は体が細く、肌は日焼けを知らないというくらいに白い、そして穏やかな表情をしており、全員は初対面とも限らず落ち着きを持っていた。

転校生は先生にチョークを渡され、黒板に名前を書いていく。

「初めまして。秋元創です。幼いころから入院して、知らないことばかりです。皆さんと仲良くなれたらと思います。どうぞよろしくお願いします」

創は礼儀正しくお辞儀をする。

その創を見て、女子たちからの評価は高かったらしく、温かく迎えられるていた。

翔は何とも思わず、みんなと一緒に拍手を送る。

創は爽やかに笑顔を見せ、みんなの顔を見渡していく。

そのとき、二人は目が合った。

その瞬間、創の目の色が変わったことに、翔は気づいた。

昼休みになると、翔は売店で買ったパンを掴み、教室で友達と食べていた。

そのときだ。

「瀬川翔くん、ですよね？」

男子の輪の中に、創が入り込んできた。

翔は少し警戒心を持ちながら答えた。

「ああ。そうだけど」

創はニコツと微笑む。

「ちょっと、いいですか？」

「え？ あ、ああ……」

翔は立ち上がると、創と共に教室から出ていった。

二人は廊下を歩き、そして屋上へと辿り着いた。

創はフェンスを掴み、そこから見える景色を眺める。

その後ろ姿を翔は見ていた。

「それで、俺に何か用か？」

翔は創の隣まで歩き、地べたに座り込んだ。

「はい。君に聞きたいことがあるのです」

創は笑みを浮かべながら見下ろしくる。

「その前に自己紹介しましょうか。僕は秋元創。創って呼んでくれればいいですよ」

「ああ。俺は――」

「瀬川翔くんですよ？ 知ってますよ」

「ああ、そうだったな」

「はい。そして、幼いころから入院している幼馴染がいるということもね」

その言葉に翔は警戒心を強めた。そしてハッと上を向いて創を見る。

そのことを知っているのは誰一人いない。一言もそのことに関して話したことはないのだ。

「お前、どうしてそれを……」

創は優しく微笑みかける。

「僕も入院生活をしていたんですよ。つい昨日まで。あの、……河守総合病院でね」

その病院名は巴と同じところだ。

翔が黙っていると、創から口を開いた。

「もうわかると思いますが、僕が君を知っているのは何度かあの病院で見かけたからですよ。担当医の先生が教えてくれたんです。君と友達になりたくてね。まさか一緒のクラスになるとは思ってもみなかったですけど、嬉しかったですよ」

「そ、そうか……」

「はい。君はこの生徒の誰よりも入院というものを知ってそうですしね」

「ま、まあな。よく病院には行くし」

「でも……」

そこで創は冷たい視線を向け、翔を睨み付けた。

「病気というものは、知らない」

その眼を見て、翔は一瞬恐怖を感じた。

なんだろうか、今の感じは。人の感情が、ここまで伝わるものなのだろうか。

「翔くんは、今まで入院するほどの、重い病気にかかったことはありませんか？」

「……いや、ないけど」

「そうですね。うん。やっぱり健康が一番です」

創はフェンスに背もたれ、空を仰ぎ見る。

「白い籠に閉じ込められ、見ることもできない我慢の日々は、苦痛しか得られない。それに加え、毎日いつ治るのかもわからない病気の闘い。……苦しいものです」

「そ、そうだな……」

「……翔くんって、呼んでもいいですか？」

「え？ あ、ああ、いいぞ」

「はい。それでは、翔くんは、風邪くらいは引いたことはありますよね？」

「ああ、それくらいあるよ」

「うん。人間が一番かかりやすい病気の一つですしね。でも……」

創は座り込むと、じっとぶれることのない視線で見つめてきた。

「病気の苦しみは、同じ病にかかったものにしかわからないんですよ」

創の冷気が襲うような声に翔は身震いする。

そんな翔を見て、創はまた穏やかな笑みを浮かべた。

「それじゃ、僕は先に教室に戻りますね。これから仲良くしましう。……翔くん」

創は手を振りながら屋上を後にしていく。

翔はその場におり、チャイムが鳴るまで、動けないでいた……。

その様子を、屋上の入り口で創は不敵な笑みを浮かべて見ていた。

第三章 医師

転校生が来たその日、翔はいつもよりも力を込めて自転車を漕ぎ、河守総合病院を訪れる。

しかし、翔はすぐに巴の下には向かわず、その前にある人物に会いに行った。

今診察中だったら会えないが、そうでないことを祈り、目的の人物の部屋をノックする。

「どうぞ」

中から男の声が聞こえた。どうやら都合良くいるようだ。

翔はドアノブを捻り、中に足を踏み入れた。

「こんにちは。先生」

翔のお目当てである先生は目の前で椅子に座り、書類の記入に忙しそうにして、こちらを振り返った。

「やあ、翔くん。どうしたんだい？」

先生の名前は水瀬慎^{みなせまこと}。まだまだ若く、歳は二十代後半。

東大の医学部卒で、異例の若さでこの病院の医師として務め、医学界でも期待されているほどの名医である。

巴の担当医でもあり、3年前から務めている。何度も顔を合わせることにより、こうやって気軽に訪れる真柄になった。

「今日うちのクラスに転校生が来たんですよ」

翔はドアを閉めると、いつものパイプ椅子を引っ張り出し、慎先生の前に座る。

「はは。秋元創くんだろ。一緒のクラスになって良かった。仲良くしてやってくれよ」

慎先生はコーヒーの入ったカップを二つ机に置き、一つを翔に渡した。

「俺のこと教えたの先生でしょ？」

翔はお礼を言い、カップに口をつけた。

「はは。同い年で同じ高校だったからね」

「かまいませんけど、仲良くなれるかわかりませんよ。なんか俺逆に嫌われている感じでしたし」

「はは。彼も入院生活が長かったからね。友達作りもまだわかんないんだろう。でも、勉強はけっこうできる方だと思うぞ。入院中もずっと本か勉強ばかりしてたからね」

慎先生は書類の記入をしながら答える。

「聞いてもいいですか？ 彼がどんな病気にかかっていたのか」

「ああ。まあ、言ってもいいか。彼は巴ちゃんと同じ病だよ」

「……え？　じゃ、じゃあ、巴も治るんですか？」

翔はその場に立ち上がるほど興奮してしまっていた。

それを慎先生は翔の肩に手を置いて座らせる。

「すぐに治るとはいえないが、可能性はあるはずだ。あの難病を彼は完治させたんだからね。ただ、彼よりも巴ちゃんのほうが病気の進行が深く、その分遅れるといった感じだ」

「そ、そうですか……」

翔はがくつと肩を落とす。

「大丈夫だよ。きっと治してやるさ。そのために僕はここに来たんだからね」

「……はい。お願いします」

翔は丁寧に頭を下げる。

「ああ。最善は尽くすつもりだよ」

慎先生は懷からタバコを取りだし一服する。

「あれ？　ここで吸っていいのですか？　いつも屋上なのに」

「え？ あ、ああ、すまない。ついな」

そういつて慎先生はすぐにタバコを灰皿に押し付け火を消す。

そのとき、翔は少しだけ焦りを覚えた。

慎先生がタバコを吸うのは自分を落ち着かせるためだ。緊張やその場の雰囲気から逃げるために。例えば、手術の前や相手に何か隠し事をするときなどだ。

となると、先生は何か隠している。

もしかして、巴のことじゃ……。

「あ、あの、先生」

「ん？ なんだい？」

慎先生はコーヒーを一口啜る。

「先生が診るに、今の巴の状況は、深刻なほど悪いのですか？ 治る可能性はどのくらいなのでしょう？」

その質問に慎先生は一瞬だけ表情を曇らせたが、すぐにパッと笑顔になった。

「正確なことは言えないが、治る見込みはある。翔くんが心配しなくても大丈夫さ。僕を信じて」

「あ、はい。わかりました……」

慎先生は最後に優しく微笑みかけ、書類の整理に移る。

翔は立ち上がると室内にあるさまざまな資料を眺め始めた。

慎先生の部屋には多くの書類や本、研究資料などで溢れている。

どれを読んでも難しく、一般人には理解できないものばかりだ。

……これはあくまで仮説だが、もしこのまま巴の病気が治らなかつたら、どうすればいいのだろうか。

巴がああなったのは俺の責任だ。俺が無理やり遊ばせたから……。

翔は書類に目を向けるのを辞め、慎先生に振り返る。

「あの、先生」

「ん？ なんだい？」

慎先生は書類に記入しながら声だけ返事する。

「その……医者になることって、大変なことなんですか？」

「え？」

そこで慎先生は振り返り、少し啞然とした表情で翔を見る。

そして唇を緩ませ、説明し始めた。

「そりゃ、簡単なことではないさ。人の命に関わる仕事だからね。生半可な気持ちや努力じゃなれっこないさ」

「そうですね……」

「ああ。大学の医学部を卒業したからすぐに医者になれるとも限らないし、資格もたくさん獲らないといけない。最初は安月給だし、その割に雑用やら仕事や夜勤とやることはありすぎる。おまけにその間に論文や研究発表などの準備もしないといけないし、ほんと辞めたくなる仕事だよ」

「ほんと、大変そうですね」

「うん。そうだね。でも、最後は喜びが待ってるんだよ」

「え？」

慎先生はそつと壁に貼られてある写真に目を向ける。そこにはここを退院した多くの患者の写真があった。

「病気が治るとみんな笑顔になる。その瞬間が、たまらなく嬉しいものだ。そして、人の力の不思議さを実感する。人間は複雑で理解し難い生き物だが、素晴らしくもある」

翔はそつと笑みを浮かべた。

「そうですね」

翔はさっき考えていた案を心の奥にしまい込んだ。

「さて、今から巴ちゃんの診察に行きますか。翔くんも来るかい？」

「廊下までなら」

診察は聴診器を当てたりするので、さすがに翔は中には入れない。

そんな翔に慎先生はクスクス笑う。

「なんなら、翔くんが聴診器で巴ちゃんを診てみるかい？ お医者さんごっこだ」

「か、からかわないでくださいよ！」

「はっはっはっ」

慎先生は大笑いしながら、頬を赤くする翔の肩を叩いて巴の部屋に向かった。

診察が終わると、翔も中に入り、三人が居合わせる。

「とりあえず、今は大分安定してるし、新しい異常もない。このまま治していこう」

「はい」

巴は嬉しそうにうなづく。

「それじゃ、僕はこれで。次があるからね。翔くんは、面談終了時

刻までには帰るんだよ」

そういつて先生は部屋から出ていく。

「良かったな。早く治るといいな」

「うん。そうだね。そしたら、私も翔くんと同じ高校に行きたいな」

「それにはまず転入試験に受からないとな」

「うん。毎日ちゃんと勉強してるよ」

「そっか。偉いな」

翔は巴の頭を撫でてやる。巴は可愛らしく、えへへと笑う。

「あ、そういえば、今日転校生来なかった？」

巴が手をパチンと手のひらを合わせ思い出したかのように言う。

「ああ。来たぞ。同じクラスだ」

「そうなんだ。優しそうな人だよね」

「うん。でも、なんで巴が知ってるんだ？」

「この前庭で会ったんだ。そのときに友達になったの」

「そっか。実はな、そいつも巴と同じ病気だったらしいんだ」

「え？ そうなの？ あ、でも、そんなこと言ってたかも」

「ああ。だから、お前もああして治して学校に通えるんだよ。だから頑張っていこうな」

「うん。そうだね」

巴は満面の笑みを見せる。

そこで翔はあることを思い出した。

「あ、そういや夏休みなんだけど、巴は何かしたいことがあるか？俺はほら、どうせ暇だから時間は有り余るほどあるし。巴のしたいことしようぜ」

その質問に巴はうつむき、視線を下げる。

「うん……。そうだね……。それなら……」

しかし、巴は口を閉ざし、ゆっくりと首を振った。

「ううん。やっぱり、いいや。……また今度話すね」

「あ、そ、そうか」

巴が何か言いたいことがあるということとはわかる。しかし、それはいったい何なのだろうか。

結局、その日も、巴が自分の願いを打ち明けることはなかった。

第四章 宣告

学校も残り一週間となり、待ちに待った夏休みへと向かっていた。期末試験も終わり、皆残る面倒な授業を受けるばかり。

新しく迎えられた転校生である秋元創は、あっという間にクラスにも馴染み、得意の勉強で成績は上位を占めていた。

その反面、翔はちょうど真ん中と平凡な成績だった。

そんな翔を、創は見下すようにニヤツと笑うのだった。

放課後になると、今日も巴のいる病院へと向かう。

自転車を漕いでいる途中、ポケットに入れてあった携帯が震えた。

翔は一度自転車を止め、携帯を取り出す。

着信相手は慎先生からだった。

『はい、もしもし』

『あ、翔くんかい？ すまないが、今から病院に来てくれないか？』

そこで翔は嫌な予感が走った。

『ま、まさか……、巴になにか!』

『いや、それは大丈夫。それより大事な話があるんだ』

『は、はい……』

『それじゃ、病院の屋上で待ってるよ』

そういつて慎先生は携帯を切る。

翔は電話口から耳を離すと、なぜか自転車を漕ぐ気になれなかった。

巴のことは無事だとわかってても、嫌な予感はやまらな。

慎先生がこうやって電話するのは初めてだった。

翔は何とか心を落ち着かせ、自転車を漕ぎ始めた。

病院に着くと、受付の看護婦から屋上で慎先生が待っていると言われ、ゆっくりと階段を上っていく。

エレベーターを使っても良かったのだが、なぜか使う気になれなかった。

使えば数秒とあっという間に着いてしまう。それが嫌で階段を選んだ。

体が拒否しているのが分かる。聞きたくない、行きたくないと拒んでいる。

でも、その気持ちを打ち破り、全てを受け止めなければならない。今上る階段が、天国へと繋がってそうで、恐怖心が芽生えてしまった。

屋上に着くと、真っ先に見える空模様はどんよりとした厚い雨雲が覆われていた。

蒸し暑く、むわっとした暖気が襲いかかる。

高い場所に居ても、風はまったく吹いてなかった。

慎先生は端の方で一人タバコをふかせていた。

翔が近づくと、足音で気づいたのか、こちらを振り返った。

「あ、来たね。待ってたよ」

「……話って、何ですか？」

翔の語尾は震えていた。それに気付いたのか、慎先生は穏やかに笑みを浮かべ目を細める。

「ああ。そうだね。その前に……」

慎先生はフェンスに背もたれながら、タバコの煙を吐く。

「翔くんは、……死というものを、考えたことはあるかい？」

「……死、ですか？」

「そう」

慎先生はタバコを携帯灰皿に押し付け火を消す。

「仕事柄、僕は人の死を何度も見てきた。この世に未練を残すもの、愛すべき人を残すもの、全てをやり終えたものと、さまざまな想いを残し、この世から去って行った」

慎先生は再び新しいタバコに火を点ける。口から放たれた煙が風に流され見えなくなっていく。

「人は死から逃れることはできない。これは絶対的掟であり、生き物全てに与えられた決定事項だ。でも、その死がいつ訪れるかは、それぞれによって違う。早いものは生まれてすぐってこともあるし、長い年月を超えたあとの可能性もある」

慎先生は口から出た煙を空に向かって吹きかけ続ける。翔はその姿をじっと見ながら聞いていた。

「つまり、いつ来るかわからない死期までに、どれだけ満足に、後悔しない生涯を送られるかということが大切なんだ。僕はその死期が少しでも伸ばせればいいと思い、この仕事に就いた」

翔はぐっと拳を握った。嫌な予感が、悪寒が背中を走る。

慎先生は問いかけてきた。

「翔くんは、死をどう考える？」

「……わかりません。そんなこと、考えたこともありません。ただ……」

翔は視線を降ろし、乾いた唇を舐めた。

「……死ぬことは怖いです。僕もですが、それよりも……その死でもう会えないということが……」

その答えに慎先生はうなずく。

「それだけわかっていれば十分だろう」

慎先生は真剣な目つきに変わる。その眼を見て翔は少し怖気づいたがぐっと耐えた。

「君には正直にいう。今日君に来てくれたのは……実は巴ちゃんのことだ」

「っ」

翔の表情が一瞬で絶望へと変わる。

「で、でも、さっき、電話で巴のことではないって……」

「すまない。君を動揺させたくなくて……」

慎先生は続ける。

「君は巴ちゃんが一番の友人であり、信頼できるからこそ伝える」

「……はい」

慎先生は重い口を開いた。

「……今の巴ちゃんの状態は……良くない」

「なっ」

そこで翔は怒り任せに慎先生の白衣の胸ぐらをおもいっきり掴んだ。

「きっと治すって言ったじゃないですか！　そのために来たって……良い方向に向かってるって……。あれは嘘だったんですか！」

先生は胸ぐらを掴まれても動じず翔を見ながら答える。

「……患者にストレスを与えないためだ。だから君に話したんだ」

「あんたは医者だろ！　病気を治すのが専門だろ！　だったら治してくれよ！　巴を助けてくれ！　あいつはまだ何もしてないんだ……。まだ何一つ楽しんでないんだ！　頼むよ、先生！」

翔の目にはいつしか涙が溜まっていた。その涙が頬を伝って流れていく。

慎先生は目を瞑り、申し訳なさそうに首を振る。

「君は、医者という仕事を誤解している」

「……誤解？」

「医者はね、病気を治すことが仕事じゃない。病気を治す手伝いをするのが仕事なんだ。病気を治すのは、その人が治したい、生きたいという精神力と、生まれ持った治癒力だけだ。……この世に、万能薬は存在しないんだから」

翔の手の力は緩み、いつしか慎先生の胸ぐらを離していた。

「……君に頼みたいことがある」

「……はい」

「巴ちゃんに……後悔のない人生を送らせてあげるんだ」

翔は目を赤くしながら黙って聞く。

「もちろん、僕もまだ諦めたわけではない。これからだって、最善の治療を続けるつもりだ。でも、彼女に残された時間は……もう少ないはずだ」

翔は黙って耳を傾ける。

「………」

「だから、彼女が、巴ちゃんがしたいと思うことに協力してあげてやるんだ」

慎先生が翔の肩を掴む。

「これは君にしかできないことだ。できるね？」

翔はどう反応したらいいのかわからなかったが、仕方なく小さくうなずく。

「まだこのことは巴ちゃんには話してなし、話すつもりもない。無理にストレズを与える必要はないし、精神的負担が増すからね。このことは僕と彼女の両親と親しい友人だけの秘密だ。……頼んだよ」

慎先生は最後に翔の頭を掴み、そして屋上を後にした。

翔の頭にはある言葉が何度も復唱されていた。

『彼女に残された時間は……もう少ないはずだ』

もうすぐ巴と別れる……。もうすぐ巴が消えてしまう……。もうすぐ……。巴が死んでしまう……。

そう思うだけで、体の震えが止まらなかった。

翔はその場にひざまづく。

そのとき、上から大粒の雨が降り出した。

その雨の中に、翔の涙も入り混じっていた……。

第五章 焦燥

雨が降り続くその日、翔は巴の部屋に訪れることなく家路に着いて行った。

今の気持ちのまま、巴に会いに行く気になれなかった。

もうすぐ、いなくなってしまう……。

そう思うだけで、翔の心に重く何かが押し掛かってくる。

おそらく、それは責任だ。

自分が幼いころに巴を無茶させたという責任。

そして、巴のために、悔いのない残りの人生を送らせないといけないという責任。

この二つの責任が同時に、精神をまいらせるほどの重圧をかけてくる。

これから自分は何をすればいい……。

誰かに相談すれば、巴のために行動しろというのがほとんどだろう。

そんなことは分かっている。冷静を欠いた自分でもわかっているつもりだ。

ただ、そのために何をしたらいいのかわからないんだ。

巴は同じ17歳。自分でもまだやりたいことはたくさんある。

なのに、巴のしたいことがたった数日でできるはずがない。

まして、巴は幼いころから様々なことを禁じられてきた。

言わば、巴はやりたいことなど、何一つ成し遂げていないのだ。

その中から限定して選べなど、できるはずがない。

「くそっ！」

翔は地面に向かって持っていた傘を投げ飛ばした。

飛ばされた傘は風圧で無様に転がり、クルクルと回る。

そして上から降りつけてくる冷たい雫が容赦なく襲いかかる。

雨が翔の頭から制服を濡らしていき、体温を奪っていく。

どうしたらいいのだろうか……。誰か指示をくれ……。

もう、自分にできることが思い浮かばないんだ……。

そのとき、頭から降る雨が遮られた。

翔はゆっくりと後ろを振り返る。

そこには黒い傘を持って翔を入れている創の姿があった。

「濡れますよ？」

その言葉に反応することなく無言を続け睨み付ける。

創はやれやれといった感じに息を吐き、近くにあった傘を拾うと翔に渡す。

「ちょうど良かった。ちょっと、付き合ってもらえませんか？」

創はポケットにあった白いハンカチを翔に差し出す。

翔は躊躇ったが、そのハンカチを受け取りうなずいた。

二人が訪れたのは病院に近い場所にある喫茶店だった。

雨の影響か、店の中は閑散としており、客もそこまでいなかった。

二人は奥の席に着き、向かい合って座った。

「何か頼みますか？ 気にしなくても、僕が誘ったのですから、今回はおごります」

創が穏やかに笑みを浮かべる。

翔は少し考え込んだが、ホットコーヒーを注文し、創はココアを頼んだ。

注文の品が届き、創が一口啜って会話が始まった。

「……慎先生から聞きました」

その言葉で翔の体がびくつと反応する。

「巴さん、容体が悪いようですね。病気が思ったよりも進行してるらしいです」

「……なんでお前が知ってるんだ？」

創は軽く笑って答える。

「僕も数少ない巴さんのお友達です。そして、同じ病気を患ったものとしてね」

本来、患者の病状やその他のプライバシーに関わることは家族以外には他言できないはず。

翔の場合は家族と同等の信頼があるからこそ知らされた。創にも同じくらいの信用性があるとは思えない。

「ま、そこまで敵対しないでください。もちろん、僕も元入院患者として、プライバシーを侵害するつもりもないですし、話したところで僕に利益はありませんから」

それを聞き翔は一旦そのことに関するのを考えるのを辞め、創に問いかける。

「……それで、ここに付き合わせて俺に何の用だ。世間話でもしたいのか？」

創は再び笑みを浮かべる。

「ええ。そのつもりです。前にも言いましたが、君とはもっと仲良くなりたいです。僕の初めての男友達ですから」

そしてココアを啜る。

「僕も入院生活は長かったです。小中と、ろくに学校にも通えませんでしたから」

創は爽やかな笑顔を見せる。

「でも心配しないでください。もう病気も完治しましたし、普通の生活を送る上で障害もないのでいつもどおりに接してください。僕もその方が嬉しいので」

創はウェイトレスにココアのおかわりを頼み翔に顔を向ける。

「さて、次は翔くんが話す番ですよ。せつかくの機会ですから、翔くんのことよく知りたいですし。でも、いきなり話せと言われても困りますよね。では何か質問しましょう。そうですね……」

創は笑みを消し、冷たい目を向けて翔を見る。

「死、というものを考えたことは……ありますか？」

「っ」

創の目を見て、そして今の言葉で、翔は心臓を掴まれたかのような息苦しさを覚えた。

その質問は慎先生と同じ……。

そう考えるとあのときのことが蘇り、そしてあの言葉が反復する。

翔は視線を下げ、うつむきながら黙り込む。

そんな翔を見て、創は不敵な笑みを見せた。

「僕は何度もあります。いえ、死に近いものを感じたこともあります。あなたはご存じですか？ 病気の苦しみを。いえ、知るはずないでしょうね。わかるのは重い病気にかかったことのある人だけ。理解できるのも、同様の人だけです」

創はおかわりのココアが届き、ウェイトレスにお礼を言い一口啜る。

「あのときの苦しみは今思い出しても怖いものです。満足に息もできず、締め付けられ、苦しみが広がり、何度も血を吐き、身悶えても続く苦痛。……何度死にたいと思ったか、何度殺してくれと頼んだか、数えても霧がない。この苦しみがいつ終わるのかと、憔悴しきった体でそればかり考えてました」

創は未だに黙り込む翔に視線を向ける。

「僕の言いたいことは……今言った苦しみを、巴さんも感じているということですよ」

その言葉に翔はぎゅっとズボンを掴みながら拳を握り唇を噛んだ。
今言った苦しみが本当なら、創と同じ病気を抱えている、いつも
明るく元気に振る舞っている巴も、見えないところで苦しみに耐え
ていたのだ。

そうとは知らず、自分はただ回復しているとばかり思い込み……。

「……うつ……くっ……」

翔の体が震えていた。寒さのせい、恐怖のせい、それとも悔
しさのせいか……。

ただ、自分は愚かだと、改めて思い知らされたのかもしれない。

何も知らず、知ったかぶりの自分で、傲慢になり一番近い存在だ
という気になる自分に腹が立った。そして情けない気持ちになった。

創はココアを啜り、申し訳なさそうに笑顔を見せ口を開いた。

「すみません。また僕が話してしまつて。こうやって同い年と話す
のは初めてで、少し興奮しているのかもしれませんが。さ、翔くんも
何かはなしてください」

翔はそつと顔を上げ、穏やかに笑顔を見せる創を見る。

そしてゆっくりと口を動かした。

「……俺はお前みたいに病気というものを知らない。かかったこと

もないし、実体験もないから、偉そうなことはいえない」

創はニコツと微笑む。

「健康は良いことです」

翔は続ける。

「でも、その分、俺はお前らのような入院している間に、この世間のことを知った。友達の作り方、遊び方、接し方……。お前たちの知らないことを、俺は学んだ」

その言葉に創の笑顔が消えた。

翔はまだ続ける。

「だから、俺は、そのことを教えてやりたい。世間は、こんなにも楽しいものだということを……。こんなにも、素晴らしいということなんだと。そのことを、俺は巴に教えてやりたい」

翔はじつと真剣な目を創に向ける。

創はその眼に対し、じつと視線を外さず睨み返す。そしてふっと笑顔を見せ、持っていたカップをソーサーの上に置いた。

「それは良いことですね。是非僕にも教えてもらいたいです。でも、僕はこれから知っていくことなので、必要ないかもしれませんね」

創は立ち上がると、レシートの上に小銭を置く。

「それでは、すみませんが、先に帰らせていただきます。これから用事がありますので。今日はいろいろ話せて楽しかったです。またこのような機会があればいいですね。それでは」

創は鞆を持って出入り口へと向かい外に出た。

翔は目の前にあるコーヒーに目を向けていた。

そうだ。それでいいはずだ。俺は病気というものを知らない。苦しみも、つらさも、死というものを……。

でも、その分知っていることもたくさんある。

入院していたらわからないことを、俺は長い年月をかけて学んだはずだ。

そのことを、できる限り教えてあげればいいんだ。

翔はようやく強張った表情を緩め、ふっと息を吐き小さく笑みを浮かべた。

ようやく自分のすべきこと、そして役目がわかり、安堵してしまった。

自分の犯した過ち、そして責任は重いかもしれないが、できることをやればいいのだ。

翔はそっとコーヒーカップを手に取り口元に持っていく。

温かったコーヒーはすっかり冷めてしまっていた。

第六章 探索

先に喫茶店を後にした創は、傘をさすとポケットに手をつ込みながら歩き出す。

向かう先は……河守総合病院だ。

創は見慣れた場所に赴き、まるで自分の家に帰るかのような気持ちで入り口から入った。

「あら、創くん。久しぶり。学校はどう？」

受付の看護婦が話しかけてきて、創は親しみやすい笑顔を見せる。

「こんにちは。お久しぶりですね。学校はとても楽しいですよ」

「そう。良かった。今日はどうしたの？」

「はい。知人のお見舞いに来たのです」

「あら、そうなんだ。場所はわかる？」

「はい。それでは」

「うん。いつでも遊びに来てね」

創は軽く手を振ってエレベーターに乗り込む。押した番号は……

5。

五階で降りると、ドアの近くに貼られてある番号札を見落としてな
く確認し探していく。

そして目的の場所に来ると、ニヤツと笑みを浮かべてノックした。

その部屋の番号は、502号室だ。

「はい」

中から女性の声がし、創はそっとドアを開け中に足を踏み入れた。

「こんにちは」

創は爽やかな笑顔を見せる。

「こんにちは。よく来てくれました。こちらへどうぞ」

巴も礼儀正しく穏やかな声で招き入れ、創をベッドの隣にある椅子へと誘う。

「はい」

創は笑顔を絶やさず椅子に座って顔を向ける。

「すみません。ふと思ってきたものですから、何も持って来なくて
今度来るとき持ってきてしますね」

「いえ、そんなかしこまらないでください。何も持って来なくて良いので、いつでも気軽に来てください」

巴はベッドの上で嬉しそうに微笑みながら両手を胸の前で振る。

「ありがとうございます。まだ御病気は治りませんか？」

「はい……。でも、先生は治る傾向になっているとおっしゃっていましたので、きっといつか治るはずです」

「そうですか、それは良かったです」

創は心の中でちょっとだけ哀れに思っていた。

「あの、今日翔くんは来ないのですか？」

巴は少し心配気味に問いかける。創は少し迷ったが、優しい笑みを浮かべて答える。

「彼は今日はちょっと用事があるそうで来られるかわからないそうです。心配しなくても大丈夫ですよ」

「そうですか……」

巴は視線を落とし残念そうにうつむく。その表情に創は軽く舌打ちした。

思ったよりも深更しているようだ……。

「そういえば、いつも検査のない時間のときは何をしているのですか？ やっぱり本ですか？」

巴はうつむくのを止め、顔を上げると笑みを見せ答える。

「そうですね。やっぱり本が多いですけど、たまに勉強したり、あとパソコンで小説を書いたりしますよ」

そこで創の眼が変わった。

小説……？

「へえ、小説ですか。それはおもしろそうですね。あ、そのパソコンで書いているのですか？」

ベッドの反対側にある台の上に一台のパソコンが置かれてある。

「はい、そうですよ。暇なときはやっぱりこれで小説を書く時間が多いですね。自分のしたいことを置き換えて書いて、ここを退院したら実行しようと思うんです」

「それはいいですね」

創はちよつと迷ったがお願いしてみた。

「よろしければ、その中身を見させてもらえませんか？」

「えっ？」

その一言で一瞬で巴の顔が赤くなる。

「い、いや、大しておもしろくもないですし、そ、それに、私文章へタなので理解できないと思いますし……で、できれば見せたくないな……って思ってた……」

創はじつと巴を鋭い視線で見ていたが、ぱっと穏やかな笑顔に戻った。

「いえ、嫌ならいいんですよ。僕も無茶なお願いをしてしまいすみません。やっぱり恥ずかしいですよね」

「……すみません……」

「いえ、構いませんよ。僕も恥ずかしいと思いますし」

創はチラッと腕時計を見る。

そろそろか……。

「それでは、僕はこのへんで。これから用事がありますので。またお伺いしてもよろしいですか？」

創は椅子から立ち上がり頭を下げる。

「あ、はい。もちろんです。いつでも良いので来てください」

「ありがとうございます」

創は最後まで穏やかな笑みを浮かべ、巴が手を振るのを見届けドアから出る。

ドアが閉まった瞬間、笑みを消し考えにふける。

あのパソコンの小説が気になるな。それと翔に対する意識。やはり思ったよりも進んでいる。早急に手を打っておくか……。

創は一つ軽く息を吐く。

まずはあそこに行くか……。

創は次の目的地へと向かうことにし足を進めた。

目的の部屋の前に来ると、手を上げてノックした。しかし、中に誰もいなのか返事がない。

いない？ まだ診察が終わらないのか？

創はノブを捻り中に入る。

多くの書類で溢れ、窓際の前にある机は書類でいっぱいだった。

創はその前に座り、足を組んで適当に一枚の書類を手取る。

この子の病気の進行具合は思ったよりも悪いな。早急に手を打たなければ……。

そして次の書類を手取る。

この子は回復しているな。近いうちに退院か……。

創はある程度の書類の見方がわかる。慎先生に教わったし、看護師にもいろいろな話を聞いて覚えた。暇さえあれば医学書や医者についての本も読んだ。

創はいろいろな書類を勝手に読み、そしてある一枚に目が止まった。

ん？　これは……。

書類の名前のところに春風巴と書いてある。

もしかして、彼女のか……？

創がその書類に手を伸ばし掴んだ。

そのときだ。

「人の書類を勝手に見るのは関心しないな」

そこでピタツと手を止め、若干の苛立ちを込めながら振り返る。

そこにはドアを背もたれにし立っている慎先生がいた。

創は聞こえないように軽く舌打ちするといつもの穏やかな笑顔を
見せて立ち上がる。

「先生お久しぶりです。近くまで通ったので遊びに来たんですよ。
お元気そうでなによりです」

慎先生は軽く肩を上げ嘆息して近づく。

「それは嬉しいが、本当に会いに来たのは誰かな」

慎先生は手に持っていたファイルを置きコーヒーを作る。

創は軽く含み笑いをする。

「僕は先生に感謝してるんですよ。こうやって完治でき、学校にまで通うことができるようになったのは紛れもなく先生のおかげです。本当にありがとうございます」

慎先生はコーヒーを飲みながら、もう一つを創に渡し椅子に座る。

「いえいえ、少しでも患者の病気を治す手伝いをするのが仕事だからね。学校はどうだい？ 楽しいかい？」

創はパイプ椅子を出し座ってコーヒーを含む。

「ええ。とても楽しいです。みんな優しいですし、何より勉強ができるので嬉しいです。早く医学部のある大学に進学して医者になりたいですね」

慎先生は軽く笑みを浮かべる。

「医者ね。そう簡単なものではないが、アドバイスするとしたらこれかな」

「なんですか？」

創は興味津津に耳を傾け待つ。

「……医者は毎日が地獄だよ」

その言葉に創は笑みを消し真剣な目つきになる。

「どういことですか？」

「医者はあらゆる苦しみに襲われる。仕事の大変さの苦しみ、時間の無さの苦しみ、責任の苦しみ、患者の叫びの苦しみ、悲しみの苦しみ、別れの苦しみ、そして……無力さの苦しみ」

慎先生は立ち上がると外を眺めながら語る。

「特に最後の無力さに痛感させられる。この世にどんな名医や凄腕の医者が居ても、治せない病気がある。かく言う僕も、若くも名医や期待の新人など言われているが、治せなかった患者は数多くいるし、目の前で死んだ者もいる。そこで自分の無力さ、そして命の重さが押し掛かってくる。その重圧は、思いのほか一番重く、そして怖い。初めはそれだけで数週間部屋に閉じこもったこともある」

「ふふ。そうですね。でも、僕なら――」

「人は脆い。体も、心も……。だからこそ、人は死ぬんだ。まだ君は人が死ぬということを知らない。そんな人に……」

慎先生は鋭い目つきで睨みつける。

「気安く医者になるなどと言ってほしくないな」

その威圧感に創は一步あとずさる。しかし、自分のプライドの為

にぐつと堪える。そしていつもの笑みを浮かべた。

「確かに慎先生の言うとおりです。僕の軽率でした。まだまだ勉強が足りませんね。またいろいろ教えてください。それでは、僕はこれで」

創は一礼し、部屋から出て行った。

慎先生は創を見送り、椅子に座って巴のカルテを見る。

「彼は何を考えているんだ……」

創は外に出ると、まだ降っている雨を見つめ、そして傘をさすと歩き出した。

危ないな……。

第七章 少女

昨日は巴のもとに向かわず、創と喫茶店で話した後帰ってしまい、翔は騒がしい教室の中、一人机に座り外を眺めながらため息を吐いた。

今日は巴のところに行かなければならない。今まで二日連続ですっぽかしたことはない。

でもどんな顔をして会いに行けば良いのだろうか。

今の病気の進行具合を巴は知らない。今の状況は危険で、いつ生死を彷徨うことになるかわからない。

そんなときに、心配させないよう笑顔を見せいつも通りに振る舞えるだろうか。

翔は再び重いため息を吐いてうずくまる。

自信がない。どちらかというと、自分は嘘を吐くのが苦手である。

それに巴は鋭い。何か少しでも違和感を味わえば一発で気づくだろう。

自分のやるべきことは、巴にストレスを与えず、いつも通りに振る舞い、そして後悔のない人生を送れるようにしなければならない。

これが今自分がやるべき使命であり、責任を果たすための役目でもある。

失敗は許されない。巴のためにも……。

翔はチラッと顔を上げると黒板の端に書かれてある日付を見る。

明日は一学期の終業式。そして明後日からは夏休みに入る。

この夏季休暇は巴のために全て捧げよう。

そう決意したときだ。

「あの、瀬川……くん……」

「……ん？」

翔は名前を呼ばれ顔を横に向け上げる。

そこにはクラス委員長である逢坂^{あいさかなずな}齋が立っていた。

ショートカットのサラツとした髪に、ひよろつとした細身で、どこかいつもおどおどしており、人見知りなのかあまり目を合わせないし、一瞬合ってもパツと外す恥ずかしがり屋。

そんな性格だが、クラス委員長をするほど責任感と統率力がある。

でも、みんなが面倒なので何も文句を言わなさそうな彼女を推薦し決まったのだ。

今でも齋はおどおどしており、若干頬が朱を帯びていた。

「なに？」

「え、えと、瀬川くんだけ、進路希望の紙を出してないから、今日中に持っていないといけないんだけど……」

「ああ、悪い。そういや今日までだったな。後で持って行くよ」

「で、でも、先生は私が持ってくるようにと頼んだので……書き終わるまで待ちます……」

「……え？」

そして放課後、急遽二人は教室に残り進路希望を書くことになった。

すでにみんなは帰ってしまい、今教室は二人だけ。

翔は進路希望の紙を前にシャープンを構えながら悩み、その前で薺はじつと視線をキョロキョロしながら待っていた。

わざわざ待たなくても代わりに持つて行くから帰ればいいものの、薺は責任感が強いのか、真面目すぎるのか言われた通りに行動しようとする。悪く言えば応用や融通が利かず、効率性が悪い。

でも、そんな薺だからこそ、クラス委員長を任されたのかもしれない。

翔は未だ真っ白な進路希望の第一希望にペン先を何度も突きながら頭を捻る。

「そ、そんなに悩まなくても、今やりたいことを書けばいいんだよ……」

なかなか書かないので、痺れを切らしたのか薺が助言をする。

「そのやりたいことがないんだよ」

「な、なら、進学と就職どっちを考えているの……?」

「どっちかというと進学かな。まだ働こうとは思ってないし」

「そ、それなら、自分の行きたい大学を書けばいいんじゃないかな……」

「行きたい大学か……」

翔はふとある学部が思い浮かんだ。

医学部……。

「なあ、逢坂さん」

「え? あ、な、何かな……?」

「その……医学部って、やっぱり難しいかな」

「え? い、医学部? そ、それは難しいよ。だって、人の命に関わる学問だから、いっぱい勉強しないといけないし、平均的に一番偏差値の高い学部だよ……」

「そうだよな……」

翔は進路を医学部と書こうか迷っていた。正直、今の成績で医学部などと書いても笑われるだけだろう。あと一年半しかないのに、頑張ってもギリギリ間に合うかどうか……。

翔はいったんペンを置き、薺に問いかけた。

「なあ、俺が医学部目指すって言ったら……笑う？」

「え？」

薺は頭に？を思い浮かべ首を傾げる。

「……どうして笑うの？」

「え、あ、いや、そこまで頭良くないのに、医学部目指すって可笑しいかなって」

薺は珍しくおどおどせず、翔を見て応える。

「笑うわけないよ。その人が夢に向かって頑張るんだから、笑うわけないじゃない。それよりもすごく良いことだと思うよ。私応援するから頑張ってね」

薺はニコツと笑みを浮かべる。その笑顔を見て、翔はちよつとだけ意欲が湧いた。

「そうだよな。逢坂さんの言うとおりでな。……よし」

翔はペンを掴むと、第一希望のところに医学部と書く。

「瀬川くんお医者さんになるんだ」

「ああ。絶対凄腕の医者になってやる。……治してやりたいやつがいるからな」

翔はちよつとだけ哀しげな眼をする。そのとき、薺がぼんと手のひらを叩いた。

「そういえば、秋元くんも医学部志望って書いてあったな」

「え？ あいつが……？」

「枚数を確認するときチラッと見えたんだけど、そう書いてあったよ」

「そうか……。あいつも医学部志望か……」

翔は若干のやる気が芽生えた。

あいつには負けたくない。

すると、薺がそつと口を開いた。

「そういえば、瀬川くん、いつも河守総合病院にいるよね。何してるの？」

「え？　なんで、逢坂が知ってるんだ？」

「うん。私のおばあちゃんがそこで入院してるから、たまにお見舞いに行くんだけど、何度か瀬川くんを見かけたことあるんだよ」

「そうだったのか……」

「瀬川くんも、誰かのお見舞い？」

「あ、ああ……うん……そんなもんだ」

自分のはお見舞いというよりも罪滅ぼしといった方が妥当かもしれない。

「そっか。それじゃ、これ持って行くね」

「あ、ああ。頼むな」

薺は翔の進路希望の紙を持って立ち上がる。

翔も立ち上がると、鞆を持っていつものように病院へ行こうとする。

そのとき、薺が鞆を持って問いかけてきた。

「……あ、あの、せ、瀬川……くん……」

「ん？ なに？」

薺は鞆で顔を掻くし、目だけを見えるようにしてお願いする。

「あのね……せっかくだし、その……い、一緒に、帰らない……か

な？」

「え？」

「あ、いや、その、い、嫌ならいいの。ごめんね……」

薺は顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに固く目を瞑り返事を待つ。

翔は別にかまわなかったので素で答えた。

「俺今日は用事あるから、途中までなら別にいいぞ」

「ほ、ほんと……？」

薺は恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに笑みを浮かべた。

玄関に向かう前に職員室によって翔の進路希望の紙を渡すと、駐輪場で翔の自転車を取りに行き、二人は並んで歩く。

薺はおどおどしながら、もじもじしていた。

「え、えと……瀬川くんは、自転車で学校来てるんだね」

「ああ。放課後は寄るところがあるからな。自転車じゃないと、ちよっと遠いんだ」

「そ、そっか。大変だね……」

「いや、今までこれが苦になったことはないよ。……俺のせいなんだし」

翔は遠くを見つめるような目をしながら歩く。

「そ、その……瀬川くんは、中学の頃、私と一緒にのクラスになったの覚えてるかな……？」 中2のときなんだけど……」

「ああ。そういえばそうだったな。あまり俺ら話したことなかったな」

「う、うん。そうだね。翔くんはいつもクラスを中心だから、いつも誰かいて話す機会がなかったし……。それに、放課後はすぐに帰っちゃってたね……」

「俺のことよく知ってたな」

「う、うん……」

薺は視線をさげうつむく。

「そういえば、逢坂さんは進路希望はなんて書いたんだ？」

「あ、うん……私は、その……社会福祉士になりたいなって……」

「社会福祉士？」

「う、うん……。障害者やお年寄りの介護をするお仕事で、おばあちゃんのお世話をしているのに、こんな人の役に立つ仕事がしたい

なあって思っ……」

「そっか。すごいな」

「う、ううん。そ、そんなことないよ。瀬川くんだって、医者だなんてすごいよ」

「でも、俺は逢坂みたいに頭良くないし」

「だ、大丈夫だよ。今から頑張れば、きつとなれるよ」

「そうだな。ありがとな、逢坂さん」

「う、ううん。そんな……」

そして二人は立ち止まる。

「じゃ。また明日な」

「うん。またね、瀬川くん」

翔は自転車に跨ると病院向かって漕いで行く。

その後ろ姿を見送り、薺は小さく手を振って、見えなくなるとゆっくり降りた。

「瀬川くん……」

第八章 前日

逢坂薺と別れ、翔はいつもの病室へと向かう。ちょっと遅れてしまったが、少しの誤差なので問題ない。

翔は少しかいた汗をタオルで拭きながらドアノブを捻った。

「よっ、巴。来てやつ……」

翔は中に足を踏み入れてその場に呆然と立ち尽くしていた。

目の前には巴がベッドから降り、紙袋から着替えを掴んでいる。そして衣服は身に着けておらず、下着だけが身体を隠していた。

そのままお互い唾然としながら見つめ合い、数秒が経過した。

「……………」

「……………」

そして、

「きゃああああああああああああああっ！」

「悪い！」

翔は急いで部屋から出ながら謝罪して廊下に立つ。

巴の叫び声のせいで回りからは何事かとじろじろ見られていた。

翔は顔を赤くしながら、その場に座り込み顔を伏せた。

やってしまったな……。

「もうっ！　ちゃんとノックくらいしてよね！」

着替えが終わり、改めて翔は中に入りベッドの隣の椅子に座って説教されている。

「悪い。次から気をつけるよ」

「ふんっ」

巴はベッドの上で腕を組んで憤慨する。

「ほんとに悪かった。機嫌直せよ」

翔は手を合わせて頭を下げる。そんな姿を見て巴は口を尖らせながらじっと見る。

「……いつかお返ししてやる」

それって俺の裸を見るってことか？

「それで、今日はいつもより遅かったけど、どうかしたの？」

「ああ。進路希望の紙を書いてたんだ」

「進路希望かあ。翔くんは何て書いたの？」

「ああ……。……秘密」

「えええ。いいじゃない、教えてよ」

「へっへ。知りたかったら早く病氣治すんだな」

そこで翔はハッと思い出した。さっきまで思い出さないようにしていたが、巴の今の現状を頭に浮かんでしまった。

翔は笑みを消しうつむいてしまう。

「ど、どうしたの？ 翔？」

「え、あ、ああ、悪い。何でもないよ」

翔は無理に笑顔を見せ心配かけないようにする。

「大丈夫そうには見えないけど、何かあったの？」

「ほんとに大丈夫。ちょっと学校で嫌なことがあっただけさ」

「そう……。何かあったら話くらいは聞くから何でも話してね」

「ああ。ありがとう」

「うん」

巴は優しく爽やかな笑顔を見せる。その笑顔を見て、翔もふと笑みを返す。

こっちが元気づけないといけないのに、逆に元気づけられたな…。

「ねえ、翔くんは明後日から夏休みだよね」

「ああ。明日が終業式だ。でも、予定も何もないからここに来るだけだな」

翔は軽く声を上げて笑う。しかし、巴はうつむき、手を組んでぼーっとしていた。

「巴？　おい、巴」

「……あのさ、翔くん」

「ん？　なんだよ」

「前にさ、私翔くんにお願いがあるって言ったよね。……覚えてる？」

「ああ。覚えてるよ。あ、何かあるんだな。何でも言ってみろ。俺にできることなら、なんでもやってやるよ」

「うん……。確かに、お願いはある。でも、今は言わない」

「ん？」

巴は顔を上げると、少し戸惑いながら口を開く。

「明日、終業式が終わったら、ここに来て。そのとき話すから」

「そっか。わかった。約束な」

「うん……」

二人は小指を出し合い、そして絡め約束する。

「きつと来てね……」

巴は哀しげな眼をして、そっと指を離した。

翔は病院から出ると、夕暮れの中、自転車を押して家路に着く。

とうとう夏休みが始まる。

中学から夏休みは巴の病室を訪れ退屈しないように遊ぶことが日課だった。しかし、今回は少し変わるかもしれない。

巴からのお願い。

今まで簡単なお願いはあった。しかし、今回のようになかなか口に出さないお願いは初めてだった。

巴はいったい何を考えているのだろうか。

それに、翔は他にやることがある。

医学部を目指すことを決めた以上、今以上に勉学に励まさなければならぬ。一年から教科書を見直し、すぐにでも受験勉強をしなければ。

翔は決意を固め気合を入れる。

そのとき、角から人がずっと出てきた。

その顔を見て翔は立ち止まる。

「お前……」

目の前にいたのは秋元創だった。制服姿なので、家に帰ったわけではないようだ。

「待ってましたよ。ちょっといいですか？」

翔は少し警戒したが、コクッとうなずいた。

二人は公園により、木造のベンチに座る。創は自販機でジュースを買い、一つを翔に渡して座った。

「明日から夏休みですね。本で知ったのですが、夏はキャンプやお祭り、海水浴など楽しいイベントがたくさんあるようですね。とても楽しみです」

創はジュースで喉を潤す。翔はジュースを両手で握りながら創が話すのを待った。

「何人かのクラスメイトから誘われましてね、せっかくですし、翔くんも一緒にいきませんか？　きっと楽しいですよ。それに――」

「悪いな。俺はいけない」

創の言葉を遮り拒否する。創はさっきまでしていた穏やかな表情を消し無表情になる。

「夏休みはずっと予定があるんだ。やることもたくさんある。悪いけど、遊んでられないんだ」

翔はジュースのプルトップを開け口に含む。創は目を細め、そつと呟いた。

「春風巴さんのお見舞いですか。さすが幼馴染ですね」

翔は隠す必要もないと思いうなずく。

「ああ。そうだ」

創は軽く唇を緩め、ジュースを喉に流し込む。

「そうですね。また病気が悪化するとしたら……夏休みの後半ですかね」

その言葉を聞いて翔は動揺するかのようにつまっていた缶に力が入った。

今……何て。

「おい……どういことだよ……」

創は肩をすくめやれやれといった感じに説明する。

「言った通りです。忘れましたか？ 彼女は病気が治ったわけではなく、逆にどんどん悪い方向の進行しているのです。この前、カルテを診ましたが、そうとう悪いようですね。おそらく、あなたの見えないところで、毎日のように悶え苦しんでいるでしょう」

「なっ……」

確かに慎先生もそういつていた。しかし、これ以上悪化したらほんとに巴は……。

翔はさすがの思いで問いかける。

「なあ、これ以上悪化したら……巴は本当に……」

翔は喉から出そうとするが、留まり上手く言葉が出ない。それでの、翔は唾を呑み込み震える声で発する。

「……死ぬのか……？」

創は笑みを消し真面目な顔してうつむく。

「おそらく……」

創の言葉を聞いて翔は脱力する。

改めてはっきり言われると重く押し掛かってくる。ほんとうに、巴は……。

創は立ち上がると、ジュースを一気に飲み干し、いつもの穏やかな顔をして向き直る。

「だからこそ、この夏休みは今までで一番大切な時期になります。どうか選択を間違えないように」

「……ああ……」

翔は力なくうなずく。そんな翔を見て、創はニヤツと笑みを浮かべると耳元に囁いた。

「もしかしたら、巴さんは知っているのではないですか？……自分が死ぬことを」

「っ……」

そこで翔は緊張が増し激しく心臓が鼓動した。

そうだ……。だから巴はお願いがあると言っていた。つまり、自分の死期が近いことを知って、最後に何かしようとする……。

翔は持っていたジュースを落とし頭を抱える。

そんな翔を見て創は見下すような目を向け、ポケットに手を入れるとそこからすっと立ち去った。

計画通りに進めてやるよ……。

第九章 願望

学校が終わり、いつもより早い時間で、翔は自転車を漕いで河守総合病院へと向かう。

先ほど一学期の終業式が終わり、とうとう夏休みに入った。

明日から学校を目にすることなく、長期の休日を満喫することだろう。

でも、翔は学校の代わりに毎日病院へと向かうことになる。

巴と多くの時間を過ごし、一緒に楽しもう。

それに……慎先生との約束もある。

こうしている間にも巴の病気はどんどん悪い方向へと向かっていく。

いつ、何が起きるのかもわからない。

それまで、少しでも後悔のない、良い人生を送ってほしい。

そして、今日は巴から何かお願いがあるらしい。とても深刻に、今までにない大事な話。

昨日絶対に来てほしいと言っていた。

その願いを、叶えさせてあげたい……。

翔はそう思うと、ペダルを漕ぐ力が増した。

駐輪場に自転車を止め、入り口へと向かうと、少しばかり騒がしかった。

「ん？」

翔は近づいてみると、そこでは退院式が行われていた。

小さな男の子が看護婦から花束をもらい、担当医から優しく頭を撫でられていた。

そして男の子は満面の笑顔を見せ、親と共に車で去ってしまった。

翔はその光景を見送り、そっと唇を緩ませた。

いつか、巴もそうなたらいいな……。

翔は再び歩き出すと、巴の病室へと向かった。

翔はしっかりとドアを数回ノックして中に入る。

ベッドの上では巴がパソコンを開いて小説を書いていた。

「あ、翔くん」

巴はパソコンを閉じ、台の上に移動させると嬉しそうな笑顔を見せる。

「よ、来たぜ。やっと一学期終わったよ」

「お疲れ様。明日から夏休みだね。羨ましいな」

「お前なんか毎日が休みじゃねーか。こっちからしたらそっちのほうが羨ましいぜ」

「ははは。そうだね」

二人して他愛無い会話をする。巴が病気というのが嘘みたいになぜだった。

こんな時間が、いつまでも続けばいいのに……。

「それで、昨日話したお願いってなんだよ」

翔が気軽に、というより、巴が話しやすいように問いかける。

しかし、それを口にしただけで、巴はさっきまで明るい表情を一瞬暗くしうつむいてしまった。

「うん……。そうだね、そのために来たんだもんね……」

巴は顔を上げ、弱々しく翔を見る。

「ちょっと出ようか。外の空気吸いたいし……」

「そうか」

翔は端にある車椅子を持ってきて、巴に手を貸しながら座らせる。そして後ろのグリップを掴んで部屋を出た。

二人はエレベーターに乗り、最上階の屋上までやって来る。

そこでは真っ白なシートが干され、風でゆったりと揺らめいていた。

「やっぱりここは涼しいね」

巴が笑顔を見せ、鉄格子先の景色を眺める。その横に翔も並び、同じように観賞する。

「この先に、私の知らないことがたくさんあるんだね……」

巴が鉄格子を掴み寂しそうな眼をしながら力なく見続ける。

その光景は、牢屋に入れている犯罪者と同じだった。

何もない檻に入れられ、その先にある世界に向かうにも、自由がなく縛られたこの身では叶わない願い。

「……人生って、何なんだろうね」

唐突に巴が口を開いた。翔は黙って耳を傾ける。

「人間すべて平等である……。誰がこんなこといったんだろうね。」

だったら、どうして生まれたときから苦しむ人がいるのかな？　どうして何もできない人がいるのかな？」

巴は力なく笑みを浮かべる。

「神様って残酷だね。病気を患ったものは白い病院に入れられ、何もできず時が経つのを待つばかり。健康な人はいろんな世界を見て、いろんなことを学んで、いろんなことを知って、どんどん先に行ってしまう。……ほんとうに羨ましい……。まるで生き地獄だね。何のために生まれたのかわからないよ」

巴の体が小刻みに震える。そしてぎゅっと唇を噛む。それでも巴は話を続ける。

「ひどい……。ほんとにひどいよ……。生まれた子は何も悪いことしてない。ましてやまだ何もしてないのに、どうしていきなりこんな不幸を味あわせるの……。これから楽しいことが待ってるはずなのに、どうしてこんな仕打ちをするの……」

巴は顔をうつむき、それを隠すように長い髪が覆い尽くす。

「……もう、嫌だな……。このまま何もできずに、苦しみ続けるなんて嫌だよ……。まだやっていないことだってたくさんある……。やってみたいことなんてたくさんある……。これからやりたいこともたくさんある……。このまま、終わりたくない……」

巴は顔を上げ、悔しそうに目から大粒の涙を流す。

その涙は頬を伝い、コンクリートの上へと落ちていく。そこだけ大きな染みができていた。

巴はガシャツと金網を力いっぱい掴んだ。

「どうして！ どうして私だけこんな想いするの！ 何もしてないじゃない！ 悪いことなんてしてないじゃない！ 何も望まない！ もっと普通に生きたかった！ もっといろんなこと知りたかった！」

「巴……」

巴は今まで溜めていた鬱憤をはらすかのように声を上げて叫ぶ。

「普通に生まれた子たちに分かる！？ 病気の苦しみを！ 何もできない不自由の苦しみを！ 部屋に閉じ込められた束縛の苦しみを！ 楽しそうに友達と遊びまわることもできない孤独の苦しみを！ 襲いかかる死への恐怖を！」

「と、巴……」

翔は心配になり、巴の肩に触れる。その手を払い飛ばし、翔に怒りのこもった目を向ける。

「こんなことなら生まれなければ良かった！ こんな想いするならすぐに死ねば良かった！ 良いことなんて何も無いじゃない！ きっと治るって言われても根拠も希望もないのに勝手なこと言わないでよ！ 逆に無責任よ！ 何も知らないくせに……同じ苦しみを知っているわけでもないのに……分かるような口利かないでよ！」

「巴！」

あまりに我を忘れ憤慨してしまい、巴はつい車椅子から落ちてしまった。

間一髪で翔が手を伸ばし一緒に倒れたがなんとか受け止めることができた。

巴は翔の胸の顔を押し付け、制服を強く握る。

落ち着いたのか、嗚咽を漏らしながら、ゆっくりと話し続けた。

「……翔……くん……、ごめんね、いろいろ言っちゃって……。翔くんは、何も悪くないのに……。でも、気が済まなくて……」

「いや、気にするなよ。言いたいことがあったら、なんでも言ってくれ」

巴が初めてみせる底知れぬ怒り。

普段穏やかで優しい巴でも怒りはある。それが今まで溜まっていたのだろう。

それはそうだ。やりたいことが何もできず、検査の毎日で一向に治る気配はない。これで元気な方がおかしいくらいだ。

翔自身、いろいろ慰めてやりたいし、元気を上げたい。だから何か言葉をかけてやりたい。

でも、それはできなかった。

なぜなら、自分は巴のような重い病気にかかったことはないから

だ。

生まれたときから健康に生き、巴がしたいことを数えきれないほど体験している自分には、何も言うことはない。

言えば、ただの偽善者であり、巴が言ったようにただの知ったかぶりで終わる。

ドラマなどではここで喝を入れて立ち直らせるが逆効果だ。何年も入院しては精神がまいってしまい、冷静に聞けるはずがない。

ここで秋元創の言葉が何度も蘇る。

『病気の苦しみは、同じ病にかかったものにしかわからないんですよ』

まさしくその通りだ。健康な人が病気を患った人の気持ちなんてわかるはずない。何も、言う権利なんてないんだ……。

そう思うと、自然と翔の目から涙が溢れた。

悔しかった。今までに湧いたことがない悔しさが体を襲った。

自分のせいで巴はこうなった……。自分のせいで巴の何もかもを奪ってしまった……。

なのに、自分には何もできない。お見舞いにいくだけの配慮しかできない。

こんなにも無力な自分に腹が立った。そしてより一層悔しさが増

した。

「翔……くん……」

巴はそつと翔の胸から顔を上げ、地べたに座り込んで顔を覗き込む。

「私、知ってるんだ……。……もうすぐ、私は死ぬって」

「え？」

翔は呆然と巴を見る。巴はうつむきながら話す。

「自分の体なんだから、うすうすわかるの。もうすぐ……。死ぬんだって」

「巴……」

「だから……。翔くんにお願いがあるの……」

巴は目にいっぱいの涙を溢れさせ、懇願していった。

「私……。学校に行きたい！」

第十章 責任

屋上で打ち明けた、巴の願い。

それは、ずっと前から巴が抱いていたものだった。

生まれた子供は何か理由がない限り通わなくてはいけない掟。

……学校に通うこと。

学校に飽きた人なら言うはずない願望だろう。

しかし、みんなが通っているのに、自分だけが違うという多数決の原理を見せられ、そして楽しそうな雰囲気醸し出していれば、誰だって言ってみたくなくなる。遊園地と同じだ。

本来通うはずだったのに、叶わなかった学校。

それを、巴は今になり通いたいと懇願した。

翔は巴を支えながら、しばし呆然とした表情で、今でも真剣に見つめる巴を見ていた。

学校に通わせる。それが巴の願いだった。できるなら、その願いを叶えさせてあげたい。しかし、そんなことができるのだろうか……。

そのときだ。

「……ごほっ、げおっ……ごほっ、ごほっ……」

巴が胸を抑えて咳き込みはじめた。さっきの興奮のせいだろう。

「と、巴！ 大丈夫か？ すぐに先生呼んで来るから」

そのあと、翔はすぐに慎先生を呼び、巴はベッドに連れて行かれ、鎮静剤を打ち静かに眠った。

そのあと、翔は慎先生に呼ばれ、屋上であつたことを話した。

全てを聞いた慎先生は口に手を当てて考え込む。

「そうか……。そんなことが……」

慎先生は巴のカルテを掴み思い悩んだ末、

「わかった。今日はもう帰っていいぞ」

そういい、翔は部屋から出て行った。

そして、翔は一人とぼとぼと自転車を押しながら帰っていた。

先ほどの巴を見て、正直焦りが積もっていた。恐怖のせいか、さつきから体が震える。

巴が打ち明けた学校に通いたいという願い。そして、それができない苦しみの我慢の限界。

それらの原因はなんだろうか……。

そう、自分だ……。

こんなことになったのは、全て自分のせいだ。

幼いころに巴を無茶させて遊ばせたから。もしかしたらすぐに治ったかもしれないのに……。

翔は頭を抑え、その場にうずくまった。バランスが崩れた自転車が音を立てて倒れる。

今自分の過ちの責任が大きく押し掛かってきた。

人一人の人生を台無しに、何もかもを奪ってしまった。

巴の気持ちに応えるには、責任を果たすためには、自分にも言える権利を手に入れるにはどうすればいいのだろうか。

そのとき、翔は目の前を走る何台もの車が目に入った。

自分も、巴のような重症を負えば責任を果たせるのだろうか……。罪を償えるのだろうか……。

翔はふらつと無気力に、放心状態のまま道路に足を踏み入れる。

そのとき、横から迫ってくる車がクラクションを鳴らしてきた。

でも、翔には聞こえていないのか、反応がない。

もう少しで轢かれてしまう。もう目の前に迫ってきた。

そのときだ。

ドスッ

横から誰かが翔の体を突き飛ばした。そしてそのまま反対側の歩道へと出る。

車のブレーキ音や周りの野次馬たちの騒ぎで慌ただしかった。

翔はゆっくりと体をお越し、飛びついて来た相手を見る。

その場で地面に手を着いて乱れた呼吸を整えているのは、逢坂薺だった。

「……はあ、はあ……せ、瀬川くん……道路でぼうっとしてたら危ないよ……」

薺は優しそうな笑顔を見せる。その表情を見て、翔はそっと自分の体を覗き込む。

どうやら、どこも怪我せず済み、重症など負っていないようだ。

翔は気が抜けたのか、それとも助かったことに安堵しているのか、その場に仰向けに倒れ込んだ。

「あ、あれ……？　せ、瀬川くん！」

気がつけば、翔はどこかの公園のベンチに横になり、薺に膝枕してもらっていた。

真上にある薺の表情は真っ赤にしており、視線をキョロキョロしていた。

「……お、起きたの……かな……？　き、気分は……どう、かな……？」

翔はゆっくりと起き上がり、ベンチに座り直す。そして、片手を顔にやり、ふっと息を吐いた。

薺は心配になり、そっと翔の顔を覗き込む。

そのとき、薺は心の中で小さく悲鳴を上げた。

あつ。

翔の頬には一滴の涙が流れていた。

翔は落ち着きを取り戻し、恩人である薺に改めて礼を言った。

公園にいるのは、ここまでタクシーで送ってもらい、運転手が翔を運んだとのことだ。その後ろを、自転車で薺が追いかけていたらしい。

「ありがとな、逢坂……」

「う、ううん。そんな。たまたま瀬川くんを見つけたから……。でも、どうしてあんなことしたの？」

「……ああ」

翔は話すか迷った。

でも、巴のことは誰にも話したくない。誰かの協力は借りられない。全て自分で責任を果たさなければ。

なので、翔は薺にある質問した。

「逢坂は……責任ってなんだと思う？」

「責任……？」

「そう……責任」

逢坂は人差し指を顎に当てながら考え込む。

「そうだね。責任は、やっぱり自己満足かな」

「……自己満足？」

「だって、その人が責任を果たしたって思っても、相手はそれで満足してないかもしれないし、納得だとしてないかもしれないし。だから、自己満足」

「そうか……。自己満足か……」

ならば、俺が今までしてきたことも自己満足となるのだろうか。
毎日のようにお見舞いに行くのも、果物や花を持って行くのも、心配するのもし自己満足……。

ならば、どうやって責任を果たし、相手を納得させればいいんだ……。

「でもね、責任は、約束と同じだと思う」

「約束？」

薺はうなずく。

「うん。約束事のちょっと大げさな感じ。ちゃんと決まり事は守らないといけませんよって。そう考えれば、少しは楽にならないかな」

「……そうかもな。でも、その約束事を守るには、どうしたらいいんだ？」

「うーん、そうだね。相手の事を思えばいいんじゃないかな？」

「相手の事を思う？」

「そう。つまり、好きだったら、約束だって破らないでしょ？」

「好き……だったら……」

翔は目を細め考え込む。

自分は巴のことをどう思っているのだろうか。好き？ それとも

ただの幼馴染としか思っていないのだろうか。

今まで、自分は巴がこうなってしまったのは自分のせいだと思い、罪滅ぼしや責任を果たすために行ってきた。

それは好意のためか？　巴が好きだからやってきたのだろうか。

翔はぐっと拳を握った。

好きか、好きじゃないかだって？　そんなの、とうに答えは決まっている。

翔はすっと立ち上がった。

「ありがと、逢坂……」

「え？」

翔は自転車を跨ぐと急いで公園から出て行った。

「瀬川……くん……」

その頃、病院のある一室で慎先生が頭を悩ませていた。

「お願いごとは、学校に通いたいことか……。それは可能なのか……」

慎先生はカルテを睨みながらタバコを吹かす。

「巴ちゃんの容体は最悪な状況だ……。このまま外に連れ出して……」

そのとき、ゆつくりとドアが開いた。

慎先生は音に気づき、後ろを振り返る。

「君は……」

目の前にいた人物、それは秋元創だった。

第十一章 反発

慎先生の目の前に立っている人物。

ドアを開け入ってきたのは秋元創だった。

「こんにちは、先生」

創はいつもの穏やかな笑みを浮かべて挨拶する。

「君か……。どうしたんだ？」

「いえ、巴さんのことが気になりましたね。……興奮で発作が起きたようで？」

「……誰に聞いたんだ？」

創はパイプ椅子を出し、足を組んで座った。

「先ほど知り合いの看護婦に会い教えてもらいました。やはり心配ですね」

「……そうだな」

慎先生は創に背を向け巴のカルテを見ながら思う。

彼はなぜ猫を被るんだ……。

「先生。僕が思うに、巴さんの容体はかなりやばい状態ですよ。早

急に手を打たなければ、後戻りできない状況かと」

創が腕を組みながら少し偉そうに話す。

「君に言われなくてもわかっているさ。それを今考えていたんだ」

「そうですか。なら最善の治療をお願いします」

そして創は立ち上がり、パイプ椅子を直してドアを開け出て行くとする。

そのとき、創は立ち止まり、背を向けたまま冷笑を浮かび、ゆっくりと口を開いた。

「ああ、すみませんが、父があなたのことを教えていただきました。……先生が大学病院でしかしたこともね」

「なっ」

慎先生は後ろを振り返るが、すでにそこには創の姿はなかった。

追いかければすぐに捕まるが、捕まえたところで何もできない。

慎先生は大きく息を吐き、茜色に染まる空を眺める。

彼の父親は確か国会議員だったな……。その権力で調べたのか……。……。

でも、調べて欲しいと頼んだのは創くんだろう。

「いったい、彼の目的はなんだろうか……。」

ポケットに手をつ突っ込みながら廊下を歩く創。

穏やかな表情をして行き交う看護婦に挨拶するが、内心冷酷な笑みを浮かべ嘲笑っていた。

父に聞いたときは驚いたが、あんな過去があったとは知らなかった。まさか、先生があんなことをするとはね。

でも、この情報は貴重なものだ。使えるべき時がきつと来るはず。

そのとき、目の前から一人の少年が走っていた。

同じ高校の制服を着ており、忘れるはずがない顔。

瀬川翔だった。

ちょうど良かった。

「おや、翔くんではないですか。ダメですよ、廊下を走っては」

いつものように親しみやすそうな穏やかな表情をして声をかける。

「創……。何でお前がここに？」

翔はその場に立ち止まる。

「ちょっと慎先生に用がありましたので。巴さんに会いにきたのですか？ 恐らく今は面会謝絶だと思いますよ。あと、慎先生なら何か用があるとのことで先ほど出て行きました」

「あ、そうか……」

翔は残念そうにうつむく。

二人とも用があって走ってきたのに……。

「わかった。なら、今日は帰るよ。じゃあな」

翔は創に背を向け出口に向かって足を進ませようとする。

そのときに、創はそっと笑みを消して口を開いた。

「……巴さん、ほんとうに死にますよ」

その言葉で翔の足が止まった。そしてゆっくりと振り返る。その表情には若干の怒りも混じっていた。

「だからなんだよ。確かにそうかも知れないけど、今すぐってわけじゃないだろ。それに、治る可能性だってあるはずだ。俺は巴の力になればいい」

「でも、もう時間は残されてませんよ。まして、これ以上無理をさせればもっと寿命は縮むでしょう」

「そんなことはわかってる。だから、できる限りのことをするんだ」

翔はじつと創を睨み付ける。その眼を見て、創は壁に背を当て寄りかかりながら腕を組んで話し始めた。

「前に『死』について、ファミレスで話しましたね。ここで僕の考えを言わせていただきます」

創の言葉を翔は黙って聞いた。

「死んだ人間は、その後どうなると思いますか？ 昔からいろんな説がありますよね。今では天国や地獄に行くというのがしっくり来るようですが、僕はそれはありえないと思います。恐らく子供に恐怖心を与え、悪いことをさせないために作ったのでしょうけど。そもそも、天国や地獄を誰がこの世に伝えたのでしょうか。天国と地獄は死後の世界。つまり、その人は死んだあと天国や地獄を見て体験し、再びこの世界に帰ってきたということになります。そんなことがあるんでしょうかね。この時点で、僕はこの説は矛盾していると考えます。そんな僕が一番信頼できる説は……輪廻です」

「輪廻？」

「あまり聞かないかもしれませんが、輪廻というものがあり、簡単に説明すると、生まれ変わ리という意味です。今は人間でも、昔は魚だったかもしれません。もしかしたら鳥、あるいは昆虫の可能性も。つまり、地球上に存在する生物に何度も魂がとりこみ、今は人間であるということです。死ねばそれまでの記憶がすべてリセットされ、新しい生涯が待っているということです。これにはこんな話がありまして、ある少女が初めて訪れるはずの知らない町を、ここに何があるやここを曲がれば何があるなど、その地形を詳しく知っていたということ。知らないはずなのに知っていた、つまり前の器、今の姿より前に生きていたときの記憶がわずかに残っており、

このような事が起こったと考えられます。これが、輪廻というものです」

翔は聞き終え、全てを理解した。

「それで、お前は何が言いたいんだ？」

「僕が言いたいことは……巴さんは運が悪かった。次は普通に生きられる可能性があるということですよ」

翔の怒りはだんだんと上がっていた。いつのまにか固く拳が握られている。

「今を諦めて次に賭けろ。……死んでもいいと？」

「……それが彼女のためになるかもしれません」

そのとき翔は創の胸ぐらをおもいつきり掴んだ。

「ぐっ……」

「……この世に無駄な命なんてないんだよ……。捨てて良い人生なんてないんだよ！ 誰でも幸せに生きていいんだよ！ 例外なんてない……最初からどんなペナルティーを背負おうと、絶対良いことはあるんだ！」

翔は真剣な目つきで睨み付ける。創は少し苦しそうな表情をし、力づくで翔の手を解いた。

そして乱れた制服を直して言う。

「それは君が先ほど自分でいった最初から持つペナルティーを知らないからだ。生まれた瞬間から苦しみを味わい、幸せを知らない僕らにとつては、リセットしたいくらい逃げ出したい苦痛しかないんだ……」

創は悔しそうに歯を食いしばる。翔も言い返した。

「確かに俺はそのペナルティーを知らない。でも、だからといって全員が幸せとも限らないんだ。お前らだけが苦しいとは限らないんだよ」

翔はふっと息を吐いた。

「確か、お前将来医者になりたいんだよな」

「……ああ、そうだが」

「今言ったことを、世界中の医者に言ってみろよ。その発言は……患者を見捨てたのと同じことだぞ」

その言葉に創は怒りを覚えた。怒り……つまりそれは自分でも証明したということになる。

創は殴りかかろうと思った。しかし、ケンカで勝てるはずない。

力も体力もあっちのほうが上だ。何年もベッドの上で寝ている自分では相手にならない。

創は拳を緩ませ翔に背を向ける。

「……すまないが、少し気分が悪くなった。先に帰らせてもらう」

翔の返事を待たず、創は少し早歩きでその場から去ってしまった。

翔はその背を見届け、少しの間、その場に立っていた。

そう……。捨てていい命なんてない。全員が苦しむ必要はない。

だから、俺は巴を助けるんだ……。

創は病院の出口に出ると今までに見ない激怒の表情を見せた。

あいつに苦しみを与えてやる……。

第十二章 決意

翔は創が去った後、一人廊下に佇み考えに耽っていた。

先ほど創は苦しむなら死んだ方がマシだという考えを打ち明けた。

しかし、その考えは間違っていると翔は否定する。

今考えれば、どちらも正解であり、間違いなどないかもしれない。

なぜなら、命はその人自身の物だ。

確かに命は無駄にしてはいけないし、その人の物でも、悲しむ人もいる。家族や恋人、友人や親戚など、大勢の人が悲観するはず。

しかし、その人自身が生きたくない。終わりにしたい。未来が見えない。

そういつて決意が固ければ、止めることはできないかもしれない。

そう……生まれて一度の幸せが来ず苦しんでいる人なら……。

翔は壁に背を預け、腰を下ろすとうつぶく。

もしそんなことを巴が言えば、翔自身はどうすればいいのだろうか。

もちろん、止めるはずだ。

でも……自分は止める資格があるのだろうか……。

「……翔くん」

頭上で名前を呼ばれ、翔はそっと顔を上げる。そこには慎先生が立っていた。

「翔くん、いたんだ……」

「先生……。あの、巴は……」

「ああ。……ちょうど良い。一緒に来てくれ」

慎先生は少し悲しげな表情をしながら背を向け歩き出す。

翔も立ち上がると、その背を追いかけた。

二人が訪れたのは集中治療室だった。

先ほどまで巴は最善の治療をされ、今では静かにベッドの上で眠っていた。

慎先生は翔を中に促し、翔は巴のそばに座るとそっと手を握った。

「もう落ち着いたはずだ。心配ない。しかし、病気の進行は今でも続き、どんどん悪い方へと向かっている。恐らくだが、このまま続けば満足に歩くこともできなくなるかもしれない」

「……先生」

「うん？」

翔はぼそつと呟き、巴の手をぎゅっと握りながら口を開く。

「正直に言ってください。……巴は……。巴は……。もうすぐ……。死ぬんですか？」

その質問に慎先生は顔を伏せる。

「先生……。お願いします。俺、ちゃんと受け止めますから……。答えてください……」

翔の声は震えており、ベッドの上にぽたぽたと涙が落ちていく。

慎先生は答えるべきか迷っていた。

言ったほうが良いのかもしれない。しかし、これ以上翔を追い込ませるわけにはいかない。何もかも背負いすぎだ。ここでこれを言えば、もっと責任を感じ、翔自身が壊されてしまう。

「先生……。お願いします……」

それでも、慎先生は迷っていた。なかなか言わないので、翔は仕方なく打ち明けた。

「先生……。俺さ、巴が病気治ったら言いたいことがあるんだ。ずっと言いたかったけど、言えなくてさ……。この前、学校のクラスメイトに気づかせてくれたんだ。……。俺さ、そのためなら何だって

する。巴のためなら何でもする。だってさ、俺……」

そのあとの言葉を聞き、慎先生はふと笑みを浮かんだ。

巴に言いたい言葉。伝えたい気持ち。

その想いは、前から気づいていたが。

「……わかった。正直に話すよ」

「……はい」

翔は覚悟を決め、じっと耳を傾ける。慎先生は巴のカルテを掴み答えた。

「今の巴ちゃんの現状を全て話す。今巴ちゃんの容体は前にも言った通り最悪と言っても過言ではない。いつ異変が生じてもおかしくない状況だ。恐らくだが、巴ちゃん自身何か内に秘めた願望があるのだろう。つまり、その精神力だけで持っている感じだ。今後の治療としては、いつか手術を行い、完治へと向かわせたい。しかし、それには巴ちゃんの体力と機会が一致しなければならぬ。今は体力もないし、手術するにも成功する可能性は低すぎる。以前同様、検査や体力作り、鎮静剤や薬で病気の進行を妨げる治療を行う。そしてその期限、いや、巴ちゃんの寿命は……」

翔は巴の手を握る力が増す。そしてごくつと唾を呑み込み、覚悟を決めた。

「巴ちゃんの寿命は……残り……」

慎先生はそつと告発する。

「……二か月」

「……え？」

翔は手の力が緩み、するっと巴の手を離してしまった。

そして後ろを振り返り、慎先生の顔を覗き込む。

「ほ、ほんとに……それだけしか……残っていないんですか？」

慎先生は翔の目を見ながらコクツとうなずく。

「ほんとうだ。つまり、夏休みの終わりに、巴ちゃんは……」

「そ、そんな……」

翔は絶望を思い知った。それほど長くはないと思ったが、あと一年くらいあると思った。

なのに、あとたった二か月だなんて……。何が何でも短すぎる。

「こちらとしては今こうして生きているのが不思議なくらいだ。いつ死んでもおかしくない。いったい、何が巴ちゃんに力を与えているのか……」

翔はうつむき、呆然と目の前に映るタイルを見つめる。

あと二か月で何をすればいいんだ？ 何をすれば巴は喜ぶんだ？

そもそも、巴は起きてくれるのか？　このまま眠ったままじゃないのか？

そんな風に悪い方向へと思考が進む。

「翔くん……」

慎先生が呼び、翔は顔を上げる。

「今後、巴ちゃんは外出禁止させる。今までは庭くらいまでは許したが、それも辞めよう」

「え？　そ、そんな……」

「今後部屋から出るときは検査か体力作りのみだ。何かあってからでは遅いからな」

慎先生はそつとしゃがみ込むと、ぽんと翔の肩に手を置いた。

「翔くん。前に話したね。巴ちゃんの力になってほしい。後悔させないために、手助けをしてほしいと。……それを、今後も続けてくれ」

そう言い残し、慎先生は部屋から出て行った。

翔も出て行かないといけないと思い、立ち上がると、最後に一目眠っている巴を見届け、慎先生に続いた。

病院から出ると、すでに辺りは真っ暗になっていた。急いで家に帰らなければ。

翔は自転車に跨り、家へと走らせた。

その途中、翔は自転車を止め、急転回させある場所へと向かった。

翔が向かった場所は自分の学校である河守高校。

夜なので、当然すべての電気は消え、少し不気味な静けさに包まれていた。

翔は校門の前で自転車を降り歩き出す。

確か、校門は依然から鍵が壊れており、閉ざされていても鍵はしまっていない。なので簡単に開けることができる。

そしてそのまま校庭を進み、校舎に近づく。

さすがに校舎はどこも鍵が閉まっているが、昼なら開いているだろう。先生だっているだろうし、受験生は補習などで通う。

翔は玄関をガラス越しに覗き込む。

良くは見えないが、覚えている限り高い段差もないので心配はいらないだろう。

翔はドアを開けようとするが、やはり閉まっているので諦める。

そのとき、カーテンがふわっと外に出てきた。そこだけ窓が開いている。誰かが閉め忘れたのだろう。

翔はそこからよじ登り、中に入った。

一度玄関を訪れ観察し、次に自分の教室へと向かう。

やはり行くには階段を使うしかない。自分の教室は三階にある。

校舎にエレベーターはないし、スロープがあるわけでもない。ここは持ち上げるしかないだろう。

教室に着くと、ドアを開け中に入る。ドアには初めから鍵は着いてないので容易に入れる。

ドアから見える教室の景色。今考えると、本来はここに巴の姿があったのかもしれない。

でも、自分のせいでここには来られなかった……。

翔は電気を点け、自分の席に着く。

この席に着いて、何度も思ったことがある。一緒に、授業を受けられたらいいな、と。

翔はふっと笑みを浮かべる。

「巴……」

翔はそっと窓から見える星を眺める。

「学校に行こう」

第十三章 許可

夏休みが始まり、その初日を迎えた翔。

皆待望でもある長期休暇を有意義に過ごそうと、私利私欲の生活を満喫することだろう。

しかし、翔はいつもよりも少し起きる時間が遅くとも、以前と同様に制服に身を包み、同じように河守高校へと向かった。

自転車を漕ぎ、学校の駐輪場へと止め、一人静けさに残った校舎に足を踏み入れる。

受験生である三年生は、自分の教室で補習や自習をとり行い、他の学年は夏休みなので教室は空いている。

もちろん、翔のクラスも空いている。

翔はそのことの確認を終え、次は職員室へと向かった。

「失礼します」

職員室の戸を開け中に入る。

受験生の科目の担当する先生もいるが、中には部活動で出てくる先生もいるのでほとんどの先生が職員室に集う。

翔の担任である先生も部活動の顧問をされておりその時職員室にいた。

「お、瀬川か。どうした。部活もしてないのに、学校に来て」

「先生、お願いがあるんです」

「ん？」

翔は真剣な姿勢と目つきで訴えかける。

その姿勢が届き、先生は真面目に受け止めようとする。

「なんだ？」

「実は……この夏休み中、教室を自由に使わせてください」

翔は丁寧に頭を下げる。

「……その理由は？ 使用目的は何だ？」

「……それは、いえません」

「ん？ なぜだ」

先生の機嫌が若干斜めになる。

それはそうだろう。理由もなしに本来は閉められている教室を使わせてもらうのだから。

それでも翔は負けじと交渉を進める。

「別に悪用するわけではありません。ただ普通に使わせてもらいたいだけです。しっかりとした勉強目的でもありますし、学校側に迷惑をかけるわけでもありません。だから……お願いします！」

翔はより深く頭を下げる。粘る翔を見て担任の先生は腕を組みながら考え込む。

「お前の言い分は分かったが、しっかりとした具体的目的がなければ、夏季休暇中は使用できないぞ。この承諾書にも記入しないといけないし、勉強なら何も教室でなくても、図書館や家でもできるだろ」

「……いえ、学校じゃないとダメなんです。教室じゃないと意味ないんです。だって……俺、このままじゃ、何もしてあげられないから……」

すると、翔はすつと腰を降ろした。

「なっ」

翔の行動を見て、担任の先生は愚か、周りにいる先生たちまで注目する。

翔は土下座をしてまで懇願しているのだ。

「……お願いします。許可が下りるなら何でもします。だから、どうか理由は聞かずに承諾してください……」

先生は段々と焦りが募っていく。

「……どうしてそこまで？」

翔は頭を下げたまま、閉じていた目を開けた。

「……俺は、あいつのためにまだ何もしていない。何一つ責任を果たしていない。……これであいつの願いが叶うなら、これくらい何ともない。いくらでもしてやる。あいつに……」

翔は泣きながらも自分の想いを打ち明け、学校に行きたいと打ち明ける巴を思い出す。

「初めてお願いされたから……」

先生は組んでいた腕を解き、承諾書に理由はなしと書いて翔の前に渡す。

翔はそっと顔を上げ先生を見る。

「わかった。許可してやる」

「あ、ありがとうございますっ」

「しかし、一つだけ聞かせてくれ」

翔は疑問の表情になり、その質問に耳を傾ける。

「どうして、その理由が言えないんだ？」

翔は納得する。その場に立ち上がると、承諾書を受け取り、それを見つめながら答えた。

「これは誰にも言えません。俺自身が決めたことです。そして……先生は知ってほしいんです。俺は何もできなかったって……」

「何もできなかった？」

「……はい。……俺は、言われなければ、何もできなかったんです……」

そう言い残し、翔は職員室を後にした。

学校の許可が貰え、翔はすぐに河守総合病院を訪れる。

看護婦によると、先ほど巴は集中治療室から元の病室に戻ったようだ。

翔はいつものように502号室の戸を開けた。

「巴……」

中にはベッドに座り上半身を起こしている巴がおり、元氣のない瞳を外に向けていた。

いつも使っているパソコンも起動した気配はない。

翔が入ってきたことに気づき、ゆっくりと顔を向ける。

「……翔くん、来たんだね……。どうぞ……」

気力、いや精気も活力も見えない巴の瞳。まるで死人同様の目だ。無理もない。巴自身、自分の寿命が残り少ないことを薄々感づいており、半ば自分の人生を諦めてもいる。

これならば元気がなくて当たり前とも言える。

翔自身、そんな巴を見たくなく、すぐにでもこの場から逃げ出したい気持ちでいっぱいだったが、吉報があるのでどうしても伝えたい。

翔はいつもの場所に椅子を置き座り、巴に話しかける。

「巴。前に、屋上で俺に言ってくれたよな。……学校に行きたいって」

その言葉に反応し、外の景色が見える窓から視線を外し顔を翔に向ける。

「いつも、俺は巴のために何かしたいと思っていた。責任を、いや、巴の役に立ちたいと思っていた。でも、俺何をしたらいいいのかわからなくて、結局何もできなかった。でも、巴は俺に初めて自分のやりたいことを打ち明けてくれた。だから、その願いを叶えてやる」

巴の表情がだんだんと明るみを覚えていく。

「……学校に行こう、巴」

はっと息を呑んだ巴は、その言葉を信じ、ゆっくりとうつぶくと

ぎゅっと掛布団を掴んだ。その上にポタポタと雫が落ちていく。

翔はその雫を見て、少し慌てたがすぐにそっと笑みを浮かべ、優しく頭を撫でた。

「さっきちゃんと許可も貰った。計画もしてある。明日から、お前の行きたかった学校に行けるんだ。……これが、今俺にできる精一杯のことだけど、絶対成功させてやるからな」

巴はだんだんと嗚咽を漏らすようになり、掛布団を持ち上げると自分の顔を押し当て、体を小刻みに震わせる。

翔はそんな巴を見てずっと頭を撫で続けた。

そんなときに、巴は小さな声で、ありったけの感謝の込めた言葉を送った。

「……あり……が……と……」

第十四章 貸出

巴の学校に行きたいという願い。

その願いを叶えるため、翔はファミレスで作戦を練る。

すでに学校側には教室の使用の許可は取ってあるので、あとはどうやって巴を連れて行くかだ。

午前中は検査や体力作り、昼食と人目に付くことが多い。決行するなら午後からが得策だろう。

それに、慎先生にはあまりばれない方がいいだろう。

この前、巴の外出を禁止したから、その許可も下りないはず。

ばれないよう、最善の注意を払いながら隠し通さなければ。

巴の移動手段は車椅子だから、自分が押して学校まで案内しなければならぬ。

病院から出る時も、看護婦や受付に見つからないようにしなければ。

ここまではいいが、一番重要なのは、学校で何をするかだ。

恐らく普通の学校生活を満喫したいのだろうが、参加人数は翔と巴のたったの二人。

二人だけで何ができるのだろうか。

授業をするとしても、翔自身そこまで成績が良いともいえない。

今度巴にいろいろ聞いてみよう。

あとはせっかくだから、制服などもあったら着させてやりたい。
入院服で行っても、高校生という雰囲気味わえないだろう。

女子の制服はもちろん持っていないから、誰かに借りなければなら
ない。

しかし、貸してくれそうな人は誰かいるだろうか。

そのときだ。

「あ、せ、瀬川……くん……」

「ん？」

そこに立っていたのは同じクラスメイトの逢坂薺だった。

私服姿は初めてみたが、可愛い服装で普段と違って見える。

「よう、逢坂さん。一人？」

「う、うん。お、お母さんが仕事でいないから、ご、ご飯食べに来
たの」

「そっか。ならそこ座れよ」

「えっ？ い、いいの？」

「ああ、別にかまわないぞ」

「じゃ、じゃあ、座るね……」

薺は少しおどおどしながら座り、頬を少し朱に染め、視線をきよろきよろしていた。

「何か注文しろよ。俺のことは気にしないでいいから」

「あ、う、うん。ありがと……」

薺はメニューを見てハンバーグ定食を注文した。

そこから会話が途切れ、薺は何か話そうと話題を考える。

「え、えと……せ、瀬川くんは、こ、ここで何してるの？」

「ん？ ああ、ちょっと考え事っていうか、やることがあってね」

「そ、そっか……。え、えと、夏休み始まったけど、な、何か予定はあるの？」

「そうだな、ずっと予定はある。……今年が一番忙しいだろうな」

「今年が？ ま、毎年、何かしてるの、か、かな？」

「……ああ。罪滅ぼしってやつかな……」

翔はそつと外から見える夏空を見上げる。

中は冷房が効いており涼しいが、外は太陽からの放射熱で暑いのだろう。

青い空に白い雲がゆったりと揺らめいていた。

毎年、こんな空を見ていた気がする……。

薺は空を見る翔を見て、同じように見るが、いったい何を考えているのかまったくわからなかった。

注文した品が届き、薺はおいしそうにハンバーグを食べていく。

翔はその間も、巴をどう楽しませるかを考えていた。

やはり学校に行くのに、自分だけというのも寂しい気がする。

せっかくだから、女友達も欲しいだろうし。

もう少し、誰か暇な友達を誘うのもいいかもしれない。

しかし、女友達で誰がいただろうか。ま、それは後で考えよう。

やっぱりまずは制服の調達だな。

そこで翔はある人物、というより目の前の人物に気づき目をやる。

ファミレスの品なのにおいしそうに食べる薺は、数秒の後翔の視

線に気づき、もぐもぐしながら恥ずかしそうにうつむく。

「あ、あのさ」

「は、はいっ」

「逢坂は夏休み、何か予定あるか？」

「えっ？　よ、予定……ですか？　その、お、お盆におばあちゃん
の家に行くか、た、たまに友達と海に行ったりとか……かな……」

「じゃあ、明日時間ある？」

「あ、明日っ？　え、えと、い、今のところ予定はないよ」

「じゃあ、ちょっと付き合ってくれ」

「……………ええっ？」

薺は顔を真っ赤にさせ驚嘆な声を上げる。

これはデートってやつかな？　もしかして、遊びに誘われている
のかな？

「う、うん……。い、いいよ……。ど、どこに行くの……かな？」

「お前ん家」

「……………えええっ？」

その日、二人は学校で待ち合わせ、そのあと逢坂の家に行くことになった。

隣同士歩き家へと向かう二人。

その間、薺はそわそわして落ち着きがなかった。

まさか、いきなり自分の家に招くことになるとは思わなかった。

いったい自分の家で何をするのだろうか。

男女が一つ屋根の下で同じ部屋ですること。

ならば……。

そう考えると、薺はボンツと顔を赤くする。

「ん？ どうした、逢坂」

「い、いや、は、はは、は、な、何で、何でも……ない……よ」

「そうか」

薺はぶんぶん顔を振り煩惱を掻き消して心を落ち着かせる。

何も考えないようにしよう……。

薺の家は普通の一軒家だ。庭付きの二階建てで、レンガ造りの洋

風で、中はフローリングで綺麗に輝いていた。綺麗に掃除してある。

学校から約十分くらいで、とても近い。時節聞こえる庭にいるペットの犬の声が聞こえた。

翔は薺の部屋に案内され、床に座りぐるっと見渡してみる。

全体的にピンク色を重視した感じで綺麗に整理整頓されていた。

ぬいぐるみが好きなのか、ベッドの上や棚に何体もある。

薺はお盆に乗ったお茶を持ってきた。

「ゆっくりしてね」

そういう冷えたお茶を翔の前に置く。

「ありがとう」

翔は喉が渴いていたのでお茶に口をつける。

薺も同じようにお茶を飲み、そっと問いかけた。

「それで、あの……家に来て何するの？」

「ああ。頼みがあるんだ」

「う、うん。な、何かな？」

すると、翔は頭を下げてお願いしてきた。

「え？」

「頼む！ お前の制服を貸してくれ！」

「せ、制服……？」

「何でもいい！ 中学でもいつのでもいいから貸してくれ！」

「あ、その……そこまでいうなら……」

薺は立ち上がりクローゼットから制服を探し出す。

「あ、ありがとう」

翔は安堵し再びお茶を飲む。

薺は制服を探しながら考え込む。

なんで制服が必要なのかな？ しかも女子の制服なんて……。

まさか、制服が好きなのかな？ そういう趣味を持っている人も
いるそうだし……。

っていうことは、私の制服を使って……。

……もどかしい気持ちだな……。

薺は中学時代の制服を取り出し翔に渡す。

「サイズは今とさほど変わらないけど、これでいいかな？」

「ああ。多分逢坂を同じくらいの背丈だし、多分着られるだろう」

え？ 着るの？ でも、背丈って、普通に瀬川くんの方が高いし、サイズも明らかに違うような……。

薺は頭を悩ませ理解も整理もつかずぐるぐるなっている時だった。

「じゃあ、俺はこのあと用事があるから」

「え？ もう行くの？」

「ああ。制服ありがと。今度クリーニングして返すよ」

「あ、うん。ありがと」

「それじゃ」

そういつて翔は行ってしまった。

残された薺はぽつんとその場に座ったまま見送り、最後まで理解できずにいた。

第十五章 決行

その日、とうとう決行した。

午前は巴の検査や食事などで潰れ、実際に動くのは午後からとなる。

念のために言っておくが、本来巴は外出禁止の身である。

それにもかかわらず、自分たちはその規定を破り学校に行こうとしているのだ。

このことがばれれば、何を言われるかわからないし、もちろん慎先生や巴の親にも話していないので、何かあれば責任は全て背負合わなければならない。

それでも、巴の決意は固く、また翔自身も協力したいと強く願っている。

二人の意志が揃っているのなら迷う必要はない。

すぐにでもここから逃げ出すつもりだ。

翔は巴を乗せた車椅子を掴み、看護婦や医師にばれないよう、病室から少し顔を出してキョロキョロと辺りを見渡す。

姿が見えなくなると、素早く車椅子を進ませエレベーターに乗せ

る。

階段の方が良いのだが、こればかりは仕方ない。誰もいないことを願うばかりだ。

エレベーターに乗ってる際、巴はクスクス笑いだした。

「何かドキドキするね。悪いことをしているときの気持ちってこんな感じなのかな」

「ああ。そうだろうな。でも、わかるのはそれだけじゃない。学校に着けばもっといろんなことがわかるぞ」

「うん！」

巴は嬉しそうに満面の笑みでうなづく。

その笑顔を見て翔は絶対成功させたいという気持ちが強くなった。

エレベーターが一階に着くとすぐさま予定していた人目につかない場所で止まり、そっと再び周りを観察する。

やはり受付や出入り口は人が多く、受付には何度も顔を合わせ知り合いになった看護婦もいるのでそこから出るのは困難だ。

だから言って、無闇に走って行こうなんてことは考えない。

ここは通らず、別にルートを使う。反対方向に裏口があり、そこはあまり人も通らず、隠れて外に出るなら絶好の場所だ。

翔はそこへと向かい、そして誰にも見つかることなく外に出ることに成功した。

「うわぁー！」

巴は歓声の声を上げる。久しぶりに見た外の景色。

青の空、緑の森林、白の雲に病院、ありとあらゆる物が溢れている。

今まで狭い所に閉じ込められていたから言葉に表せないほどの解放感が身を包む。

そして、とうとう巴は病院の敷地内を飛び出した。

「やったあ！ やったよ！ とうとう出られたよ！」

巴は小さな子供のようにはしゃぎ、腕を大きく広げた。

それはそうだろう。今まで出ていいのは病院の敷地内だけ。そこだけと限定され、それ以上の範囲にある景色を見たことない。

自分の見たかったもの、そして知らないことが溢れる外の世界に、興奮を抑えきれないことは仕方のないこと。

そんな巴を見て、翔もつい笑みを零してしまう。

しかし、問題が一つ残る。

ここから学校までどうやって巴を運ぶかだ。

もちろん車での移動は無理だし、タクシー台の無ければバスや電車も学校までではない。

となると、方法は一つ、押していくしかない。

翔は事前に持って来た日傘を取り出し巴に影を作る。

夏の日差しは容赦なく体力を奪うのでできる限り体に負担をかけないようにしなければ。

「水筒持ってきたから、ちゃんと水分補給するんだぞ」

「うん。ありがとう」

巴は鼻歌まじりに上機嫌に体を揺らす。

こんな巴を見るのは初めてだった。

いつも愛想笑いを浮かべ、平気な顔をして隠していたが、こんなにもここからと言える笑顔を見たことがない。

やはり連れてきて正解だった。

病院から車椅子を押して数十分経ち、ようやく校門に辿り着いた。

すでに時刻は午後2時を回っており、部活動生もほとんどいない。

二人は校門をぐぐり、校庭の中を通る。そして、校舎の前で立ち止まった。

「ここが……翔くんの学校？」

「……ああ。多分、巴もここに通うことになってたはずだ」

「……そうだね。私も、病気なんかせず元気だったら同じ高校受けてたと思う」

巴はゆっくりと目の前にそびえ立つ憧れでもあり、願いでもあった学校を見つめる。

白いペンキはところどころ剥がれむき出しになったコンクリートや、何枚も並ぶ窓から微かに見える机や椅子のある教室。隣にある大きな体育館やプール、武道館に食堂。周りにある木々に広い校庭。

そう。ここが、学校なのだ。

巴は少しうつむき、手に持っている日傘をぎゅっと握んだ。

「……どうしたんだ、巴……？」

巴は潤んだ瞳から滲み出る涙をさっと拭き顔を上げる。

「ちょっと感傷的になっちゃった……。やっぱり、普通に学校に来たかった。普通に勉強して、普通に友達作って、普通に遊んで笑って泣いて、そして……恋をして……」

「巴……」

「でもね、やっぱり嬉しいっていう気持ちが強いかな。やっと、願いが叶ったから」

巴はクルツと後ろを振り向き、屈託のない満面の笑みを浮かべる。

「ほんとにありがと、翔くん」

その笑顔を見て、翔の顔が若干朱を帯びる。

「ま、まだお礼を言うのは早いぜ。これから中に入るんだからな」

「うん！」

翔は車椅子を握り力を込め、二人は中に入った。

「やっぱり学校に入るなら靴箱からだよね」

巴は下駄箱を見ていう。

「せっかくだから上履きに履き替えようぜ。空いてるところに靴を入れておこう」

翔は事前に持ってきていた袋の中から新しい上履きを取り出し巴の足にはめる。

もちろん、この上履きも購買で買ったもので、学校指定の物だ。

「うわぁ、翔くんの学校はこの上履きなんだね」

といっても、ごく普通の上履きで、小学生が使うような赤と青の

種類があるあの上履きかわらないのだが。

「さて、それじゃ行くぞ」

翔は車椅子を押す。巴は上履きに興味を奪われ、嬉しそうに足をぶらぶらしていた。

最初ということで、まずはいろいろな教室を回って行こうと考えている。

いわゆる新入生がまずやる校内の案内である。

せっかく来たのだから、いろいろ教えてやろう。

まずは下駄箱から一階にある職員室や校長室、応接室や購買部、特別教室や実験室に研究室と案内する。

「やっぱり高校だといろんな教室があるね」

「そうだな。より専門的分野の勉強をすることになるからな。さて、それじゃ教室に行こうか」

「うん！」

そして、一番の問題はここからである。

この学校にというか、ほとんどの高等学校にエレベーターはないだろう。

もちろん、この学校にもない。

翔の借りたというより、翔のクラスは三階にある教室。そこまでどうやって巴を運ぶか。

事前に考えてはいたが、やはりこれしかないと思うとちょっと肩が落ちてしまう。

二人は階段のところまで来ると立ち止まり、巴が小さく声を上げた。

「あつ、そっか。エレベーターなんてないもんね。一階の教室に向かうの？」

翔は軽く腕を回したり事前に準備運動をする。落としたら大変だからな。

「ちょっと待ってろよ」

「え？ あ、うん……」

翔は巴をその場に置いて、先に一人で上に上がっていく。そして少しして戻ってきた。

軽く体を解すと、翔は巴の前で背を向けて腰を落とす。

「さ、乗れ」

「え？」

「だからおんぶだよ。俺が巴を背負って上まで行くの」

「で、でも、大丈夫なの？」

巴はちよつとだけ顔を赤く染め、恥ずかしそうに問いかける。

「私……重いかもよ」

「どこをどう見たら重そうに見えるんだよ。すぐにポキッて折れそうなほど細い体してるくせに。ほら、早く乗れよ」

「う、うん……」

巴は前のめりになり、翔の背中に体重をかける。

「しっかり捕まってるよ」

「うん」

「よし、行くぞ」

翔は足に力を入れ立ち上がり、目の前の階段を一段ずつ登って行く。

後ろに落ちないように、ちよつと前進に体重をかけ、足を踏み外さぬよう注意しながら丁寧にする。

「大丈夫？ お、重くないかな？」

「平気だって。全然軽いぜ」

そう。ほんとに軽かった。毎日健康に良い食事しかせず、脂肪もほとんどないのだろう。高校生の平均体重を軽く下回っているだろう。

それほど軽く感じ、また命の軽さを知った。

命は重くもあり、軽い。つまり、物理的重さでいえば、こんなにも軽い。簡単に持ち運びできるくらいだ。しかし、精神的に問われれば、とてつもなく重いものなのだ。

翔はまた、責任を感じてしまった……。

目的の三階に着くと、そこには椅子が置いてあった。翔は巴をゆつくりと降ろすとそこに座らせる。

そして再び一階へと降り次は車椅子を取りに行った。

翔が戻ってくるまで椅子に座らせるためにわざわざ先に行ったのだ。おかげで三往復することになるが、安全を考えれば仕方がないこと。

「……ごめんね、翔くん。疲れたよね？」

「大丈夫だよ。気にすんな。ほら、とうとう教室だぞ」

「うん！」

巴は嬉しそうにうなづく。

翔は再び巴を車椅子に乗せ、自分の教室へと走らせた。

第十六章 教室

念願の学校へと来た翔と巴。

翔は巴が座っている車椅子を押し、自分のクラスでもある教室へと向かう。

そして、それは目の前に来た。

「ここが、翔くんのクラス？」

「……ああ。今日から、巴のクラスでもあるんだ」

「……うん」

巴はすつと手を伸ばし、出入り口の戸の取っ手に触れる。そして力を加えゆっくりと開かせた。

「あっ……」

開け放たれた瞬間、巴の目の前には来たくて仕方なく、何度も想像し想い描いていた場所……学校の教室が現れた。

正面にある大きな黒板、綺麗に並べられた机に椅子、後ろにある棚、掃除用具、白いカーテン、校庭を一望できる窓、そして教室だと思わせる雰囲気。

巴は目の前の光景に目を奪われ、小刻みに動き聞こえなくても大きく衝動として打ち付ける興奮を抑えられず、感極まってしまい震

える体をぎゅっと両腕で抱きしめた。

「……巴？ 大丈夫か？」

翔は少し心配になり優しく話しかける。

「……うん。大丈夫だよ。ちょっと……嬉しくて……。私も、学校に来れたことが……嬉しくて……」

膝の上に落ちる歓喜の雫。ぽたぽたと髪の毛で覆い隠された巴の目から零れていく。

翔はその姿をそっと優しさの目で見守った。

そう……。ここは巴が来たかった場所。

入院し、どんな苦しい検査にも耐え、孤独の日々を貫いても、そして生きるための糧になった場所、それがこの場所。

ここに行きたい、訪れたい、一度でいいから触れたいという想いが強かったからこそ、巴はここまで生きられ、そして耐えてきた。

言わば、巴の全てと言っても過言ではない。

一般的生徒なら教室など何度も目にしているのでどうとも思わないのが普通だろう。

それは国が教育を受ける権利を提唱しており、その権利の通り、親は子供を学校へと通わせる。

そこで絶対に目にするのが教室。学校の唯一といえる自分の居場所。

しかし、学校に来られるのは健康と言える生徒のみ。

何らかの病気などで通えないことがありえる。

巴はその内の一人に入れられた。

半年後には入るはずだった小学校。

皆新しいランドセルを背負い、親しい友達と楽しそうに駆ける。

遊びを覚え、少しずつ勉強して知識も増え、どんどんいろんな友達も増え、社会というもの、集団というもの、リーダーシップ、チームワーク、協力、特技、趣味、得意不得意、自分の夢や希望、可能性、感受性やスタイル、その他多くのことがわかってくる。

そして中学に上がり、成長していく。

部活による上下関係、親しき友達、勉強のレベルアップ、苦難や困難、具体的将来の石灰図、情熱、努力、忍耐力、考え方の変更にどと、小学校と比べより明確に詳しく知っていく。

そして、恋をしていく。

受験という壁を乗り越え、とうとう高校生となる。

大人でもあり子供でもある中途半端な時期だが大切な時期でもある。

自分というもの、自我を知り、より将来を深く考え、いつ社会に出てもおかしくない大人という段階への下準備をする。

こうしていくつもの課題を上げてきたが、これだけではない。もっと、もっと多くのことを学ぶのだ。

学校とは数多くの事を学ぶ。学校があるから、社会に出ても新しい環境に溶け込むことができるのだ。

それほど重要であり、貴重な存在といえる。

しかし、中には受けられないというものもある。

そうなったものはどうすればいいのだろうか。

中には通信制というものもあるが、それだけではごく一部のことしか学べない。

だからこそ、巴はここに来たかったのだ。

「……翔くん」

名前を呼ばれ、翔は耳を傾ける。

巴は溢れる涙を手でふき取り、すつと顔を上げて続ける。

「私……生きてて……良かった。今、こうしてここにいわれて、本当に良かったと思ってる。ほんとうに……。きつと、この日のために生きてきたんだなって、私すっごく思うの……。ありがと、翔く

ん……」

巴は赤くなった目でも、本当に感謝し、嬉しそうに笑顔を見せる。

翔もそつと目を細め笑みを返した。

「いいんだよ。俺は、巴が喜んでくれたら、それだけで俺も嬉しいんだ」

翔は巴の前に来ると、その場にしゃがみ込み、少し上にある巴の顔を見つめる。

「もう聞き飽きただろうけど、聞いてくれ。……俺はあの日からずっと後悔してきたんだ。俺のせいで、巴の病気が悪化して、入院生活も長引いてしまったって。全ての責任が俺にあると思うんだ。だから、本当にごめん。でも、だからこそ、俺は巴に何かしてやりたい。俺ができることなら何でもしたい。これは偽善でもなんでもない。俺が、心からしたいと思って言ってるんだ。だから、これからも、何かあったら遠慮なく言ってほしい」

翔はぎゅっと巴の手を握る。巴は柔らかく微笑みうなずいた。

「うん」

翔も笑みを返し立ち上がる。

「さて、それじゃ巴にプレゼントだ」

「え？ プレゼント？」

巴はきよとんと疑問の表情になる。

「ああ。その格好じゃ、学校に来て追いつかれるぞ。ちゃんとルールは守らないとな」

「え、えと……あつ……」

翔が取り出したもの。それを見て巴は呆然とする。

「制服……」

翔が手に持っているのは学校の制服。以前。逢坂薺から借りた制服だ。

「この学校のじゃないけど、ちゃんとした制服だ。ほら、来てみろよ」

「でも、これどうしたの？」

「もちろん、巴のために借りたんだよ。ほら、早くしろよ」

「う、うん。でも……」

巴は申し訳なさそうにうつむく。少し頬を染め、指でもじもじしていた。

「なんだよ、どうかしたのか？」

「じ、実はね、その……着方が……」

「え？」

「……着方がわからないん……だよね」

「あっ……」

そういえば、巴は制服というものを知らない。ならば、その着方がわかるはずない。制服は普通の私服と違い、ちょっとだけ着方が異なる。

翔はちよつと予想外だったが、こう提案した。

「仕方ない……。俺が手伝うよ」

「……え？」

第十七章 制服

巴は車椅子の上で恥ずかしそうにもじもじしながら自分の長い髪を指でいじっていた。

「え、えと……ほ、ほんとに着るの？」

上目使いで若干頬を朱に染めながら問いかけてくる。

「い、いや、その……別に、着たくないならいいんだけど……」

「い、いや、せっかくだから着たいよ。で、でも、その……着替えてると、その……見られちゃうし……」

「お、俺だって、そんな……じろじろ見るわけじゃないし。その……目をそらせながらだったら……」

「そ、そうだね……。ぜ、絶対見ないでよ」

「あ、ああ……」

そして巴は車椅子からゆっくりと立ち上がる。

車椅子を使っているから歩けないというイメージを持っていると思うが、別に歩けないわけではなく、あまり体力を使わせないために使用しているのだ。

数秒間くらい立つくらいなら大丈夫のはずだ。

「じゃ、まずはそのままスカート履いて……」

「う、うん……」

翔はスカートを渡し、巴はそれを受け取りズボンの上から履く。

巴は入院服というより、パジャマ的な格好が多い。

そっちの方がいろいろと都合が良いからだ。

なので、上下バラバラなので、スカートを履いてそのままズボンを脱げばいいのだ。

スカートは難なく着ることができた。

「スカートはホックがあるんだね。これで履けたね」

「ああ。じゃあ、次はシャツだな」

「うん」

巴は次にシャツを受け取る。

ここで問題が生じる。

シャツを着るなら今着ている上着は脱がなければならない。

その際に絶対と言っていいほど下着が見える。

しかし、シャツなら普通に着るだけなので、巴でもできるはず。

「これはただ羽織るだけだし普通に着られるね。翔くんは後ろ向いてて」

「ああ」

翔は巴に背を向ける。

しかし、それでも緊張してしまっていた。

後ろで生で着替えている巴。以前着替えを見てしまったことを思い出してしまう。

今振り返ったらどうなるのだろうか。

想像しただけで胸の高鳴りがますます激しくなっていく。

翔は首を振って煩惱を掻き消した。

「で、できたよ……。こっち見ていいよ」

「ああ……」

翔は若干の緊張感を持ちながらゆっくりと振り返る。

巴はきちんと言われたとおり着こなし、シャツもスカートの中に入れている。

ちゃんと着られているようなのでほっと安心する。

しかし、若干中の下着が薄くだが透けて見えるのは黙っていた。

「最後にブレザーとリボンをつけて終わりだ」

「うん」

巴はさっとブレザーを羽織る。しかし、最後のリボンがなかなか上手く付けられなかった。

「あれ？ おかしいな。上手くできないよお」

「ほら、貸してみろよ」

見かねた翔は赤いリボンを受け取り巴の首元に結ぶ。

そのとき、自分の手の下に巴の胸があると思うと、つい緊張で手元が狂い始める。

そのことに巴も気づき、二人は気まずそうに目をそらしていた。

「ほ、ほら、できたぞ……」

そして巴はとうとう制服を着終えた。

「どうだ？ 初めての制服だ」

巴は自分を纏う制服を見て嬉しそうに動く。

腕を上げたり広げたり、その場で一回転してふわっとスカートを揺らしたり、リボンに触れたり。

まるで新入生のように喜んでいた。

「あ、鏡」

翔は事前に持って来た手鏡を取り出し巴が見えやすいように構える。

ちょっと小さいが、少し動けばだいたいは見られる。

巴は鏡越しに見える自分の姿を見つめ、少し頬を赤くしながらすつと胸に手を当てた。

「わ、私……制服、着てるんだ……」

巴は嬉し涙を流し、軽く目じりを拭きながら「えへへ」と笑った。

翔は鏡を持ちながら小さく微笑を浮かべた。

目の前に映る巴の姿。中学時代の制服を纏い、若干の着慣れしていない仕草に、サイズが微妙に合っておらず手のひらを隠す袖、細い足をのぞかせるスカートに、赤く綺麗につけられたリボン。

その姿は、二人ともずっと前から見たいと思っていたものだった。

「ど、どうかな……。か、可愛いかな……」

巴がちょっと照れくさそうに、恥ずかしそうにポーズをして問いかけてくる。

翔はニツと笑みを見せ答える。

「ああ。似合ってるよ。すっごく可愛い」

巴はポーズを止め、呆然となると顔を真っ赤にさせた。

「そ、それより、次は何するの？」

ちよつと慌てながら巴が聞き出す。

「あ、そうだな。ま、巴はまだ来たばかりだし、まずは恒例の自己紹介からだな」

「うん」

巴は車椅子に乗り、真ん中の一番後ろの席に着く。翔はその隣に座った。

「では、まず一人ずつ自己紹介をしましょう。一番後ろの席の人、お願いします」

「あ、はいっ」

巴は返事をする、緊張を緩めるためゆっくりと深呼吸し、すつと立ち上がった。

「え、えと、は、春風巴です。趣味は読書と小説を書くことです。えと……な、長いこと入院してて、いろいろわからないことが多いです。その……え、えと、よ、よろしくお願いします！」

巴は丁寧に頭を下げる。翔は大きく拍手をし、その音が教室に響き渡る。

巴は顔を上げると頭を撫でながら軽く笑った。

そのあとは、巴が入院中に行っている高校レベルの問題集を中心に勉強したりして、第一回となる学校侵入計画は終わった。

学校を抜け出したあと、再びばれずに病室へと戻ってくる。

運が良かったのか、誰にも遭遇することなく戻ることができ、無事成功を収めた。

「翔くん。今日はありがとう。すごく楽しかったよ」

巴はベッドの上に座り満面の笑顔を見せる。

翔は制服をハンガーにかけて吊るし、車椅子を畳みながら答える。

「そっか。それは良かった。じゃ、また明日もな」

「うん！」

巴は嬉しそうに強くうなづく。

「じゃあな。巴」

巴は手を振って翔を見送り、翔は軽く手を振って応え病室を出た。

そのときだ。

「なるほど。二人は学校に行っていたのですね」

翔はドアを閉めるとはっと後ろを振り返った。

そこにいたのは、壁に背を持たれ腕を組んでいる秋元創の姿だった。

「どうりで来てみてもいないはずですね。まったく。病人を学校に連れて行くなど、どんな考えを持っていたらそんなことができるんでしょうね」

「……お前……」

「ちょうど良かった。ちょっと話をしませんか。言っておきますけど、拒否権はないと思った方が利口ですよ。……このことがばれれば、あなたはもうなるでしょうね」

事実上、これは弱みを握られたも同然ということか……。

翔は若干の怒りの籠った目を向けながらうなずいた。

第十八章 闘病

巴の病室で出会った瀬川翔と秋元創。

二人は創の提案で近くの喫茶店に赴いた。

以前座った席に座り、そして同じようにココアとコーヒーを注文した。

「さて、まずはいろいろ聞かせてもらいましょうか。……学校に行こうと提案したのはどちらですか？」

創は余裕の表情で問いかける。翔は迷ったが、苦々しく答えた。

「……巴の願いだ。それを俺が協力した」

創は含み笑いをしながら目を閉じうなづく。

「なるほど。ま、それが嘘だとしても本人に聞けばわかること。それで、あなたはわかっているのですか？　もうすぐ巴さんは死ぬってことを？」

翔は真剣な表情でコクツと首を縦に振る。

「……わかってる」

「なら、なぜ学校に行くなどという願いを叶えさせたんですか？　学校に行くだけでどれだけ体力が減るか……。治る病気も治らなくなりですよ。それをわかって実行したのですか？」

確かに創の言うとおり、リスクの高い行動だったと思う。しかし……。

「……そうだ。それが巴の願いなら、俺はいくらでもする」

創はソファに深く座りため息を吐く。

「呆れた。それでも巴さんの一番の友達ですか？　もっとあなたは利口な人だと思っていたのですが」

創は届いた注文の品であるココアを啜り再び口を開く。

「あなたはまだ病気というものを甘く見ている。あまり容易に考えていると痛い目見ますよ」

「……別に俺は甘くみてない。ただ巴の願いどおり——」

「その考えが甘いんだ！」

創が拳で机を叩きつけ怒声を上げる。そのせいで周りの客や店員までこっちに注目していた。

創は冷静さを取り戻し軽く咳払いをする。

「失敬。つい取り乱してしまいました。しかし、この病気だけは甘く見ないでほしい。ま、実際かかっていない人には半分も理解できないでしょうね」

翔もコーヒーを一口啜り口を開く。

「確かに病気の苦しみはわからないかもしれない。でも、それでも俺は巴の力になりたいんだ。だって、巴はそう願っているんだから」

「その言葉が果たしていつまで口にできるでしょうね」

「……え？」

創はポケットからすつとあるものを取り出した。

それは一つの鍵だった。

「これは……」

「病院の鍵です。裏口の方ですがね。そうですね。今晚の午前二時くらいに、巴さんの部屋を訪れてみてください。しかし、中に入っているはいけません。廊下の影からそつと覗くだけです。誰にも見つかってはいけませんよ」

創は手を伸ばし鍵を差し出す。翔は少し躊躇したが手を伸ばして手のひらに収めた。

「あなたに教えてあげます。……病気という恐ろしさを。そして……二度と、愚かなまねができないということをね」

創はオーダー表の上に千円札を置きすつくと立ち上がると店から出て行った。

翔は右拳にある鍵を握りしめ、じっと見つめていた。

深夜になると、翔は行動を開始した。

深い眠りに入っている親にばれないように家を抜け出し、自転車を走らせ河守総合病院を訪れる。

わかるとおり、病院内は静かで物音しない静けさに包まれ、闇に包まれているせいか、異様な雰囲気を感じられた。

翔は閉じられたフェンスの近くに自転車を置くとよじ登り潜入に成功する。

そして裏口に周り、創から貰った鍵をポケットから取り出し、鍵穴に入れる。

半信半疑だったが、鍵は本物らしく、カチャリと小耳の良い音を出し戸は開いた。

「……………」

翔は真っ暗な廊下を見渡し、幽霊でも出ないかと内心ビクビクしながら静かに忍び込んだ。

裏口だと階段はあってもエレベーターはない。必要時以外使うことのない汚い階段を上がり、五階の巴の病室へと向かう。

時刻はそろそろ二時を回ろうとしていた。

いったいこんな深夜に来て何があるというのだろうか。来れば病

気の苦しみがわかるようなことを言っていたが、そんなことどうやって……。

翔は角を曲がろうとして足を止めるとさっと隠れた。

この角を曲がれば一直線で巴の部屋に着くのだが、何やら騒がしい音が廊下中に響いていた。

翔はそつと顔だけを出し様子を窺う。

一つの病室の戸が開かれ、懐中電灯だけの光を頼りに大勢の看護婦たちが動き回っていた。

「先生を早く！ 慎先生を呼んで！」

「大丈夫よ！ しっかりして！ すぐに先生来るから！」

「もっと輸血を持ってきて！ まだ足りないわ！」

「誰か手足を抑えて！ 暴れないようにしっかり固定して！」

いったい何があったのだろうか。誰かの病気が悪化したのだろうか。

そのとき、信じられない名前が耳元に聞こえた。

「しっかりして！ 巴ちゃん！」

え……？

巴……？

翔は隠れることを忘れ体ごと廊下に出し耳を澄ませる。

「落ち着いて、巴ちゃん！ 大丈夫だから！ もうすぐ先生くるから！」

「うっ、がっ、ああっ！ ああああああっ！」

「誰か早く抑えて！ もっと血を持ってきて！」

「ああっ！ く、苦しっ……。ああっ……。ごほっ！ がはっ！
あああああああっ！」

「慎先生はまだなの！ これ以上は危険よ！」

「あああああああっ！ た、助けて……。痛いっ！ 痛いよっ！
があ、ああああああああっ！」

「お願い！ 巴ちゃん！ 大丈夫だから落ち着いて！ しっかりして！」

何度も呼ばれる『巴』という名前。

そして時節聞こえる苦しげな叫び声。

翔は気づけば走りだし、その病室に向かっていった。

「え？ 翔くん？」

戸の前にいる看護婦たちを無理やりにどかし中に入る。

そして目の前の状況を把握し、翔は呆然と立ち尽くしていた。

信じられない光景が映し出されていた……。

三人の看護婦が巴の手足を力づくで抑え、一人が輸血をしている。

巴はベッドの上で苦しそうに暴れまわり、痛みに悶え、口からは何度も血を吐き、周りの床や壁、シーツは吐血の赤い血で染まっていた。

そのときだ。

「あああああっ！ あああああああああっ！ うっ、がはっ！ ごほっ！ ごほっ！ はあ、はあ……。ぐっ、あっ、あああああああああああっ！」

巴は翔がいることにも気づかず咳き込むたびに出てくる血を浴びながらのた打ち回る。

翔は今の巴の姿に混乱し、体が動かず見ることでしかできなかった。

声をかけることも、手を握ることもできず、ただ見ることでしかできなかった。

そして頭の中で自問自答が始まった。

なあ、この状況を作ったのは誰だ？

巴の病気はこんなにも悪いのか？

こんなにも苦しくて死にそうなくらい怖い病気なのか？

巴は平気なのか？

もしかして、このまま死ぬんじゃないのか？

巴はこんな苦しみをあの時からずっと耐えてきたのか？

なんで？　なんでそこまで我慢して生きようとするんだよ。

もう楽になれよ。

もう見たくねーよ。

巴のこんな姿、見たくねーよ。

嫌だ。

認めたくない。

なあ、笑ってくれよ、巴。

いつもみたいに笑ってくれよ。

頼むよ、巴……。

そのときだ。

「先生！」

その言葉が届いた瞬間、翔は後ろを振り向いた。

そして、

「どけっ！」

俺は誰かに突き飛ばされ、部屋に隅に転がった。

「これは……。ちっ！　すぐに輸血を！　時間がない！　ここで治療する！　鎮静剤を！　あと麻酔に、私の部屋から――」

見慣れた白衣を着た慎先生が的確に指示を出し、良くも知らない薬の名を上げ、巴の体を抑えつける。

翔は気づけば看護婦に手を貸され椅子に座っていた。

目の前で繰り広げられる巴の苦しむ姿と慎先生の懸命の治療を、ただ黙ってじっと見ていた……。

第十九章 再起

あれから一時間以上が経ち、あまりはつきりしない頭をしながら慎先生の部屋に翔はいた。

いつものパイプ椅子に座り、手には冷たいコーヒーが握られていた。

手のひらから伝わるひんやりとした温度だけを感じとっていた。

「……聞かせてもらおうか」

翔の目の前には慎先生がいた。椅子に座り、巴のカルテを見ながら問いかける。

「なぜ深夜にも関わらず病室にいたんだ？」

慎先生は怒っているのか顔を見るだけで怒りを感じ取れる。

翔はさっきから頭の中では巴のことばかりで働かないが、ゆっくりと答える。

「……秋元創から鍵を貰って、深夜に行けば病気の苦しみがわかるって……」

「？ 鍵？……見せてくれ」

「……はい」

翔はゆっくりな動作でポケットから鍵を取り出し慎先生に渡す。

慎先生はその鍵を見て舌打ちをした。そのまま握りしめ、ポケットの中にしまう。

「それで、病気の苦しみを知るために来たんだな」

再び向かい合い、質問を始める。翔は目を合わせずうつむきながら坦々と答える。

「……はい」

「……そうか。……それで、どう思った？」

「え？」

翔はそつと顔を起こし、慎先生を見る。

「……あんな巴ちゃんの苦しそうな姿を見て、どう感じた？」

慎先生のきつい視線を見つめ、翔は再びうつむくと答えた。

「……病気って、こんなにも苦しいもんなんだって、初めて知りました」

そう答え、続きがないと判断し、慎先生は一息吐く。

「そうか。……ちょっと気になることがあるんだが」

「……はい」

「確かに今夜のことは巴ちゃんが発病してから多々あった。しかし、あれほど発作が起こることはごく少ない。考えられることと言えば、巴ちゃんが無理をしてまで体力を使い果たしたこと。そのことに、何か心当たりはないか？」

その言葉に翔はハッとする。

考えられることと言えば、学校に行ったことだ。

それ以外に考えられない。

だったらなんだ。さっきまでの巴の苦しみ、あれを作ったのは自分だったのか。

自分のせいで巴はあんなったのか。

そう思うと、翔の体は震え、手に持っていたコーヒーを落としてしまった。

「か、翔くん？」

「……俺だ。俺のせいだ……。俺が、学校になんて連れていったから……」

「学校？……まさか、巴ちゃんを学校に連れて行ったのか!？」

慎先生は椅子から立ち上がると翔の肩に手を置き強引に問いかける。

「……はい。巴が学校に行きたいっていうから……だから、俺……」

「くっ！」

慎先生は拳をぎゅっと握ると振り被った。

そして……。

頬に痛烈な痛みが走った。力と骨が当たる感触。

翔は椅子から勢いよく落とされ床にぐったりと倒れる。

だんだんと殴られた箇所痛みが増していき、つーつと血がしたっていく。

慎先生は翔に容赦のない怒りの籠った目をして睨み付けながら荒く息をする。

「君は、なんてことをしてくれたんだ……。確かに私は彼女の願いを叶えるようにとはいった……。しかし！ 病気を悪化させ、寿命を縮めろとは言っていないぞ！」

慎先生の怒声が心に響く。

そう。全て自分のせいだ……。

「出ていけ！ 君はもうここに来るな！ 今すぐ出て行くんだ！」

翔は体に力を入れゆっくりと起き上がる。

そのとき気づいた。

慎先生は泣いていた。

翔を睨み付けている目から、大粒の涙を流し、頬を伝って落ちていた。

拳は力が入りふるふる震え、自分を制御するかのように歯を食いしばっていた。

しかし、涙は止まらなかった……。

翔はうつむくと、黙ったまま背を向け、部屋を後にした。

慎先生は翔が出ていくことを確認すると机の前にある椅子に座り、頭を抱えて呟いた。

「……ばかやろお……」

病院を出た翔は、放心状態のようにふらふらしながら自転車のあるところまで歩く。

すると、そこには秋元創が立っていた。

「どうやら、その様子だと目の当たりにしたようですね」

いつもの偉そうな口ぶりでもなく、表情もどこか悲しげなものに

なっていた。

そして巴のいる病室に目を向ける。

「人類は地球上の生物の中で一番の知力と技術を持った高等な生物。どんな猛獣でも怪獣でも、科学技術が発達し、知恵がある人類に敵はいない。しかし、それでも長年苦しみ、悩み、足掻いても完全な勝利を手に入れることのできない相手がいた、それが病氣です」

創はすつと自分の胸に手を当てる。

「僕は運が良く勝ちましたが、全員が勝てるかはわかりません。昔からいろんな病氣が流行り、そのたびにワクチンなどで抵抗し改善策を見つけてきましたが、決して無くなることはないウイルス。病氣こそ、人類に立ちはだかる最強の敵。今も、そしてこれからも、彼らから逃れることはないでしょう」

創はすつと翔に目を向ける。

「これでわかりましたか？ 病氣の苦しみ、今の巴さんの現状、そして、自分がどれだけ甘く愚かだったかを。……少しは頭を冷やして、これからは迂闊に行動しないことを祈ります」

創は最後に巴の病室の窓を見て、翔に背を向け去って行ってしまった。

周りに誰もいなくなると、翔はその場に膝まづき、溜めこんでいたものを吐き出した。

アスファルトの上に零れ落ちる雫。

悔しさの涙。

悲しみの涙。

恐怖の涙。

恥ずかしさの涙。

怒りの涙。

そして、自分に対しての愚かさの涙。

なぜ自分はこんなにも健康なのだろうか……。

なぜ巴と一緒に病気を患わなかったのか……。

そう……。巴だけじゃない。日本中、いや世界中の病気を患った人たちが苦しんでも戦っている。

なら健康な人たちは何ができるだろうか。

知恵も、技術も、資格も、免許も、何もないものに何ができる？

答えは簡単。

なにもできない。

今はっきりとわかった。自分は愚かな人間だ。

巴の幼馴染？ 一番の友達？ 親友？

だからなんだと言うんだ。

それで病気が治るのか？ 苦しみがわかるのか？ 助けることができるのか？

結果はどうだ。どんなに思っても、どんなに喜ばせても病気は治ってないじゃないか。

逆に悪化させ苦しませているじゃないか。

バカみたいに自分だけを信じ、誰にも相談せず勝手な行動をして、招いた結果がこれだ。

「ちくしょおおおっ！」

翔は拳を握り何度も地面を叩いた。

痛みが広がり皮が破れ血が出る。

それでもかまわない。巴の痛みや苦しみと比べたら百分の一にも達していない。

自分は何も変わってない。成長もしていなければ、逆に退化している。

今まで自分は何をしてきたんだ。

毎日巴のことを考えてきたじゃないか！ 巴のことだけを考えて

生きてきたじゃないか！

なのに巴のこんな姿を見るために頑張ってきたのか。

違うだろ！

自分は健康だ！　自分は病気なんて患ってない！　だったら助けてやれよ！　何でもできるだろうが！

もう17だぞ！　子供じゃないだろ！

巴を助けたいなら、救いたいなら、治したいなら何とかしろよ！

瀬川翔！

「……………」

じっと目の前の涙で濡れたアスファルトを見つめ、拳から伝わる痛みを感じる。

心の中で葛藤し頭を悩ませても、答えはやっぱり出なかった。

自分は弱い。弱すぎる。こんなにも、自分って弱いんだ。

それなら、強さってなんなんだ。

力があればいいのか？　頭が良ければいいのか？　好きな人を守れたらいいのか？

……そんなこと、考えている時点で無駄だ。

翔はふらふらと立ち上がると自転車を漕ぐ。

目の前には朝日が昇り、眩しい陽光が送られた。

今から何をしようか。

君ならどうするだろうか……。

まずは寝る？

もちろん、あれしかないだろ。

翔は急いで自宅へと向かう。

誰にも治せないなら……俺が治してやる。

第二十章 調査

明け方、家に着いた翔はすぐにインターネットを開き検索し始めた。

誰にも治せないなら自分が治してやる。

巴を救うのは自分だ。

翔は巴の病名を入れその治療法を模索していく。

しかし、やはり巴の病気はかなりの難病で、完全に治癒した者は少なく、ほとんどが衰弱し死に到っている。

一番の治療法は手術なのだが、それにも条件が一致し、成功率も高くなければ途中で尽き果てるのがオチらしい。

だから慎先生もすぐに手術を行わず、薬で進行を妨げ、体力作りをさせ、機会を狙っている。

難しい専門用語が並ぶ画面を何度も目で追い探し、翔の瞼はだんだんと重くなっていた。

結局一睡もせず、三時間以上画面と睨めっこを続けている。

陽は完全に昇り、陽光が窓から部屋を照らしていた。

翔は軽く息を吐いて背伸びをし、パソコンを消すと疲れを癒すためベッドに倒れる。

「巴……」

翔はそっと目を瞑り、眠りに落ちた。

夢を見た。

それは昔を思い出し、巴と翔が遊んでいる光景だった。

二人ともまだ幼稚園児の姿で、一緒に川で遊んでいた。

冷たい水に足を着け、水しぶきをあげ掛け合ったり、石をどかしてカニを探したり、アメンボを追いかけたりと、楽しそうに笑い合っていた。

確かこれは近くの神社にある川で、夏に遊びにいったときだったはずだ。

親は近くのベンチに座り、会話に夢中になっていた。

翔と巴は水着姿で一緒にアメンボを追ひ、いつのまにか奥深くまで来たときだった。

『翔くん。お母さんに聞いたんだけど、大人になったらみんな結婚するんだって』

『結婚？ 結婚ってなに？』

『ええとね、お互い好きになるってことだよ』

『ふーん。巴ちゃんは誰が好きなの』

『私？ 私はね――』

巴が口を開きその人の名前を答える。

しかし、肝心なその部分が聞こえない。いや、思い出せない。

巴はその時、なんて答えたんだろうか……。

翔は目が覚めた。

目を開けると天井が見え、カチコチと時計の音が耳に入ってくる。

額からこめかみへと汗がつーっと流れ、全身の体温がいつもより高いとすぐに認識でき、背中シャツが張り付くほどだ。

壁に取り付けられた時計に目をやるとまだ正午を回ったばかりだった。

窓から差し込む容赦のない日光が入り込み、時節聞こえるセミの鳴き声がうざったく思える。

今は夏だったな……。

翔はゆっくりと起き上がり、出かける準備をした。

シャワーを浴び汗を流しているとき、ふと思った。

さっきの夢、巴は何て言ったのだろうか……。

翔は自転車を走らせ図書館へと向かう。

大きな県立図書館で、ここにならどこよりも多くの書籍が揃っており、きつと巴の病氣のことが書いてある本も見つかるはず。

中に入ると来る途中かいた汗が冷氣によってみるうちに引いていくのがわかった。

快適な温度に包まれた館内は静かな雰囲気に入れ本独特の匂いが鼻を刺激した。

一階にも二階にも本があり、三階には小部屋や大部屋があり、読み聞かせやレクリエーションなどができるようになっていく。

まずはどこに何があるのか把握するべく、入り口近くにある機械で探す本を検索する。

ジャンルは医学書なのだが、それだけでわかるだろうか。

検索結果、医学書は二階の奥の棚にあるのがわかったのだが、他にも外科、病名などを入力したが、見つけることができず、仕方なく外科専門の本棚に向かう。

来たのは良いが、そこには膨大な本の山で、端から端まで分厚い本ばかり。

その棚が十個以上とあり、果たしていつ探し終えるのか考えたくもないくらいだった。

翔は気合いを入れ直しさっそく取り掛かる。

難病を中心に探索し、それらしき本を数冊抜き取ると椅子に座って読み始める。

まずは巴の病氣の名前を見つける。

一枚一枚丁寧に指で追いながら凝視して文字の連続を追いかける。

しかし、何時間とかけて探していくが、まったく見つかる気配はない。

読まずに探すだけでいいから一冊数十分で終わるのだが、他にも何冊とあるので霧がない。

気づけばすでに二時間は集中して経っていた。

翔は一息入れようと背伸びをした。

そのときだった。

「せ、瀬川……くん？」

「ん？」

耳元に可愛らしく、若干の怯えが混じった声が聞こえた。

翔の目の前にいたのは逢坂薺だった。

なぜか良く会う。

「よお。逢坂さんも図書館に？」

「う、うん。ち、ちょっと、し、社会福祉士の勉強しようかなって、
思ってた……」

逢坂の手には二冊の社会福祉士と明記されたタイトルの本が抱えられていた。

「そっか。偉いな」

「そ、そんなこと……ないよ」

逢坂は顔を真っ赤にし、照れているのか本で顔を隠してしまった。

「あ、そこ空いてるから座れよ」

「う、うん。ありがと……」

逢坂は翔の目の前の席におどおどしながらゆっくりと座り、前にあるガラス状のテーブルに本を置くとともにじもじしていた。

翔はやる気を出して再び本に目を通していく。

そのとき、逢坂がか細い声で問いかけてきた。

「あ、あの……せ、瀬川……くん……」

「ん？ なに？」

「あ、あのね、その……」

逢坂はショートカットの髪を小さなツインテールにして結んでおり、その先を指でいじりながら若干頬を染めていた。

「……あつ、髪結んでるんだな」

「あ、う、うん。な、夏だし、ちょっと結んで……あ、そ、そうじやなくてっ！」

逢坂は何を慌てているのか、突然大声を上げながら立ち上がり、周りの視線を集めていた。

そのことを意識し始めると、だんだんと顔を真っ赤にさせ、ばつと席に着く。

「……大丈夫か？」

翔は少し苦笑いを浮かべながら心配気味に声をかける。

「……う、うん。そ、それより、その……わ、私の制服……どうしたのかなって……」

「え？ あ、そっか。ごめん。まだ返してなかったな。今度、クリ

「ーニングして返すよ」

「う、うん。返すのはいつでもいいんだけど、その……」

逢坂は若干うつむき、上目使いになりながら訊いてきた。

「……何に、使ったの……？」

「え？」

「いや、そ、そのね、か、借りたの女子の制服だし、そ、その……男子が何に使ったのかなって……」

確かに男子が女子の制服借りて何に使うのか、誰でも疑問に思うかもしれない。

今では変な使い方して楽しんでいる輩もいるから誤解されても不思議ではない。

しかし……。

「ああ。別に変なことに使ってるわけじゃないんだ。理由は言えなけれど、ちゃんと正しく使ってるから、気にしなくていいよ」

「う、うん。わかった」

逢坂は納得してくれたのか、最後は笑って了解してくれた。

「……瀬川くん、そんな難しい本読んでるの？」

「ん、ああ、まあな」

「そっか。将来は医者になるんだもんね。頑張ってね」

それもあるが、今の目的は巴のため。どちらも同じような理由だからいいか。

「ああ。逢坂も、社会福祉の勉強だろ。頑張れ」

「う、うんっ。ありがとっ」

逢坂は声援を送られて嬉しいのか、頬を抑えながら嬉しそうに笑みを浮かべ上機嫌だった。

こいつはたまに可愛いところがあるよな。

そして二人はそれぞれ目的の作業に入る。

そして夕方六時くらいになると、二人は外に出ていた。

「またね、瀬川くん。私、毎日午後から通うつもりだから」

「ああ。また会おうな」

翔は軽く手を振って行ってしまった。

逢坂は嬉しそうに笑いながら帰ろうと振り返る。

そのときだ。

「これはこれは、逢坂薺さん」

逢坂の目の前に立っている人物。それは秋元創だった。

「久しぶりですね。こうして会うのは初めてですかね」

「あ、秋元くん。終業式以来だね。どうかしたの？」

創は逢坂の後ろで歩き去っている翔を一目見、再び逢坂に視線を戻した。

「ちょっと話があるのですが、よろしいでしょうか？」

創は爽やかな笑みを浮かべて優しく誘い出す。

逢坂は何も考えず、首を傾げ、最後は了承する。

了解を得て、創は心の中で冷酷な笑みを浮かべていた。

第二十一章 企画

図書館の前で出会った創と逢坂薺。

二人は夕暮れ時、近くにあったベンチに向かい、薺は先に座る。

「どうぞ」

創が隣の自販機で買ったジュースを差し出す。

薺は小さく笑みを浮かべ礼を言い受け取る。

創は薺の隣に腰を降ろし会話を始めた。

「すみません、時間を取らせてしまって」

「ううん。大丈夫だよ。それで、話って？」

薺は一口ジュースを含み待つ。

創は一瞬だけ瞳の色を変え、すぐにいつもの穏やかな笑みを見せて問いかける。

できるだけ、自然にさり気無く聞き出し、こちらの心中を探れないようにしなければ……。

「そうですね。実は……ちょっと深刻な悩みでして……」

「…………え？」

「こんなこと話せる友達、まだそこまでいなくて……」

本当に創は深刻な表情で、うつむきながら悲しげな眼をしながら言葉を濁す。

「え？　で、でも、その、あ、あのね、そ、相談相手が、私なんかで……いいのかな？」

薺は戸惑い慌てふためく。

「薺さんだからこそ話せます。僕の友人の中で、真剣に受け止め考えてくれる人は薺さんしかいないと思って」

「そ、そこまで評価してくれてたなんて……。よし！　何でも聞いてよ。私がその悩みをずばり解決させちゃいます！」

薺が無い胸を張って調子に乗ったかのように自信満々に言い放つ。

「本当ですか？　ありがとうございます」

創は嬉しそうに笑顔を見せるが、内心嘲笑っていた。

信用はできるが、能天気でお子ちゃまな考えしかないと利用しやすいだけで選んだだけだ。

こうやってちょっと頼られるだけでその気になるとすぐにわかっていて。

ほんとにバカだな……。

「それで、その悩みってなに？」

「はい。実はですね……僕と翔くんのことなんです」

「え？ 瀬川くん？」

「はい。僕は翔くんともっと仲良くなりたいと思ってます。しかし、どう話したらいいのかも、趣味もわかりませんので、友達になる方法が、その……よくわからなくて」

「そっか。うん。秋元くん、ずっと入院してたし、友達の作り方とかわからないよね。すぐに夏休み入ったから、まだクラスと馴染めてないみたいだし」

「はい。だから、まずは翔ちゃんと仲良くなりたいと」

「うん。でも、なんで瀬川くんなの？ 他にもいるけど」

創はちよっただけ迷ったが答えた。

「実は、翔くんは河守総合病院で何度か見かけたことがありまして。だから唯一顔は覚えているのです。なので選んだのですが」

「そっか。瀬川くん良く病院にいるよね」

「はい。だから、薺さんが知っている翔くんのことを、教えていただけないかと」

「うーん。そうだね。私が知ってる瀬川くんは……」

そこで齊の顔がだんだんと赤面していく。そしてボンツと音がしそうなほど真っ赤になってしまった。

「……どうしました？」

「う、ううん。な、なんでも、ないよ……」

創は小さくばれないように息を吐く。

わかりやすい人だ。

「え、えと、瀬川くんのことだよ。私は瀬川くんとは中学から一緒の学校で、何度か同じクラスにもなったんだ。瀬川くんはいつもクラスのみんなと一緒にいて、中心人物っていつでも過言じゃないくらい人望はあったよ。でもね、放課後や休みの日は絶対といっていいほど寄り道したり遊びにいたりしないんだ。多分だけど、病院に行ってるんだろうね」

「なるほど。そうなのですか」

「うん。それでね、将来は医者になりたいようだよ」

「……医者、ですか？」

「うん。そこが秋元くんと一緒だよ。進路希望で医学部志望って書いてたんだ。だから、さっきも図書館で病氣の本を読んだよ」

その言葉に創は小さく冷笑を浮かべて食いついてきた。

「病氣の本ですか……。それはどんな本ですか？」

「けっこう難しそうな本だったよ。専門用語ばかり並んで、まったくわからなかった」

そこで創は深く考え込む。

医学部志望だからと、いきなりそんな専門書を読んでも医者になれるわけではない。

彼でもそれくらい知っているはず。ならば、考えられるのは巴さんに関する事。

この前はあるな姿を目の当たりにして何とも思わないわけがない。

となれば、考えられるのは、巴さんの病気を調べ、少しでも完治できるようにと対処法を調べていたのだろう。

創はうつすらと口元の端を上げる。

そんなことしなくても、それに詳しい先生が傍にいないか……。

そろそろ、あの秘密をばらすか……。

「逢坂さん」

「ん？」

「……あなたには教えます。翔くんの秘密。今日いろいろ相談に乗

ってくれたお礼です」

創はそつと薺に耳打ちする。

全ての言葉を聞いた薺は「え？」と小さな声を上げてその場に固まる。

創はすつくと立ち上がると薄ら笑いを浮かべその場から去って行った。

瀬川翔……。

君にはもつと絶望を知ってもらおう。

巴さんを守るのは……この僕だ。

その頃、翔は今日一日何も収穫がなかったことに落ち込んでいた。

やはり巴の病気は珍しくすぐに見つかるものではない。

「仕方ない。明日も探すか」

巴のためなら何でもする。

それもそのはず、この夏休みで巴とはお別れなんだから……。

そう思うと、翔はその場に立ち止まってしまった。

行き交う人たちが何度か翔を見て去っていくが、翔は気づかず、そして涙が溢れていた。

やはり怖い。

もうすぐ巴と別れるなんて考えたくない。

今まで自分はずっと巴のために動き、働き、接してきた。

なのに、たった十七年で生涯を終えてしまうなんて……。

……嫌だ。

いや、巴の生涯が終わることより、自分は永遠に別れてしまうことが嫌なのだ。

今まで居た人が、突然目の前に消えてしまう

死別とは別れの中でも最も悲しい別れ方だ。

二度と、再び会えることはないのだから。

翔は歩き出すと、夕方近くなった刻でも、ある場所へと向かった。

第二十二章 秘密

夕陽が次第に沈んでいき、茜色に染まる街中を、翔は少し早歩きである場所へと向かっていた。

今は巴に会いに行くことはできない。

無理にでも忍び込んで会いに行こうと思えばできるが、おそらく今は安静に眠っていることだろう。

ならば、その間にあの場所に久しぶりに訪れようと思う。

夢で見たあの場所。

二人の懐かしい思い出の場所の一つだ。

町から外れ、ちょっとした田舎道を通り、少し大きな石橋に、その下を流れる川、そして奥には神社がある。

名前は西寒田神社といい、二人が幼いころはよく遊んでいた場所だ。

神社だが、遊具や広い遊び場もあり、なかなか広い敷地なのだ。

翔は昔のことをふと思い出しながら歩き進んでいく。

翔と巴の親が仲良かったせいで、大抵は二人で遊んでいた。

親は高校時代からの親友だそうで、子供が遊んでいる間にいろいろ話をしたいらしい。

そのおかげなのか、こうして幼馴染として定着し仲良くはしているが、男友達の幼馴染も欲しかったと思う。

夢で見た場所は、本当に小さな川で、水位も足首程度で子供が遊ぶならちょうどいい場所だ。

そこに辿り着くと、翔はしゃがみ込みそっと川も水に触れた。

冷たく、手の先から若干痛みを走りながら体全体に伝わってくる。

遅い時間だから子供はおろか、人もおらず、周りは翔一人だった。

翔はひょいっと近くにあった手の平くらいの大きさの石を掴み上げてみる。

昔ならすぐにカニが出てきたのだが、今はいなかった。

翔は石を元に戻し、立ち上がるとある個所を見つめる。

夢の中で会話した奥深くの位置。

翔が初めて結婚という単語を知った場所。

あの時、巴は何て言ったのだろうか……。

翔は視線を落とし清らかに流れる川を見つめる。

一つだけ、翔はある疑問点を抱いていた。

慎先生や看護婦が言うには、巴はいつ急変や死期が来てもおかしくない状態なのだそうだ。

しかし、巴は悔いを残したくないのか、まだやり残したことがあるのか、異常な精神力で粘り続けているようだ。

巴の忍耐力を高めるその願いとは何だろうか。

やはり学校に行くこと？ それとも小説を書くことだろうか。

そういえば、最近巴は小説書いてなかったな。

翔は踵を返すと、神社を後にした。

その帰り道、日が暮れてしまった時刻に、その人物は現れた。

「こんにちは。いえ、今はこんばんは、ですかね」

「……お前は人を待ち伏せするのが好きなのか？」

「ふふ。そうかもしれませんね。こうして待つのは苦になりませんし」

「それで、ここにいてことは俺に何か用があるんだろ？」

「はい。ちょっと話がしたいと思ひましてね」

翔の目の前にいる人物。

それは秋元創だった。

二人は公園のベンチに座り、街灯だけが照らしている薄気味悪い中会話をする。

夜といってもやはり夏は蒸し暑く、涼しい風が吹いているが、うつとうしきは健在だった。

「さて、今日はちょっと聞いてほしいことがありますてね」

「いつもだろ。さっさと言え」

「あれ？ 何か怒ってますか？」

翔は腕を組みながら若干憤慨している。そんな翔を見て創はおもしろそうに含み笑いを浮かべていた。

「怒るも何も、俺はお前が嫌いなんだ」

「ふふ。それは僕も同じですよ。正直言えば、僕は君が憎いですし」

「なら夜に呼んだりするな」

「もしかすると、いわゆるこれがツンデレというもので、実際は好きなのかもしれませんね」

「……寝言は寝ていえ」

「失敬。そうですね。おっしゃると通りです。では、本題に入りましょう」

創は人差し指を立てて偉そうに言った。

「慎先生の秘密を知ってますか？」

「……は？」

翔は突然の慎先生の単語で頭の中が混乱していた。

「良く考えてみてください。慎先生は将来を期待されたほどの上を持つ言わば大型新人ですよ。そんな彼が、なぜこんな田舎にある大して名もない病院にいるのか。気になりますか？」

「別にいいじゃないか。慎先生が望んだんじゃないのか？」

「しかし、この街と慎接点は何もありませんよ。そもそも慎先生の出身は関東ですし」

「じゃ何か、慎先生はこんな田舎まで飛ばされてきたと？」

「そう考えるのが得策でしょうね。果たしてそれはなぜか」

「そんなのどうでもいいだろ。そのおかげで、あんな凄腕が巴の担当医なんだ。安泰だな」

「少しは警戒心を持ったらどうですか？　なぜ飛ばされたのかもわ

からない期待の新人が、こんなところにいるのか。普通に考えて、何か裏がありますね」

「……お前は何が言いたいんだ？」

「実はですね、こんな噂を耳にしたんですよ」

創はゆっくりと口を動かし小声で囁き込む。

その言葉を聞いた翔は目を開き愕然とした。

「……それ、どういうことだよ……」

「言った通りです。確信はありませんが、過去を知る限り、その可能性は高いかと」

「でも、そんな感じはしないぞ」

「隠しているのかもしれませんが。実際、巴さんの症状は良くなっていますか？　もしかしたら、慎先生はそのため……」

すると、翔は突然立ち上がり走り出した。

その後ろ姿を創は見送り、小さく笑う。

「瀬川翔……。どんどん人間不信に陥れ。そしたら君は……」

「はぁ……はぁ……」

翔は膝に手を着き息を整える。こめかみを流れる汗が顎を伝い落ちていく。

顔を上げると、目の前には暗闇に包まれた河守総合病院がそびえ立っていた。

さっき創が言ったことが本当なら、巴が危険な状態ということになる。

信じていた担当医がそんなことをしていた何て……。

翔はぎゅっと拳を握り締めると、足を前に出して進み始めた。

やはりというべきか、正面玄関は閉まっており鍵がかかっていた。

しかし、受付には電気が点いていた。

翔は聞こえるようにドンツドンツとガラス戸を叩いてみる。

すると、その音で気づいた看護婦が翔を眼にし開けてくれた。

「あら、翔くんじゃない。こんな時間にどうしたの？」

「すみません。ちょっと慎先生に用があって」

「慎先生？　でも、まだいるかしら」

「さっき連絡を取ったらまだいるようなので」

「そう。まあ特別に許してあげるわ。入っていいわよ」

「ありがとうございます」

翔は中に入ると、慎先生の部屋へと向かった。

その頃、慎先生は真っ暗な部屋の中、机の前で巴の書類とカルテを見て頭を悩ませていた。

時間がない。このまま死期を来るのを待つのか……。

いや、何か方法があるはず。またあの時の二の舞にはなりたくない……。

すると、部屋がノックされる音が聞こえた。

「どうぞ」

声をかけるとドアがゆっくりと開かれた。

そこに立っている人物。その正体を知り、慎先生の眉がぴくっと動いた。

「……翔くん」

自分の目の前に立っている人物。自分を睨むように見つめ、今にも襲い掛かりそうな雰囲気をつらつらと纏った瀬川翔が立っていた。

「どうしたんだ、こんな夜遅くに。それに言っただろ。もう来るな
って」

それを無視し、翔は言い放つ。

「……患者を見捨てたっていうのは……本当ですか？」

その言葉を聞いた瞬間、慎先生は自分の心臓を鷲掴みされたかのように息苦しさを覚えた。

そして震える声で、できるだけ冷静さを取り戻しながら言い返す。

「……誰に聞いたんだ……？」

「秋元創」

やはり彼か……。

翔は怒りを込めながら言葉を続ける。

「これがもし本当なら、今すぐに巴の担当医を外してもらいます」

慎先生は翔に背を向け、窓から見える月を見上げる。

仕方ないか……。

「……入りたまえ。話してあげよう。……私の過去を」

翔は部屋の中に足を踏み入れると椅子を出して座る。

慎先生は軽く息を吐いて机の前の椅子に座る。

「さっき言っていた質問に答えようか。患者を見捨てたかどうかだつたな。その答えは……………本当だ」

第二十三章 過去

蒸し暑さの残る夏の夜。

時刻はすでに午後八時を回ったときだった。

翔と慎先生はお互いコーヒーの入ったカップを持ち、電気の消えた一室の中にいた。

翔はいつものパイプ椅子に座り、静かに耳を澄ましていた。

慎先生はコーヒーを一口啜り、机の前の椅子に座りながら、目の前に見える輝く満月を見る。

そこで慎先生はふと思った。

この話をするのはいつぶりだろうか。

そしてこのことを知っているのは、おそらくごく数人のはずだ。

慎先生は小さく見えないくらいの笑みを浮かべ、そっとポケットからタバコを取り出し一服する。

緊張を紛らわすこの一服で心を落ち着かせ、できるだけ冷静に話そうと心がける。

煙が微かに開け放たれた窓の隙間から外へと流れ空に昇って行く。

そんな光景を目に入れながら語り始めた。

慎先生の犯した罪と過去を……。

水瀬慎は東京の国立大学の医学部に現役で合格し、それも入学試験をトップの成績を収めた優等生だった。

頭も良く、社交性もあり、友人からの信頼も厚く、容姿も文句なしと、何においても完璧な学生だった。

そんな彼を、誰もが恋人にしたいと思った。

高校から人気の高かった慎は、数えきれないほどの告白を受けたが、どれも断っていた。

なぜなら、自分にはやりたいことがあるからだ。

それは医者になって、少しでも多くの患者の病気を治すこと。

それが、彼の夢だった。

「この頃は僕も若くてね。医者というものをわかっていなかったんだ。だから、病気を治すなどと簡単に口にできたんだ」

「でも、それは誰でも思うことだと思いますよ」

「だろうね。しかし、この世界は本当に甘くないんだ。医者という

のは病気を治すのではなく、治すのを手伝うもの。しかし、世間は医者が病気を治すと思っている。その分責任が襲ってくるものだ。その重圧に耐えてこそ、初めて医者になれるんだよ。さて、続きだ」

一年、二年、三年と順調に単位を取得し、大学でも優れた成績で教授からの評価も高ければ、飲み込みも早く、期待の新人と言われるほどだった。

もちろん勉強だけでなく、高校時代からしているバスケのサークルにも所属し、小さな大会では優勝するほどの実力を持ち、その中でもエースを務めるほどの才能を発揮していた。

その結果、文武両道、両方からの期待は並々ならないものだった。

慎自身、その期待に応えるように何でも優秀に務め、そして医師免許も一発で取得した。

そのまま慎は大学病院の医者になった。

期待の新人でも、新米は新米。最初にやることは主に雑用が多かった。

サポートや患者への薬の提供、書類の整理や研究の手伝い、また夜勤もあれば、寝る間も惜しんで勉強もしなければならぬし、論文の期限も迫ってくる。

医者といっても最初は安月給で十分に暮らせず節約の日々。

毎日徒勞の生活だった。

「医者ってこんなに大変なんですか？」

「まあね。簡単な仕事ではないさ。一応、人の命に関わる職務だからね。やることは五万とあるさ。全てやろうと思っても終わらないほどね。みんな医者は金持ちだというけど、新米は安月給だし、ほんのお金持ちは主治医か自分の病院を持っている人だけ。それでも苦しい人はいるけどね。休みがないから大変さ。さ、ここからだ」

そんな彼も、いつしか恋をしていた。

慎の彼女である、ひらのたまま平野環が、彼の恋人である。

彼女と知り合ったのは大学のコンパである。

いわゆる飲み会で二人は出会い、意気投合し、何度か遊びに行く真柄になり、いつしか付き合うようになった。

彼女は同じ大学の文学部で、慎と劣らず優等生であり、容姿も完璧だった。

しかし、彼女は生まれつき体が弱く、サークルも入れなければ、運動も一時間以上できないほどだ。

このような体つきで、重労働や社会に出て働くなどできない。

そのことを知っている慎は、大学卒業後、二人は同棲するようになった。

家に帰れば環がいる。

そう思うだけで、慎の足は自然と早歩きで自宅に向かう。

ワンルームしかない築十年以上の安アパートだが、住める場所、そして二人がいればどこでも幸せだった。

その力が糧となり、慎の論文が高評価で、有名な教授の助手を務めるようになった。

これで給料も上がり、生活は楽になった。

「さすが先生ですね。まだ二十代なのに、すぐに昇進しましたね」

「運が良かっただけさ。それに、環のためと思えば、本当に苦にならないかったからね。この気持ちは、おそらく君が巴くんに抱いている感情と似たようなものさ。でもね、これから悲しいことがあったんだ……」

順風満帆に思えた二人の生活に、とうとう死の刃が襲い掛かったのだ。

そう、悲劇は起こった……。

それは慎が技術や知恵が身に付き、多くの患者を受け持ち、何度も手術を行い、医学界でも若手の凄腕を持つ医師として有名になったときだった。

慎の恋人の環が倒れたのだ……。

第二十四章 真相

突然の慎の恋人である環の転倒。

環が発見されたのは、慎が夜遅く帰ってきたときだった。

キッチンの横で、横になりながら苦しそうに胸を抑え、荒い息をしながら尋常じゃない汗を掻き、肌は青白く最悪な状態だった。

慎はしばらく目の前の現状を把握できず、また信じられず、ハッと我に返るとすぐに環のそばに寄り診断を始める。

症状からして今まで見たことがないものだった。

ここでは詳しい検査は行えない……。

慎はできる限りの応急処置を施し、すぐに自分の勤める病院へと環を運んだ。

深夜なので、まだ残っている医師や看護婦は少ない。

しかし、万が一のための事故などの対応のため、手術ができるくらいに人数は揃っている。

慎は環に鎮静剤を打ち、すぐにMR検査や詳しい診察を始める。

しかし、今まで勉強してきた中に、このような症状の例はなかつ

た。

新手のウイルス？ それとも稀で知られていない病？

どちらにせよ、すぐに何らかの処置を施さなければ命が危ない。

慎は片っ端に知り合いの医師に連絡を取り、今の症状を事細かに伝え、その真意を探ろうと試みる。

そして一番の古株で、長い経歴を持つ医師のおかげで原因がわかった。

それは翔の幼馴染、巴と同じ病気だった……。

慎は病名を知っていた医師、羽山先生と共に検査を行う。

羽山先生によると、症状はすでに末期に到達し、進行が深く命が助かる可能性は低いと判断する。

恐らく前から多少の違和感や症状は出ていたはず。

しかし、彼女は経済的余裕がなく、それを心配したのか、ここまですっと我慢してきたのだろう。

そうとう苦しかったはずだ。なのに、ここまで我慢してきてしまった。

もう何年も我慢して、痛みと苦しさと闘ってきたのだろう。

羽山先生はカルテを見て厳しい表情をする。

慎はどうすれば治るのか、強く懇願して問いかける。

治すには手術しかないが、それで完全に治る保証も、後遺症がないという保証もなければ、手術中に息を引き取る可能性が高いと告げる。

一番良いのは、このまま安らかに安楽死を進めることだが、慎は今自分の恋人が死ぬということしか頭になく、冷静に判断ができていた。

慎は目に闇を宿し、誰にも許可を取らず、環を手術室へと運び、一人で執刀を決意する。

慎はまだ若く優秀でも新米であり、手術も助手や許可がなければできない身分。

しかし、それを独断で行おうとしていた。

鍵をかけているので中に誰も入ることはできない。

外から戸を叩く音が中にまで響くが、慎は気にせず、目の前の患者、自分の恋人を救うことしか頭になかった。

目の前に麻酔で眠っている姿を見、そつと頭を撫でる。

まだ若い。まだ結婚もしていない。

彼女は、まだ歩むべき人生がある。

やることがたくさんある。

結婚して、子供を産んで、育てて、子供の旅立ちを見送って、老後を楽しんで。

やり残したこと、やりたいこと、お互い満足していないことなど、山ほどある。

慎はゴム手袋をはめ、ふっと息を吐く。

自分は期待の新人。凄腕を持つ若き医師。

自分なら、できるはずだ。今まで何でもできたのだから。

どんなことをしても、環を助ける……。

……。
慎はメスを取り出すと、集中し始め環の胸部にそっと力を込めた

手術は難航した。

慎自身、手術は初めてでなく、何度も助手をやってきたし、執刀医を任されたことも数回ある。

しかし、こんな大手術を一人で行うほどの経験や知識はまだ乏しいはず。

期待の新人といえど、それは知識や技量だけで、経験値はまだまだ習うことは山ほどある。

いわばこれは無謀ともいえる挑戦である。

それでも慎は必死に治そうと、成功させようと腕を動かし進めていく。

しかし、ここで思わぬことが起きた。

ピ————。

ここで環の心拍が停止した。

慎はその音を聞き急いで電気ショック機を取り出し、環の腹部に押し当てる。

何度もドンツという鈍い音と共に環の体が跳ねるが心拍は戻らない。

慎は焦りを感じながら何度も行う。

すでに十回はしているはずなのだが、電気ショックは効果がなく停止したまま。

慎はそれを放り投げると自らの手で行う。

そのときだ。

いきなり環の口から大量の血が吹き出し顔を真っ赤に染めた。

メスで開けた胸部からも血が溢れ流れている。

このままでは大量出血で死んでしまう……。

慎はすぐに輸血用の血を取り出しチューブの先の針を環の腕に射す。

しかし、その間にどんどん血は流れ、心肺も停止したままだ。

それに早く手術も終わらせなければ、環の体力も底がついて死に到ってしまう。

同時に起きた三つの命の危機。

まずはどれから取り組めばいいのか頭の中が混乱してきた。

目の前の真っ赤な血、耳に響く電子音、そして時間との勝負。

慎は今悟った。

環のことは助けたい。

しかし、今の自分では何もできない……。

そう……、見捨てることしかできないのだ。

優秀だの、期待の新人だの言われてきたが、目の前の患者、しかも自分の恋人の命でさえ守れないのだ。

今の自分の力じゃ、環は助けることができない。

慎はその場に膝ま付き、ガクツと肩を落とし項垂れる。

そして少しずつ嗚咽を漏らし涙を流した。

自分の不甲斐無さ、愚かさ、傲慢さ、それだけじゃない。

知恵、技術、経験、経歴、素質、能力、才能、全てにおいて、自分の力の無さに絶望を感じた。

一番救いたい人。守りたい人。そばにいて欲しい人。

そして、世界中で誰よりも愛している人を、助けることができなかった……。

こんなの、自分が目指していた医者ではない……。

慎は精神崩壊し声を荒げ、暗闇の中へと落ちて行った――。

外では一人が鍵を取りに行き、中に入ったときには、床に座り込んでぐったりと意気消沈している慎と、すでに命を落とし心臓の止まった環が無残に横たわっているのを発見された――。

そのあと、慎は無断での新人による手術と独断での行動が問題視

され、医学会からは医師免許の剥奪の意見も上がったが、慎の腕や才能を認めることも多く、しばらくの反省も込めた謹慎処分と地方へと派遣が決められた。

その場所がここ、河守総合病院だった。

慎は一人で静かに荷物をまとめ転勤の準備をする。

その前に、慎は一人あの病気について研究をしていた。

世界各地を飛び、有名な医師の下でサポートを行い、解明へと急ぐ。

環を救えなかった。しかし自分は医師ということは変わらない。

今後、この病気の患者と出会ったときに治せるよう、力を、技術を、知識を、今より多く取り入れたいと思った。

そして十分な知恵を得とくした慎は、翔と巴のいるこの街へと訪れた。

全てを話し終え、慎先生は殻になったタバコのケースを握り潰し、いっぱいになり溢れ返っている灰皿を取りゴミ箱に捨てた。

静かに聞いていた翔は、少し戸惑ったがそっと口を開いた。

「……巴と同じ病で死んだんですね……。慎先生の恋人は……」

慎先生は再び席に着き残ったコーヒーを口に含んだ。

「……ああ。その通りだ。すでに末期で、奥深くまで進行しててね。今思えば、どうやっても助かるはずがなかったんだ……」

慎先生はふと笑みを浮かべ立ち上がると、棚の中から研究資料を取り出した。

そしてその中にある恋人である環の写真を眺める。

「……先生のことはわかりました。話してくれて嬉しかったです」

「いや、いつか話そうと思ったことだけだね」

黙っていても、おそらく創くんが教えるはずだからね。どちらにせよ知ることになったはずだ。

慎先生は写真を元に収め資料を戻すと、机の上にある巴のカルテを手を取った。

「私は身近な人の死を知っている。その辛さ、苦しさもね。だからこそ、君にはそんな二の舞を味あわせないためにあのときは怒鳴ったんだ。わかるね？ 命は重いけど脆いものなんだ。絶つことなど造作もないこと。君には、分かってほしいんだ」

翔は素直にうなづく。そして立ち上がった。

「先生の気持ちはわかりました。言いたいことも、分かってほしいことも……。でも、僕は巴の意志を優先したいです。それが僕の巴とした約束だから」

慎先生はじつと翔の目を見つめる。その視線をぐっと翔は軽く笑みを浮かべながら受け止める。

信じている。きっと、私ならこの病気を治せると。

だからこそ、安心して巴ちゃんの願いを叶えられると。

慎先生はふと口元を緩ませた。

いいだろう。君が信じるなら、僕も信じるだけだ。

慎先生は棚から小さな白い錠剤の入ったビンを取り出し翔の前に立った。

全て、君にかけようじゃないか……。

「これは僕が開発した病気の進行を抑える薬だ。朝昼晩の食後に一粒ずつ飲むと良い」

「え?」

「ちゃんと今の言うことを聞けば、巴ちゃんの外出を許可しよう」

「ほ、ほんとですか!？」

「ああ。しっかり、自分の務めを果たすんだぞ」

「は、はい! あ、ありがとうございます!」

翔は丁寧に頭を下げる。

「なら、さっさと帰って体を休めなさい。面会は明日から許してやる。その頃には巴ちゃんも目が覚めているはずだ」

「は、はい！ 失礼します！」

翔は勢いよくビンを握って出て行ってしまった。

慎先生は再び椅子に座り、予備で持っていたタバコを取り出し一服する。

病は気から……。

もしかしたら、翔くんのおかげで巴ちゃんの病気が治る可能性がある。

あとは、彼ら次第か……。

その頃、集中治療室で酸素マスクをつけて眠っている巴は、小さく口元を動かし、寝言のように呟いた。

「……か……ける……く……ん……」

第二十五章 共感

翔は朝早くから設定していた目覚ましを止め起き上がる。

すでに陽は昇り、鬱陶しい暑さや眩しさを感じながら、急いで出かける支度をする。

時刻はまだ十時前と、面会時間まで時間はあるが、それでもじっとしてられなく、朝食も食わずに自転車を走らせる。

向かう先はもちろん、河守総合病院だ。

休むことなく足を動かし飛ばした自転車は、いつもかかる時間よりずっと短い時間で到着した。

おかげでやはり面会時間はまだまだである。

息も上がり、体温が上昇して汗が滴り落ちていく。

それでも翔は中に入り、受付にいる知り合いの看護婦のもとに向かった。

「あら、翔くん。どうしたの？　こんなに早く」

若く可愛らしい看護婦は翔を見て少し疑問の表情で尋ねるが、若干の含み笑いを浮かべていた。

翔は少し迷ったが、正直に答えた。

「え、えと、その、面会時間を早めてもらえないかと……」

「え？ 巴ちゃんに会うために？」

看護婦の表情が一層いじわるそうな笑みに変わる。

「え、えと、そ、そうです！ 巴に会いに来ました。だから、そのっ」

「でも、まだ面会時間まで時間あるわよ」

「そ、そうですねっ。で、でも、そこを何とか、その、僕だけ特別に、お願いしたいと……」

「ふふ、ふふふふふ」

看護婦は突然口元を抑えて笑いをこらえるが、最後には大声で笑っていた。

その姿を見て翔は呆然とする。

「ふふ。ごめんね。笑っちゃって。別に、会いに行ってもいいわよ」

「え？」

「慎先生から特別に許可をもらってるわ。どうせ早く来るから通してやれって」

翔はちよつと恥ずかしそうに頬を朱に染めるが、今だけは慎先生に感謝した。

「あ、ありがとうございますっ」

「うん。早く行ってらっしゃい。まだ寝てるかもしれないけどね。あまり変なことしないでよ」

翔は最後に文句を言い残し、まだ人の少ない廊下を走ってエレベーターに乗る。

すぐに五階のボタンを押し、早く着かないか焦る。

そして五階に着くと、開いた瞬間再び走り出し502号を目指す。

ドアの前に貼られている名札にはしっかりと『春風巴』と書かれてある。

翔は軽く乱れた息を整え、そつと二回ノックした。

そしてガチャリと小耳の良い音を聞き、ドアノブを捻って中に入った。

「巴？ 起きてるか？」

そつとゆつくりと中に足を踏み入れる。

しかし、誰かが動く様子も声を聞こえず、静かな空間が広がっていた。

それもそのはず、巴はまだベッドの上で眠っていたのだ。

翔はそっと近づき、安らかに眠っている巴を見て、安堵の息を吐き微笑む。

そばにある椅子を持ってこようと手を伸ばすと、そこに一通の置手紙があるのに気付いた。

広げて読んでみると、差出人は慎先生だった。

『昨夜の内に集中治療室から運んでおいた 寝てるからって襲った
りするなよ』

「誰がするかよ……」

翔は手紙をぐしゃぐしゃに丸めるとゴミ箱に放り投げる。

改めて椅子を引っ張り横に座り、目の前で眠っている巴の寝顔を見つめる。

可愛い寝息を立て、何事もなかったかのように幸せそうな表情をしている。

翔はそっと腕を伸ばし、指でツンツンと頬を突いてみた。

白くすべすべしてもっちりとしている肌の感触。

指圧がわかったのか、『ううん……』と可愛らしいうめき声を上げる。

翔は起こさないようにクスクスと小さく笑う。

すると、巴の目がゆっくりと開かれ、長い髪を垂らしながら起き上がった。

「あ、起きたか」

「ん……。あれ？　なんで翔くんがここにいるの？」

「ああ。会いに来たんだよ」

「会い、に……。？」

そこで巴は顔をパッと真っ赤にさせ、近くにあった枕で自分の顔を隠した。

「な、なんで人の寝顔見てるのよお！　ヘンタイっ！」

「え？　いや、ごめん！　悪かった！　そんなつもりじゃっ」

「もうう！　まだ面会時間もまだなのに何で来てるのよ！」

「と、巴に会いに来たからに決まってるだろっ！」

そこで二人の口論が止む。

そして二人とも見つめたまま顔を染める。

二人はパッと視線を外すと、視線を下げうつむく。

「あ、ありがと。その……。ごめんね。いきなり怒鳴っちゃって……」

「い、いや、お、俺こそ、勝手に入ってごめん……」

気まずそうな空気が流れ、会話が進まなくなった。

巴は枕を抱きしめたままキョロキョロと視線を泳がせ、翔は乱暴に頭を掻き部屋の隅を見つめる。

そこであるものに気づいた。

微かに残る壁の染み。

白い壁にある茶色の斑点や液体の着いた跡。

それを見て理解した。

これは血の跡だ。

そこで翔は巴を見る。

巴は見られていることに気づくと、再びパッと枕で顔を隠し目だけを見えるする。

翔はぐっと拳を握ると、唇を噛み、ずっと頭を下げた。

「……え？」

「……ごめん。巴」

「な、なんで謝るの？ あ、さっきのことはもういいだよ。そこま
で気にしてないから——」

「違う！……俺は、本当にバカだ……」

翔の目から自然と涙が溢れる。それが拳の上に落ち、その量が多
くなっていく。

「な、なんで……泣いてるの……？」

巴が少し困惑しながら翔のもとにベッドの上から近寄る。

そこで巴はあるもの気づく。

ベッドの金属部分、壁にある染み渡った跡。

それだけで容易だ。ずっと繰り返してきたのだから。

巴は肩を落として脱力する。

「そっか……。知ってるんだ……。見られちゃったのかな……」

「……ああ。全部、見たよ……」

深夜に忍び込み、巴が闘ってきた病の真の恐ろしさ。

どれだけ苦しめ、どれだけ弱らせ、どれだけ絶望を与えるか……。

それを、巴は幼いころからずっと耐えてきたのだ……。

そして、翔に隠し通してきた……。

「はは……。ああ、そうなんだ……。ずっと、隠してきたんだけどね……。あはは」

巴は力のない笑みを見せる。

「発作もほとんど夜だから、このまま知られずに済むと思ったんだけど……。ばれちゃったか……」

すると、次は巴の目から一滴の雫が流れた。

「え？ 巴？」

巴は目にいっぱい涙を溢れさせ、悔しそうにぎゅっとベッドのシーツを握りしめる。

「……うつ……ふっ……。げ、幻滅したよね……。あんな、姿見て……。が、がっかりしたよね……。もう、私なんか……。会いたくないよね……」

震える中でも必死に話す巴の声。その声に翔は自分の涙を拭いて戸惑いを見せる。

「な、何言って……」

「私、怖かったの……。翔くんは、嫌われるんじゃないかって……。だって、あんな苦しそうな姿見たら、誰でも引いちゃうもん……。もう、来てくれなくなると思ったから……。だから、ずっと隠そう

って……元氣な姿だけを見せようって思っただけ……」

巴は何度も目を擦り涙を拭き取るが、それでも零れ落ちる涙はシートを濡らしていく。

「きよ、今日来たのは……ぐすっ……うっ……お、お別れを……言いに来たんだよね……？　これで……ううう……最後なんだね……。ふっ……。あふっ……。いいんだよ。き、気にしないで……。むしろ、今まで本当に、あ、ありがとう……。もう……。何年も、私なんかの……。ために、うっ……。ぐすっ……。良くしてくれて、嬉しかった……。よ……。か、翔くんは……。はあ……。うっ……。すごく、頑張ったよ……。もう……。自分が悪い、とか……。うっ……。ふっ……。き、気にしないでいいから……。これからは、一人で頑張るから……。だ、大丈夫……。だよ……。い、今まで……」

巴は今にも大声で泣き崩れそうなのに、我慢して自分の言いたいことをはっきりと伝えようとしている。

そして、

「ありがとうね。翔くん」

最後に涙まじりの笑顔を見せる。

そこで翔の感情は、嬉しくも、悲しくもなく、怒りが芽生えていた。

これは……。巴に見捨てられたのだ。

気づけば、翔はすっとその場に立ち上がると、ベッドの上に乗っ

かり、巴は優しく自分の腕の中に包みこんでいた。

「え……？ か、翔くん……？」

翔は巴の入院服もといパジャマをぎゅっと掴む。

翔の目には大量の涙で溢れていたのだ。

「巴……。そんなこと……言うなよ……」

「え？」

翔の抱きしめる強さが増す。

「もっと、俺を信じてくれ！ 巴のあんな姿見ても引いたりなんかしてない！ もうここに来たくないなんて思っていない！ これからも……ずっと……お前のそばに居ようと思って、俺はここに来たんだ！」

「か、翔……くん……」

「確かに責任は感じて……俺のせいで、巴は長期入院したと思ってる……。でも！ 俺がここに居続ける理由はそんなじゃないんだ！ ずっと、そのために通い続けたんだ……」

翔はそっと巴を離し、肩を掴んで見つめる。

「俺はお前が死ぬまでずっとそばに居続ける。お前の頼みなら何でも聞いてやる。もっと、俺を頼ってくれ。俺は……巴の力になりたいんだ」

翔の目から伝わる熱意と決意。

巴はそれをしかと受け止め、手で顔を覆い隠すと、コクッとうなずいた。

第二十六章 疑心

巴が目を覚ました次の日から、再び学校に行く計画が遂行される。

慎先生から渡された薬のおかげか、それまで起こっていた発作もそれほど起きることもなくなり、体にいくらか負担はかかっているものの、巴は笑顔を見せ続ける。

翔と巴が分かりあってから、お互い隠し事はすることなく、頼り、頼られ、二人三脚で歩んでいく。

それまで、二人は微妙に分かり合っていなかったのかもしれない。

言わば、全て自分のためにやってきた。

翔は自分の責任のため。

巴は嫌われたくないため。

私利私欲、自分を守るために……。

しかし、今は自分だけでなく相手のことも理解している。

もう一人ではない。自分だけの問題ではない。

二人が一緒なら、何も怖くない。

その気持ちで、二人の絆を強くした。

気づけば、月日は流れとうとう九月に入った。

事実、これは巴の寿命もあと残りわずかということでもある。

慎先生の適切な処置や薬での抵抗などで目に見えるような症状もなければ、はっきりとわかる衰退や異常もない。

そこがこの病の怖いところであるが、毎日の詳しい検査によりその進行具合がわかる。

巴の病を治すには、この一か月の間に処置を施さなければならぬ。
い。

それが過ぎれば巴の人生は終わりだ。

だからといってすぐに手術をすれば良いというものでもない。

慌てて行ってもすぐに命を落とすことになる。

適切な、絶妙ともいえる機会がなければ……。

その日も、翔と巴は午後から学校へと向かう。

ひぐらしの鳴く声や、子供たちの遊びまわる掛け声、暑苦しい太陽に、時節送られる涼しき風。

季節は夏。

夏休みというこの期間に、やれることは多くある。

花火や夏祭り、海水浴に森林浴、他にも風鈴、スイカなどの風物詩を感じ、季節を満喫するのも悪くない。

時間があるからやれることはたくさんある。

それを、翔は巴としたいと思っていた。

学校に着くと、やることは決まるようになった。

制服は事前に病室で着替え、教室に着くとやるのは二人で高校の編入試験対策の勉強である。

国語、数学、英語、理科、社会と五教科を中心に行う。

内容と難易度は中学の教科書なので、参考書や翔の持っていた中学時代の教科書を見ながら行えば教えることは苦にならない。

最後に自由時間ということで、巴が小説を書いている間に、翔は夏休みの宿題をする。

この流れが定着し、正直これでいいのか不安でもある。

もっとやりたいことはいろいろあるんじゃないかと思う。

確かに学校に来ているという実感は得られていると思うが、まだ何か足りないものがある気がする。

そこである仮説が立てられ、紙に集中して小説を書いている巴に、翔は椅子を斜めにして座り頭に両手をやりながら問いかける。

「巴……友達、欲しいか？」

「……え？」

突然の言葉に巴は戸惑いを覚え、ついペンを落としてしまう。

「と、友達……？」

「ああ。やっぱり巴だって、同じ年くらいの女の友達が欲しいだろう？」

「……………」

何気なく話す翔に対し、どこかジト目でこっちを見る巴がいた。

「……巴、どうかしたか？」

巴は机に肘を着いてその上に頭を乗せる。

「別に。ちよつとね」

巴はちよつとご機嫌斜めのように、不機嫌そうに答える。

「なんだよ。親切心で聞いたのに。友達いらないのか？」

「ううん。そんなことないよ。私だって、同じ年の友達は欲しいし。」

でもね」

そういつて巴はチラッと翔を見てすぐに唇を尖らせる。

「はあ？」

翔は巴が何を考えているのかわからず首を傾げていた。

翔と巴は病院に戻ると、巴をベッドに寝かせ元のパジャマに着替えさせる。

それが終了すると、翔はちょっと用事があるということで帰ることにした。

翔は自転車を漕ぎ、家に向かわずある場所へと向かう。

それは図書館だ。

今回は巴の病気について調べるのではなく、ある人物を探すためだ。

恐らく、今日もここにいるはずなのだが……。

翔は駐輪場に自転車を置き中に入る。

入った瞬間クーラーの効いた涼しい空気に包まれる。それと同時に本独自の匂いが鼻をつく。

翔はスタスタと中を見渡しながら歩を進めると、椅子に腰かけてノートに本の内容をメモしている知り合いを見つける。

その人物のもとに近寄り、向かい側の椅子に座った。

「久しぶり、逢坂」

「え？」

目の前にいる人物。それは逢坂薺だ。

薺は目の前にいるのが翔だと認識すると頬を赤らめ動揺する。

「え？ あれ？ ど、どうして、ここに……？」

「逢坂にちょっと用事があったね」

「わ、私に!？」

薺の驚嘆な声が響き、周りの人たちが怪訝そうな顔でこちらを見る。

薺は慌てて頭を下げ、翔に向き直る。

「え、えと、な、何……かな……？」

薺はちよっともじもじしながら待つ。

「ああ。逢坂は誰に対しても優しいし、明るいかから親しみやすいと思うって、ある人と友達になって欲しいんだ」

「?……友達?」

「ああ。友達」

翔は巴のことを薺に説明する。

今までの経緯、性格や趣味、見た目や雰囲気など軽く印象を与える。

翔は薺を巴の友達にしようと考えているのだ。

薺はさっきも言ったように優しく礼儀も正しいので、紹介するな
ら一番の人材だと思う。

全ての説明を終え、薺はうなづく。

「なら、いつも翔くんはその春風巴さんに会いに行くために毎日の
ように病院に通っていたわけなんだね」

「そうなんだ。このこと話すの薺が初めてなんだぜ」

「え? は、初めて……なの?」

「ああ。だから頼むよ。是非とも友達になってくれ」

翔はすつと頭を下げる。

薺は自分が翔から信頼されていると思い手で頬を抑え嬉しそうに
笑顔を見せる。

しかし、パツと表情を曇らせ、視線を落としてしまった。

「え、えと、あの……別に、友達になるのは、かまわないのだけど……」

「ほ、本当か？」

「う、うん……。でも、その前に、ちょっと聞きたいことが……」

「ん？　なんだよ」

薺はちよつと聞きづらそうに迷うが、視線をキョロキョロしてそつと窺う。

「あの、その、ね……。以前に、創くんから聞いたんだけど……」

そこで翔の眉がピクツと反応する。

「創から……？」

「う、うん……。それで、その……翔くんは、あの……」

薺は言いにくそうだが、重い口を開いて問いかける。

「……中学時代、毎日病院に行っては、看護師にナンパしてたってホント？」

「……は？」

翔はポカンと呆然とし口を開けて固まる。

薺は顔をさらに真っ赤にして慌ててキョロキョロしている。

翔は額に手をやり「はあ」と深いため息を吐いて椅子に深く座り直す。

あいつ、根も葉もないこと言いやがって。

「逢坂さん」

「は、はいっ」

翔は頭を掻きながら説明を始める。

「それが嘘か真か証明はできないけど、俺がそんなことするようなやつに見えるか？」

「……見えない」

「だったらどうでもいいだろ。言い訳していいなら、俺はそんなことしてない」

「……ホント？」

薺が上目使いになって問う。

「ホントだよ。どうしても気になるなら病院に行って看護婦たちに聞いてみる」

「う、うん。そうだね。翔くんはそんなことしないもんね」

「ああ。まったく、軽い冗談でも言ったんだろ。気にすんな」

「う、うん」

「でも、なんでお前がそんなこと気にするんだよ」

「え？ あ、いや、ちょ、ちょっと気になったただけだよ。そ、それより、友達になる話しだよね？」

「ああ、そうそう。それでな——」

二人は明日会う約束をし、その場を解散した。

第二十七章 友達

次の日、河守総合病院の前には翔が立っているのだが、その隣には一人の女の子もいた。

白いワンピースを身に着け、手には大きなバスケットの籠を提げ、頭には大きな麦わら帽子を被っていた。

ショートカットのサラツとした髪が夏風に揺れ、ゆっくりとなびいている。

「さ、準備はいいか？」

翔は普通の私服姿でポケットに手を突っ込みながら隣の女の子に問いかける。

「え、えと、で、でも……何を話せば……」

昨日約束したとおり翔のクラスメイトの逢坂薺が来ていた。

緊張のせいか、若干オドオドした態度で立っている。

「普通に友達感覚でいつも通りに話してくれたらいいよ。あいつも、そんな話せるほうじゃないし、人見知りするほうだからな」

「う、うん。なんとか頑張ってみる……」

「頼むぞ。それじゃ、行くぞ」

「う、うん」

翔はゆっくりと歩を進め、その後ろを薺はぎこちない歩みで追いかけた。

クーラーの吐いた適温の室内に入り、受付で軽く手続きを済ませ、看護婦たちに少しいじられ、エレベーターへと乗る。

昇っている最中、若干の気まずい雰囲気が漂っていた。

「ははは。……私が瀬川くんの彼女だなんて……」

薺は小さく「ははっ……」と笑いながら、頬を染めもじもじする。

翔は乱暴に頭を掻いてそっぽを向きながら言い訳する。

「あの人たちは昔っから知り合いだから、何かあるとすぐからかってくるんだよ。まったく、子供扱いしやがって」

「あの人たちから見たら子供じゃない？」

「むっ。そりゃ、そうだけど……」

そして目的の五階へと着き、多くの入院患者が集う病室へと歩く。

翔は502号室のプレートを見ることなく、そのドアをノックする。

「はい」

中から可愛らしい声が届き、翔は開ける前に一目後ろの緊張でプルプル震えている薺を見る。

「……いいか？」

薺は力強くうなづく。

翔はちよつと心配気味だったが、ゆっくりとドアを開けた。

「よ、巴。体調はどうだ？」

「うん。大丈夫だよ。いつも通りって感じかな。ええと、後ろの方は……」

「ああ。この前言ってた、紹介する友達だ」

「は、初めましてっ。せ、瀬川くんと同じクラスで、委員長してますっ。あ、逢坂な、薺ですっ。しゅ、趣味は読書で、しょ、将来の夢は、ほ、保健福祉士で、と、得意科目は、こ、国語で、え、えと、そ、それから——」

「逢坂、もういい……」

暴走気味の薺を止め落ち着かせる。

巴はベッドの上で苦笑いを浮かべてどうしたらいいのか混乱しているようだった。

「え、えと、逢坂薺さん？　でしたね」

「は、はいっ」

巴はパツと優しく微笑み柔らかく声をかける。

「こちらこそ、初めまして。私は春風巴といいます。瀬川くんの幼馴染で、17歳です。よろしくお願いします」

巴は最後に丁寧な頭を下げる。それを見て、薺もすぐに頭を下げる。

「い、いえ、こ、こちらこそ、よ、よろしく、お、お願いしますっ」

「はい」

薺は顔を上げ、ぼーっと巴の顔を見る。

「……良い人」

ポツリと呟き、翔は隣で肩を落とす。

そりゃそうだ。事前に友達が来ることを言ったら、どう接したらいいのか、どう自己紹介したらいいのか、何を話したらいいのかなど、昨日の夜電話で散々予習してたからな。そりゃ、準備バッチリだろう。

「あ、立ってないで、こちらにどうぞ」

「あ、はい。ありがとうございますっ」

巴に促され、薺はベッドの隣にある椅子に腰かける。

「じゃあ、俺はちょっと下まで行って飲み物でも買ってくるよ」

「「えっ？」」

二人は同時に声を発し、翔は手を振ってドアの前から消えてしまった。

取り残された二人は気まずい雰囲気になり、どちらも人見知りなので、なかなか自分から声をかけようとはしない。

巴も予習したのは自己紹介までで、それ以降は何も考えていなかった。

薺はどう会話を広げようか悩んでいた。

「え、えと、は、春風……さん？」

「あ、ふ、普通に……その、下の名前……でも……いいですよ……」

「あ、はい。えと……と、巴……さん……」

「は、はい……」

「えと、その……。……瀬川くん、遅いですね」

「そ、そう……ですね」

「……………」

「……………」

気まずい空気が二人を包み込む。

そこで薺は家から持って来たバスケットを思い出す。

「あっ、あの、私家からサンドウィッチ持って来たんです。良かったら一緒に食べませんか？」

「え？　ほ、ホントですかっ？」

巴の目が一瞬でキラキラと輝き始めた。それを見て薺も喜ぶ。

「はい。お口に合うといいのですが」

薺は一緒に持って来た紙皿の上にタマゴサンドとハムサンドを乗せ渡す

「どうぞ」

「ありがとうございます」

巴は歓声の上げ心底嬉しそうにサンドウィッチを見る。

あまりのオーバーリアクションの反応に、若干薺も苦笑していた。

「そんなにサンドウィッチ好きなんですか？」

「あ、いえ。私、人からこうやってお弁当感覚で食べ物を貰うの初めてなので。ずっと入院してたから、友達も翔くんしかいなかったし。だから、すごく嬉しくて」

そこで薺は全てを理解した。

目の前にいる同い年の女の子は自分とはまったく違う環境で育ってきたのだ。

学校に行けず、友達もおらず、満足に遊びに行ったり、買い物だつて行っていないだろうし……。

こうやって、いつもしている何気ない行動が、巴にとっては新鮮なものなのだ。

ならば、自分は普通に接すればいい。

それが、巴のためになるのだ。

「巴さ……ううん、巴ちゃん」

「は、はい？」

「一緒に食べよ」

薺は自分のサンドウィッチを持って優しく笑みを浮かべながら誘う。

それを見て、巴は嬉しそうに強くうなずいた。

「うん！」

その様子を、すでに飲み物を買って戻ってきていた翔はドアの隙間から静かに覗き見ていた。

見た感じだと、上手くいっているようだ。

翔は近くにある長椅子に座り、ふっと息を吐く。

上手くできるか心配だったが、何とか友達にはなれたようだ。

実際、この友達を作らせる計画はすごく迷い、今まで通り、自分だけがればいいと思っていた。

なぜなら、友達になった者には哀しみを与える可能性があるからだ。

そう、巴が死んだら永遠の別れ、言わば『死別』を思い知ることになる。

これがあるから今まで誰とも関わらず、そして秘密にして隠してきた。

誰だって哀しみや絶望を味わいたくないはず。

それが死別となると、また大きくなる。

味わうのは自分だけでいいと思っていたのだが、巴のために紹介してしまった。

もし薺を悲しませるようなことがあれば、自分が責任を持って慰めよう。

そう決意し、実行に移したのだ。

いや、もうこんなこと考えなくていいのかもしれない。

友達ができることは良いことだ。悪いことより、もっとプラスに捉え考えなくては。

翔は立ち上がると、ドアを開け中に入った。

「あ、翔くん」

「瀬川くん、おかえりなさい」

「おう。お、うまそうなサンドウィッチだな」

「うん。すごくおいしいよ」

「瀬川くんもどうですか？」

「ありがと。いただくよ」

こうして三人は会話に花を咲かせ、笑いの絶えない楽しい時間を送ることができたのだ。

第二十八章 焦燥

薺と巴が友達となり、それ以来薺は毎日のように巴のいる病室へと訪れるようになった。

時には翔が来る前からすでに椅子に座り、巴と楽しく笑いながら会話をしている。

さすが薺というべきか、数日であつという間に二人の距離を無くし打ち解け、何年も親友だったかのような口ぶりで接している。

翔にしてみれば、それはいいことなのだが、巴を取られた気もして複雑な気分だった。

正直言えば、三人できるとき、男である翔は少し会話に混じりにくいときもあり、そんなときは廊下で暇にする慎先生と話すようになってしまった。

「ははっ。友達を紹介するのは良いアイデアだが、すっかり取られてしまったね」

慎先生は缶コーヒーを飲みながら愉快に笑う。

「別に取りられたとかそんなんじゃない……。とりあえず、嬉しそうで良かったですよ」

「君はあまり嬉しそうじゃないけどね」

慎先生はいじわるそうに笑みを浮かべる。

「それより、巴の容体はどうなんですか？ 見た感じ、普通に元気な感じですけど」

「ああ。今は薬の効果や抗体などでカバーできているが、着実に悪い方向には進んでいる。早急に手を打ちたいのだが、問題は巴ちゃんの体力と手術をするタイミングだ。あと少しで良いんだが、何とか絶好の機会が訪れて欲しいものだ」

「そうですね……」

その頃、502号室では女の二人で会話に花を咲かせていた。

「巴ちゃんは小説が好きなの？」

「うん。読むのも好きだけど、書くのも好きなんだ」

「すごいね。ねえ、ちょっと読ませてよ」

「えっ？ だ、ダメだよっ。恥ずかしいよっ」

「ええー。ちょっとだけでもダメ？」

「ダメだよー。これだけはダメなのー」

「ううー。残念……」

「それより、もっと学校のこと話してよ」

「うん。いいよ。あ、そういえば、巴ちゃんの髪って綺麗だよね」

「え？　そうかな？」

「うん。私くせつ毛が強くて、そんなに長くできないんだよね」

「でも、薺ちゃんの髪も綺麗だよ」

「ありがと。あ、せっかくだから、櫛で梳かしてあげるね」

「ほんと？　ありがと」

巴は薺に背を向け、薺は椅子から立ち上がり、バッグの中から櫛を取り出すと梳かし始めた。

「すごい。サラサラだね」

薺は長く綺麗な黒の巴の髪を手に触れ、少しだけ目を細めた。

確かに女性なら誰もが憧れる黒くダメージのない巴の髪を見て羨ましがらう。

それに髪だけでなく、紫外線の影響のない白い肌に、ほっそりとした華奢な身体、傷のない手や足と、巴は理想と言ってもいいほどの容姿を手に行っている。

しかし、それを羨ましいとは思ってはいけない。

以前に、一度聞いたことがある。

巴は得たものの代わりに、多くの犠牲を払っているのだ。

それこそ、学校に行くことなのだ。

外に出ることもできず、満足に遊ぶこともできず、やりたいこともできず、制限だらけの自由のないこの部屋に閉じ込められ、毎日を退屈と競い合う日々。

得たものに対する代償は大きなものだった。

あなたならどちらを取るだろうか。

恐らくだが、私なら巴のような人生はすぐに捨てると思う。

前もって言うておくが、入院は学校が休める、ずっと寝られるなど、ずる休みのできる自由時間ではない。

逆に自由を奪われた、言わば牢屋に等しいのだ。

そんなところに何年も、何十年も居たいと思えない。

にも関わらず、巴はそれに耐え、こうして今も生きようとしている。

巴のその強靱な精神力と、生きたいと思う力は、どこから来るのだろうか。

「……ねえ、巴ちゃん」

「ん？ なに？」

「……巴ちゃんは、翔くんのことが――」

「ん……？」

巴が笑みを浮かべながら後ろを振り返り、薺は笑顔返して首を振った。

「ううん。何でもない……。そうだっ。学校の近くに新しい喫茶店ができたんだ。今度そこ行ってみよ」

「うんっ。私行ってみたいっ」

「決まりね」

薺は先ほどまで言いかけた言葉を心の奥底に強引に沈めた。

今は、このままでいい……。

そのとき、ドアが開いて飲み物を持って来た翔が入ってきた。

「あ、翔くん。おかえり」

「せ、瀬川くん、お、おかえりなさい……」

「おう。ただいま。髪梳いてるのか？」

「うん」

巴は嬉しそうにうなづく。

「薺もありがとな。毎日来てくれて」

翔はジュースを渡しながら礼を言う。

「う、うん。そ、そんな……。わ、私も夏休みは、その、暇で時間あるから……」

薺は頬を赤く染めもじじしながら、そっとジュースを受け取る。

「でも宿題とか、他の友達と遊んだりって大変だろ？ 無理しないでいいからな」

「う、うん。あ、ありがと……」

薺は顔を真っ赤にさせてうつむく。

そんな様子を見て、巴は微笑を浮かべうつむく。

そうなんだ……。薺ちゃん、翔くんが好きなんだ……。

巴はチラッと翔の顔を見る。

翔は薺との他愛ない会話で普通に笑いながら接している。

翔くんは、誰が好きなんだろう……。

薺は帰り、病室には翔と巴だけが残された。

面会時間ももう少しで終わりを告げ、外の景色は茜色に染まっていた。

二人でそんな景色を見ていたとき、巴がポツリと呟いた。

「……私って、あとどれくらい生きられるのかな？」

「え？」

翔は外の景色から目を外し巴を見る。

巴はじっと夕陽を見ながら続ける。

「私ね、死ぬ前に、あと一つだけやりたいことがあるの」

「えっ？ な、なんなんだよ、それって……」

巴は若干頬を赤く染めながら、少し恥ずかしそうに答える。

「それは、明日学校でいうね」

「巴……」

翔は少し呆然としながら見つめる。

巴は軽く笑っていつも通りに戻った。

「ふふ。ほら、そろそろ面会時間の終わりだよ。早く帰らないと、また怒られちゃうよ」

「え？ あ、ああ……。そうだな」

「うん。じゃ、また明日ね」

「ああ。またな」

そう言い残し、翔はドアを閉め帰ってしまった。

部屋の中で一人になった巴は、掛布団を握りしめ、ふっと息を吐いた。

「……私、焦ってるのかな……」

第二十九章 涙腺

午前に行われる巴の検査が終了すると、午後から日課となりつつある学校へと向かう。

今回は薺もあり、三人での登校となる。

翔と薺は高校の制服を、巴は薺の中学時代の制服を身に着け目的地へと向かう。

慎先生からの約束通り、薬を服薬すれば激しい発作は起こらず、巴のやりたいことができる。

短命である巴のために、今しかできないことをやろうと思う。

もちろん、諦めたわけではないが、最善を尽くすことが、今の巴にできる唯一のことだ。

夏の容赦のない猛暑を感じながら、青々とした空の下のゆったりと歩いていく。

国道の歩道を歩き、その横には大きな青海が広がっている。

時節聞こえるセミの鳴き声がいつそう耳に届き、それに混じって潮の満ち引きも囁く。

車椅子を押す薺は、何度も後ろを歩く翔を見ては頬を染める。

実は、翔と登校するのが前からの願望であった。

ちょっと理想とは違うが、変わりはない。

その嬉しさに、胸が躍るほどもあった。

そして新しく友達となった巴と学校に行くことで、嬉しさは隠せないほどだ。

しかし……。

薺はチラッと目の前にいる巴を見る。

そして薄く唇を緩ませた。

巴ちゃんは、翔くんのことをどう思っているのだろうか……。

その後ろを歩く翔は、波を立てる海を見ながら考えに耽る。

昨日言った巴のもう一つのやりたいこと……。

確かに学校だけが願望ではないとは思っていたが、あそこまで真剣にお願いする叶えたいこととは何なのだろうか……。

実は、昨日の夜から少し胸騒ぎをするのだ。

何か……とんでもないことを打ち明けるのではないかと。

その答えが今日わかるとしても、今は冷静さを保つだけで精一杯の状態だった。

そして、もう一つの気がかりなこと。

それは……。

その願いを、自分が叶えることはできるのだろうか……。

薺に車椅子を押され、海から漂う潮の香りと風を感じながらうつむく巴。

今日は新しい友達である薺と初登校なので嬉しい気持ちでいっぱいのはず。

しかし、昨日の言ったことが頭から離れず、さっきからずっと黙り込んでいた。

自分は何を焦っているのだろうか……。

どうして昨日はあんなことを口走ってしまったのか……。

わからない……。

今自分が求めているものは何なのか……。

このままでもいいのではないか？

このまま、楽しい学校生活を送り、毎日笑いの絶えない出来事を繰り返せば、それで十分のはずだ。

本来、自分は学校に行くことも、外を出歩くことでさえ禁じられているのに、それが自分のわがままで叶っているのだから、これ以上望むことは贅沢だといえるのではないか？

そう、それはわかっている。でも……。

巴はぐっと拳を握った。

死ぬ前に、これだけはやっておきたかった……。

例え、それが叶わない願いだとしても……。

学校に着くと、いつものように下駄箱で上履きに履き替え教室へと向かう。

そして薺も加わった編入試験対策の勉強を行う。

これが意味のある行為なのかはわからないが、学校に来たからには勉学に励むしかない。

一通り全ての科目を終え、自由時間となると、巴と薺は持って来たお菓子を食べながら楽しそうに会話をしている。

その間、翔は一人屋上で空を眺めながら寝そべっていた。

風に乗って流れる雲のように、時間も止まることなく進み、そして見えなくなるように、記憶から消える思い出……。

巴の寿命はもう一か月ない。

もし、この夏休みで巴が死んだら……。

たったそれだけの過程を思い浮かべるだけで、翔の胸は締め付けるかのように痛みを走らせ、緊張が全身に張り巡らせる。

翔はぎゅっと胸を抑えながら歯を食いしぼる。

怖い。

本当に、怖いものなんだとわかる。

死ぬこと、死別することは、まだ味わっていないのにもかかわらず、こんなにも怖いものなんだと……。

なぜ、人はこんなにも死を恐れるんだ……。

でも、そんなことはどうでもいいんだ。

今は、巴の力になり、悔いのない人生を送らせることが、自分の使命なのだから……。

例え、自分を犠牲にしても……。

屋上から教室に戻ってくると、中には薺の姿はなく、巴一人だけだった。

「あれ？ 逢坂は？」

「うん。ちょっと用事があるからって先に帰ったよ」

「そっか……」

「うん……」

巴は心の中でつぶやく。

ほんとは、半ば強制的に先に帰ってもらったのだけど……。

翔は巴の隣の席に座り椅子に背もたれながらうつむく。

同じように、巴も車椅子に乗りながら顔を下に向けていた。

今の二人の間には異様な空気が流れ、気まずさを物語っていた。

頭の中は昨日のことが何度も繰り返されていく。

知りたいのは、相手の気持ちだった。

「「あ、あのっ」」

二人は同時に声を発し、そしてすぐに止めた。

「あ、先に巴話せよ」

「い、いや、翔くんからでいいよ」

「お、俺のはどうでもいいことだから、巴から話せよ」

「……う、うん。わかった……」

巴は顔を背けもしもじしながら、口は冷静に話し始める。

「……昨日言ったこと、覚えてる？」

「……ああ」

翔は顔を外に向けてうなづく。

「……私ね、学校に行くことと、もう一つ叶えたい願いがあるの」

「……ああ」

「だからね、死ぬ前に、その願いを叶えたいと思ったの」

「……ああ」

「……うん。その願いはね……」

そこで巴の口が止まる。

今巴の心の中で自問自答が始まっていた。

この願いは打ち明けていいのだろうか。

だって、言えば翔のことだから叶えさせてくれるはず。

でも、それで自分はいいのだろうか？

相手の気持ちを考えたのか？ 薺の気持ちも考えているのか？

最後に自分勝手な願望を打ち明け、半ば強制的に叶えさせていいのか？

それで……苦しんだりしないのか？

巴の体が震える。

今になって後悔の念が襲い掛かる。

自分は卑怯すぎる。

今の状況を、自分のおかれた状態を利用し、好き勝手しているだけではないか。

こんなこと、許されるわけがない……。

「……ふっ……うっ……。くっ……」

「……え？」

翔は耳に聞こえた音を認識し、ハッと巴の方を向く。

巴は泣いていた。

嗚咽を漏らして、目には大粒の涙を溢れさせ、その雫が落ち拳の上に打ち付けていく。

「と、巴……」

巴は目じりを拭いて、必死に答えようとする。

「ぐすっ……。ご、ごめんね。なんでもないの……。うつ……。ほ、ほんとに、何でもないの……。ほんとに……」

何度も言い訳をするが、巴から涙が止まることはなかった。

何が自分をこんなにも泣かせてしまうのかわからなかった。

悲しいから？

哀しいから？

それとも怖いから？

それとも怒りからか？

正しい答えなどわからない。

ただ……。今は溢れる涙を止めることしか頭になかった……。

とうとう巴のもう一つの願いを打ち明けることなく病室へと戻ってきてしまい、疲れたのか巴はベッドに横になるとすぐに寝息を立ててしまった。

その寝顔をじっと見ながら、翔は呆然と立っていた。

巴の叶えたい願いは何だろうか……。

それは、今度はいつ知ることになるのだろうか……。

恐らく、そう遠くではないはず。

そのときになったら、その願いを叶えさせるために、全力を尽くせばいい。

翔は踵を返してドアへと向かい外に出ようと開ける。

しかし、

「え？」

ドアの前に立っていた人物を見て小さく驚嘆な声を上げる。

そこに立っていたのは……逢坂薺だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8815q/>

白い病院の中で

2011年8月28日22時51分発行